

始



日本海軍戰記

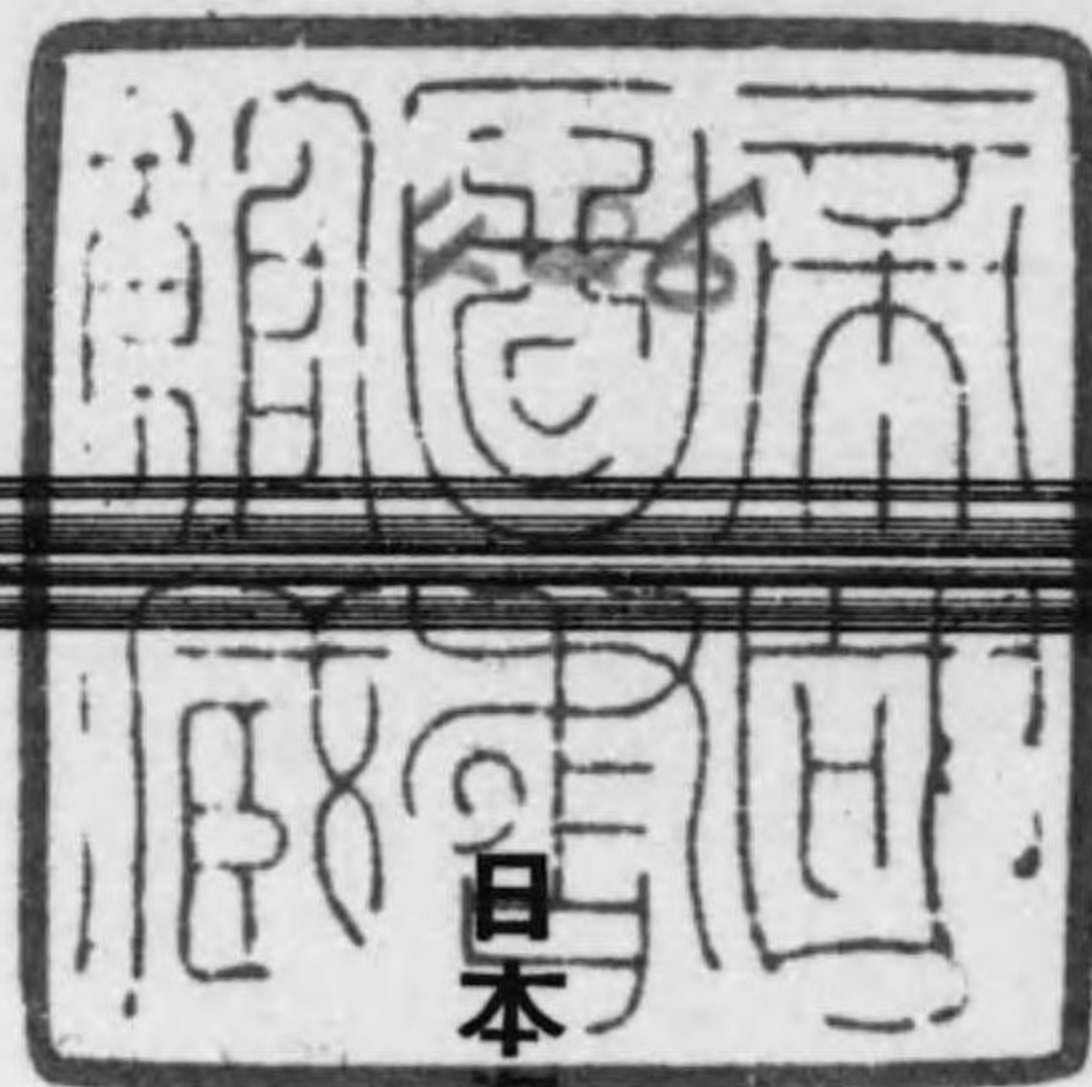
一
奴

海

皇
治
十
五

日本公論社版

特 232
759



海軍大將 加藤寬治 序
寺島樞史 著

日本海軍戰記

怒

濤

東京 日本公論社 版



序

軍事參議官
海軍大將

加藤 寛治

つらく、現下の情勢を見るに、日支の事態は尙ほ未だ完全に解決しては居らぬ。前途は滿洲問題を中心として形勢逆睹し難きものがあると共に、軍縮問題を始めとし國際政局亦暗澹として、到る處に低氣壓を認め、わが國は未曾有の國難に逢着して居る。

此の際に於て全國民が我國民の民族的使命を自覺して、眞に實力ある國軍を以て正義公道の擁護に邁進することは、常に我民族の存立上將又た將來の發展上必須の要求たるのみならず、蓋し人類を一如平等にし、六合を一都とし八紘を一字となす建國の大理想より致しても、東洋平和の保障より延いて世界人類の幸福と共存共榮との爲めにも當然の責務と信じて疑はざるものである。建國以來我國はしばしば國難に遭つたが、而も常に暗雲を排除して天日を見、以て今日の穴を爲すに至りたる

所以は、一に我々の祖先が我國家の使命に對する大自覺を有して居て、此の使命遂行の爲め、常に降魔の利劍を精銳にし、大敵たりとも不懼、小敵たりとも不侮、一身一家を捧げて國家の目的達成に邁進する國民的信念と、殉國の精神とが熾烈であつたからに外ならぬと思ふのである。

先づ何よりも 明治天皇の御理想を拜察すると、實に雄渾にして且つ壯大なるものがあることは明治初年の御宸翰中に

「列聖の御偉業を繼述し一身の艱難辛苦を問はず自ら四方を經營し、汝億兆を安撫し、遂に萬里の波濤を開拓し、國威を四方に宣布し、天下を富嶽の安きに置かんとす」

と仰せられた御言葉に於て明瞭に窺はれるのである。就中「萬里の波濤を開拓し國威を四方に宣布し」と仰せられた事を、今日から振返つて見れば、之は明治の歴史其のものであつて、明治の日本は實に此の如き雄渾壯大なる理想に出發し、奮進し而して榮えたのである。而して此の赫々たる明治史を作り出す爲めの原動力とし

ては先づ 皇室の御精神と、舉國一致に依る全國民の犠牲奉仕と正義に基く勝利の強き信念とを擧げねばならぬ。皇室の御精神は多くを申上ぐる迄もなく、同じく右の御宸翰に顯はれて居る所の 大帝の大御心に於て明白なるものがある。即ち

「今般朝政一新の時に膺り、天下億兆一人も其の所を得ざる時は、皆朕が罪なり」と仰せられて萬機親政の德澤を布かれ、御身を以て國難排除に精進せられたことが大日本皇室の御稜威となつて世界に光被し、中外渴仰の的となるに至つたことは明らかなる歴史的事實である。

國民の犠牲奉仕とは、即ち 天皇御自ら御一身の艱難辛苦を問はせられず、天下億兆の安危に任じ賜ふ、尊き大御心に對し奉り、國民全部が一切の自己本位をかなぐり捨て、同胞相愛の信に生き、國民と軍隊と一心同體となつて國事に奮闘することとをいふのである。

而して其の闘ひの最強の武器となつたものは、實に此の君民一致の愛と、國家民族の理想目的たる、正義の觀念即ち善の必勝を信ずる觀念との結成であつた。此の

同胞相愛の善の必勝を信ずる觀念の結成こそはとりも直さず 天皇中心の忠君愛國となるのであつて、一朝國を擧げて此の精神に一致結束するや歐米の如何なる知識にも、科學にも、又富力にも打勝つべき一の信仰となり、渾然たる大活力となり、日本独自の新天地を發見創造して更により新たにして大なる智慧と能力とを生み、過去幾多の國難を打開して、隆々たる今日の國家を形成したのである。

嘗ては支那の屬國とまで誤認せられ、李鴻章からは日本の山々の頂上まで耕されて居るのを見られて、此國貧弱憐むべしと傲語されたり、又提督丁汝昌が當時日本には一隻もなかつた七八千噸の甲鐵艦定遠、鎮遠より成る大艦隊を率ゐて、横濱に來航して威勢を示し、日本の高位高官を子供扱ひにして、西郷海軍大臣始め日本の朝野をして切齒扼腕せしめたこともあつた。日清戰役前の日本があゝの壯圖を爲し遂げたのも、將又た當時全世界の脅威であつた強傲露國を膺懲したことも、はては彼の滿洲事件の快擧と是に伴ふ國際聯盟の脱退も、皆窮して通ずる日本國民の偉大なる底力から生じた獨自な智慧と能力と精神の賜であつて、常に先人未發の創造を爲

し、必ず勝つと云ふ事を徹底的に信じて進む自信力の結果である。

我海軍の事だけ申しても、過去の大戰役の大捷の原因は決して偶然でなく、必ず敵に勝つべき自信ある要素——夫は軍の機密として公表は致されぬが——實に驚くべき内容の或るものを以て戰つたからであつて、悉く善の勝利を確信し我國家を深く信ずる所の思念又は精神から湧出した突嗟の創造が多かつたのである。

我國の現状が如何に危機に瀕するとも、徒らに自分のみの小天地に踟躕して泣言をならべず、確乎たる國家的信念を喚び起してあくまで善の大勝を信じ、一誠以て國と人にと盡したならば、新天地は求めずとも吾人の前に展開し、暗澹たる四圍を脱出して、赫々たる天日を見るであらう。志の有る處途あり、天は自ら助くる者を助くと云ふ事は、古い言葉ではあるが今日の場合に鑑みれば至言である。至誠の神に頼り責任と勤勞とを尊重し、積極進取、斃而不已、七生人間報國恩と云へる軍神廣瀨中佐の精神こそ、吾等を救ふ唯一の力であると思ふ。

此度、寺島証史君が、最近の著作になる日本海軍戰記「怒濤」を公刊するに方り

余に序文を乞はる。この書は、文久三年の薩摩海軍砲撃に筆を起し、日清、日露の大海戦を経て今日世界に覇を握るに至るまでの、我海軍の幾變遷、幾波瀾を、稗史物語の形式を以て述べたものであるが、小説にして小説に非ず、史傳にして史傳の形骸に墮さず、海國意識と日本精神の高揚てふ二大眼目に終始したる熱血紙背に透るの大文章で、しかも興味中心のうちに軍事思想の普及に叶ひたる好個の著作である。

一九三五、六年の危機に直面し、「海を護れ、太平洋に備へよ」の叫び海内に高き
の秋、日本民族精神を強調し且つこれを具現描寫せるところの「怒濤」一巻こそは、
日本海々戦三十周年、東郷元帥一周忌を迎へたる非常時國民必讀の書と信じ、一言
所感を述べて序と爲す所以である。

昭和十年五月

第三版刊行に際して

本書の初版は、日本海々戦三十周年を記念し、いはゆる海軍無條約第一年を迎へた昭和十年五月の比であり、第二版は昨十三年一月、日支事變が事態漸く擴大し國民が緊蹙一番を要する秋に生れ、第三版はその日支事變も滿二周年を迎へ、しかも國際情勢がめまぐるしく變轉し、國家愈よ多事なる昭和十四年七月に上梓の運びとなつた。すなはち本書は、期せずしてかゝる重大時局に對處するかのやうに、版を重ね世に公にせられた。之れ何かの因縁事と云はねばなるまい。その因縁に感應して、全國民が一人も多く讀まれんことを期待して、茲に普及廉價版を世に送るのである。

尙ほ初版に際して、題字及び長文の序を寄せられた海軍大將加藤寛治閣下は、既に故人となられた。改版に方りその序文をもつて再び巻頭を飾る所以のものは、今

日といへども炳として一世を指導するに足る、確乎不拔の論旨であり、國民等しく之れは身に體すべき不朽の文字であると信ずるからである。

昭和十四年七月

著 者 識

日本海軍戦記
怒
濤

奇 男 子

英國支那海鎮司令官海軍中將キユーバは、旗艦イユリアラス號の豪華な司令室で、綠酒の酔ひからさめ、寢椅子に横はりながら大きなあくびをした。

「まあ、やつと、お目ざめ？」
耳もとに、嬌麗な女の笑聲があつた。横濱出帆のとき、搭乗した代理公使、海軍中佐ニコールから買った女なのだ。

たかが、濠で稼いでゐた一朱賣笑だが、天性の才氣が、いつのまにか紅毛人相手にいげれす語をあやのるほどに商賣上手になつたといふ、こすもぼりたん氣質を骨の髄まで染みこませてゐる港の藝者おれんが、同じ深紅の椅子の端に腰かけて笑つてゐる。

「いや、あんたのお酌で、わたし、たいさう酔ひました。ありがとう」
キユーバ中將は、眞實うれしさうに身を起して、おれんの撫で肩を抱いた。

「おほ、あたしのやうな女の酌で、さぞ御興のさめることとござんしたでせう」
「いや、なかく愉快です。わたし、あんたの乗船されたことを、神に感謝します」



キューバ中將は、卓上のグラスのコップを取り上げた。

「あら、まだ召上る？」

「航海中は酒、これは、わが英國の、いや、わたしの、生活原則です。艦のことは艦長ジョスリン大佐に任しておいてよろしい。さあ、一つ酌をして貰ひませう」

友禪振袖の、一朱賣笑のおれんは、酌をしながら、

「でも、いくさが始まると、お酒など召上つてはゐられないでせう」

「なアに、かに股のやぶにらみのジャバニイス、サツマサムライの大砲など、蚊ほどにも思ひません。わたし、いくさの最中もあんたの酌で酒をのんでゐます、アハ、ハ、ハ、」

「でも、薩ッばは、がむしやらで向ふ見すですから、油断がなりませんわ」

「ハツハハハ、いくら強くとも、いげれすの軍艦をみると、腰を抜かします。日本には、まだ海軍と名のつくものはないはずです」

「でも……」

「いや、わが艦隊の威風をみなさい。まづ旗艦イユリアラス、これは乗組員六百名搭載の砲門四十六門、つぎにビヤール號は、人員二百十五名砲數二十一門、バーサス號は人員百七十二名、

砲數十七門、アীগス號は百七十名に十六門、それから、レースホース號は百十三名に十四門、コクエット號は小さいが、人員七十八名に十四門、バボック號は、すつと小さく五十名、十三門といふところだが、總計百一十一門の砲門をもつて、薩摩海を襲うたら、まあ、戦闘數時間にしてサツマサムライを一掃することができよう。なに安心してお酒をのんでゐる方よろしい」

「でも、なんだか心配になるわ」

らしやめんおれんは、わざ／＼眉をひそめてみせる。その姿が船室の仄明るい燈火の下に、いつとうピッチといった感じを與へる。

「心配とは、どちらのことですか。日本危いといつて、あんた心配しますか」

「いゝえ、わたし、だんなさまたちのことを、案じてますの」

「ハツハハハ、あんた日本人です、サツマサムライのために心配しなさい」

「いゝえ、あんな芋侍たち、見るのもいやですわ。ね、だんなさま」

汚女おれんは、キューバ中將に甘えかゝつた。

「御酒、もつとのみなさい」

キューバ中將は、グラスのコップを差した。

「いゝえ……あのう、どうしていげれすの軍艦が薩摩を攻めようとするのでせう？」

「それ、どうでもよろしい。あなた、わたしのおもちやでよろしい」

「でも……ね、だんなさま。どうして、いげれすの海軍が、薩摩を攻めるのか、教へてくださ
い」

「あなたも知つてゐるはずです。去年（文久二年）八月二十一日生麥事件といふのを」

「あゝわかりました。薩摩のお殿様島津久光といふ方が江戸をお發ちになつて、生麥へ差しか
かつたとき、異人さんがお供先を横切つたとかいつて、その薩摩の亂暴侍が、異人を幾人か斬
つたといふ、あの騒ぎですね」

「さうです。あのとき斬られたものは皆な、英國民、日本の野蠻國なることはかねぐ聞いて
るたが、日本刀を揮つて、逃るものを肩から掛けて斬り落した、その殺しやうが、餘りに慘酷で
した」

「ですから、その殺された方の仇を討つために、薩摩へ進軍なさるといふのですね」

おれんはそれだけのことで、軍艦を繰出さうといふのは、少し大袈裟だともつた。

「仇を討つためといふわけではない。わが代理公使ニコール君等が幕府と談判を始め、たうと

う幕府から十萬ポンド、つまり二十五萬兩、洋金にして四五萬元を償金として下させた。しか
し薩摩に對しては、遺族扶助料として二萬五千ポンドつまり六萬兩を要求したが、島津は出さう
とはしない」

「まア、ぢや、その六萬兩をださせるために、薩摩へ押かけるのねえ」

「當然です」

「まるで、借金とりみたいぢやありませんの、おほゝゝゝ」おれんは、仇つぼく、身をくね
らしてわらつた。キューバ中將には、おれんの笑ひの意味が呑み込めない。

「なぜ笑ひます……」

「だつて、仇討なら仇討らしく、初めから、お金のことなぞ口へだすものぢやないわ。もつと
きれいさつぱりと、殺された人たちのために、いくさをなさるといゝわ」

「しかし、談判の結果が、幕府が二十五萬兩、島津が六萬兩といふことに、償金がきましまし
た。わが英國としては、まづ、島津に對して、權利を履行するまでのことです」

「でも、變ね……もつと、何か深い意味があるんぢやなくつて？ ね、だんなさま、教へてく
だいな」

一朱賣笑の奥の手をだして、おれんは將軍にしなだれかゝる。

「いや、ほかに意味ありません」

「でも、ニコールさんが仰しやつてたわ。こんどの薩摩征伐を機会に、日本を、攻めほろぼさうと……」

「ニコール君、そんなこと言ひましたか」

「はい、それをきいて、あたしどんなに喜んだかしれません」

「よろこんだ？」

キユーバ中將は驚いて、再び身を起した。

「あたし、日本がはやく、いげれすの屬國になることを、のぞんでるんですもの……」

そのとき、扉をノックするものがあつた。

どどど……ん。

中天高く、轟いた一發の烽火、つゞいて、二發、三發……。それッ！英艦だ。

手具脛引いて、待ちうけてゐた暴慢な英國艦隊がおしよせてきたのだ。島津藩、鹿兒島城下はにわかに騒然となつた。

英艦來！ 英艦來！

義憤に充てる一藩の血は燃えに燃え、たぎりにたぎり、老若男女のきらひなく、みな海岸に集まつた。

それは、六月二十七日午前十時のこと、一本、二本、五本、七本と、橋頭高く英國々旗を翻した七隻の大船が、果して薩摩灣の入口たる山川口に姿をみせた。

英艦隊はだんく、灣内に深く進み、やがて濱から三里の沖合なる谷山郷の七ツ島に投錨した。

異様な黒船、濛々たる黒煙。海岸に集ふ人々はたゞ呆氣にとられて、それを望見するばかり……。

しかし、町人婦女子が、ほんやり海を壓する英艦を眺めてゐるまに、谷山郷の役人の警報によつて、城下六組の兵と旗下が、あらかじめ定めてあつた部署について、海岸や臺場を守ることになつた。

臺場は合計八ヶ所。薩摩灣では、砂揚場、大門、新波戸、祇園の洲の五ヶ所。櫻島では袴腰、烏島、赤水の三ヶ所。それく、血に燃える薩摩隼人たちが、命を的に死守してをる。

けれど、その日は、お互に睨み合ひの姿で、火蓋を切るまでにいたらなかつた。薩摩隼人たち

が、一刻も早くいくさがしたかつたのだが、らしやめんおれんを抱いて緑酒に親しんでをる英艦隊司令長官キューバ中將が、まだ司令塔へ上らぬからいくさにはならぬ。

いや、おれんの言葉をかりるまでもなく、キューバ中將の腹は、まづ戦端開始の前に六萬兩の償金が欲しいからだつた。六萬兩を、旗艦まで持つて來させておいて、それから徐ろにアームストロングをお見舞申さうといふのだ。

内外八ヶ所の臺場はおろか、遠く城下の各所の固めにまで巨砲をブツ放すと、やがて島津久光自身が白旗をあけて、わが旗艦イユリアラス號に司令長官キューバ中將を尋ねて來るにちがひない。さういふ腹であるから、キューバ將軍にしてみれば、徒らに發砲するまでもないと、タカをくゝつてゐるのだ。

『みだりに、英國皇帝陛下のだん丸を棄てるでないぞ』
と、心につぶやいてゐた。

それだけに、一方薩摩軍人たちの氣がいら立つばかりだ。いや、島津久光自身が一刻も早く、いくさがしたいのだ。

そこで、待ち切れず、こちらから發砲……といふわけにもいかず、先づ、軍役奉行折田平八を

遣つて、わざとどばけて來意を問はしめた。

キューバ中將は、やはり酒を飲んで、折田に會はうとはしないで一封の書狀を渡した。折田は、その場で封を切つた。

果して、それは遺族扶助料六萬兩の請求書だつた。

『これを支拂へばよろしいのか、他に用件は、ござらぬか』

折田は、とほけ顔に、通譯官のシーボルドを介してキューバ中將にたづねた。まるで貸した金を取立てに來たやうな氣である……と、折田は内心、英艦の司令長官を見縊つた。

ところが、二度目にシーボルドが長官の旨を傳へたのが、加害者の死刑、償金は二十四時間以内にせよといふ難題だつた。

おや／＼こいつア少々手強いぞ、とおもつたが、やはり平静を裝うて、

『いかに、御尤もでござるが、生憎と、わが君修理の太夫殿には、御病中にて霧島の温泉へ療養にお出でになつてをられるで、これからすぐに急使を立てても、貴意の如く二十四時間内にその使ひが歸つてくるか來ぬかが疑問でござる。いや、二十四時間はおろか、三十時間が四十時間でも返答は致し兼ねる。とにかく歸藩の上、成るだけ早く返答することに致さう』

と、巧に外交的の言辭を弄して、折田は一先づ引上げて、このことを復命に及んだ。

『よし、やっつけてしまへ』

島津の藩主は、目尻をあけて怒つた。もとく薩藩の意向は、英艦を迎へて一戦をいたすことにあつた。ことに血氣の士は、臺場の威力を頼んで、英艦如きは苦もなく撃退し得るものと信じてるた。いや、あわよくば、七隻ごとく拿捕できると、蟲のよい考へを抱いてゐる者もあつた。

とにかく、そのまへに、薩藩の戰略としては、英艦隊の主立つた者共を、談判にことよせて上陸させ、これを血祭に擧げようといふのだつた。

そこで今度は、折田平八の代りに、二度目の使として伊地知正治、これは薩藩でも名うての奇男子だつた。後に明治新政府の左院議長となり、時の大官連を子供扱ひにして、容捨なくやつつけたといふ、そのころの大久保彦左衛門といつた男。

維新の際には、身體が小さいので號令がゆき届かぬといつて、いつも高足駄をはいて千軍を指揮したといふほど、身幹が小ッほけだが、精悍な氣性にいたつては、江藤新平にも劣らなかつたといはれてゐる。

そのやうに、體が小ッほけでおまけに狀貌が醜怪、眇眼のうへに、足に異狀あつて跋をひいて歩くといふ、大分たいへんな代物だが、殿様自身が見込んで使者に立てたほどあつて、膽力の据わつた聲の大きい、一度の會見でよく相手を併呑するといふほどだから、こんな非常時のお使者には、はまり役かも知れない。

そこで、伊地知は妙な眼付をして、跋をひいて小さい體を高足駄に乗せて、堂々と乗り込んでいつた。

今度は、何思つたか、キューバ中將が、ぢかに會つてくれた。伊地知の顔が醜惡なので、それがみたさに、おれんの腕を無情に解いて甲板へやつてきたのでもあるまい。

伊地知は、キューバ中將の顔を見ると、いきなり、

『あんた、酒をたべてをりますな』といつた。

まさに、虚を衝いたわけだ。

キューバ中將も、さるもの、奇男兒伊地知に一本きめこまれて巧にそらした。

『貴國の風光が、あまりよろしいので、それを肴に一杯やつてをりました』

『酌をするものがなくて無聊でござらう。上陸して、田舎藝者だが、城下の女を相手に盃を

傾けては如何でござる」

伊地知は、まづ、酒と女で、誘惑しようと試みた。

「ところが、女に不自由はしません。おい、副官、おれんしやんを、これへ呼んできて、お使ひの方にお目にかけるがよろしい」

中將は、副官をかへりみた。モリソンが、しかめつ面をしたが、上官の命令やむを得ず、船室へ下りていつた。

伊地知は、眇眼を光らして、

「船中に、女を圍つてござるか……」と、呆れてたづねた。

「わが英國艦隊では、將官はみな女を連れて乗組んでゐる。妻と同伴のものもゐるし、らしやめんを愛してゐるものもある」

「ほう……それで、いくさができますかな」

「これは、西歐のならばはしです」

そこへ、副官と共に振袖姿のおれんが現れた。

「だんなさま、御用は？」

キューバ中將は、顧みて、

「お客さまがみえました。御挨拶をなさい」

と伊地知を眼で知らした。

「この方……薩摩の芋……いゝえ、あの、お使ひの方」

おれんは、醜怪な伊地知の顔をみて、身震ひした。伊地知は、おれんを、ぐいと睨みつけて、

「閣下」といつた。キューバ中將は、おれんの容姿を賞めてくれるのかと思つてか、

「なんですか」と、奇男兒と汚女を相互に見比べた。

「先般も、使者を以て申し上げたとほり、わが君修理太夫殿が留守故、ことに海と陸との隔たりは、萬事につけて不自由でござるによつて、上陸あつて、ゆるく談判をなされては如何」

伊地知は、改まつて言つた。

「いや、上陸するよりも、このおれんしやんの側にある方がよろしい。歸つてその趣をお傳へください」

「しかしながら……」

「いや、多少の不自由は、もとより承知である」

伊地知は考へ込んだ。これは尋常一様的手段ではいけない。藩としての最後の戦略を試みるよりほかはない……と。

「このやうに、碇泊してをられては、飲食物にも不自由を來すでござらう。何によらず、遠慮なく申下さい」

と柔かに出た。中將は黙つてゐたが、おれんは、ねだつた。

「ねえ、だんなさま、お野菜が食べたいんですもの……」

「さうか、あんた、野菜食べたいか、なるほど……では」といつて、中將は向き直り、

「實は、蔬菜の缺乏を來して困つてゐます。希はくば明日からでも、新鮮な蔬菜の供給がねがひたい」

と言つた。伊地知は、うまくいつたといはぬばかりに、でも、それを面にはみせず、

「それは、いと易いことです。では明日から、さつそく蔬菜を送らせませう」

そのまゝ歸藩、事の山を藩主はじめ一同に傳へると、みな手を打つて喜んだ。いよくこの蔬菜の供給に託して壯烈な英艦内への斬り込みとなる。

あくる日から、蔬菜を積んで傳馬船が沖の英艦へ通ふ。この好機を利用して、回天の壯舉に、赤

髭どもの荒膽を打挫かうといふのだ。

決死の壯士が七十餘名、このうちには、大山彌助、西郷從直、仁禮景範、篠原國幹、伊東祐亨、赤塚源六、貴島宇太郎、永山彌一郎等といふ人々が交つてゐた。みんな、縞の單衣の着流しといふ商人姿に身をやつしてゐるが、腰には用意の一刀を帶して、七艘の傳馬船に乘組み、これを西瓜船と見せかけて沖へ向つたのである。

いよく、出發といふ前に、修理の太夫と久光公に訣別のお目どほりを仰せつけられたが、いざ退出といふときに、久光公は、一同にむかつて、

「英艦七隻を拿捕するにあつて、旗艦だけは傷つけぬやうにするがよい。上洛、歸藩の時、余が召料にしたいから」といふ、胸のすくやうな命令だつた。

「ははッ」

大山、西郷の面々は、ことごとく喜んだ。何しろ、久光公からけしかけられたのだから、逸る心彌がうへにも勇み立つのは當然。

かうして、決死の薩摩隼人七十餘名が七艘の西瓜船に分乗し、四挺櫓の船脚も疾く、やがて英艦七隻の側に横付けにされた。篠原、伊東、西郷はじめ、商人に化けた壯士は、傳馬船のうへで

大きな西瓜を差しあげながら、

「うまい西瓜をもつてきたから船に揚げろ」

と叫んだ。手真似で交渉するものもあつた。が、その西瓜が怖ろしい西瓜なので、いくら食べたくとも、うかつに舷艇を下すわけにはいかない。艦上の赤髭たちは、手を振つて、

「ノー〜」と叫ぶだけだつた。

西瓜に仕掛けがあるわけではないが、人斬り庖刀を腰に差した、一癖ありさうな面魂の商人たちが眼光鋭く肩をそびやかし、吠えつくやうに叫んでゐるので、あだやおろそかに西瓜商人を軍艦へ招くことはできないのだ。こちらは、一刻もはやく西瓜とともに敵艦上へ、決死の斬り込みがしたく、腕が鳴つてかなはぬ。藩の戦略としては、この斬り込み隊が登艦すると同時に五ヶ所の臺場から砲弾の雨を浴せかけ、かくて、内外の挾撃によつて一舉に敵をみなごろしにしようといふのであつたが、こちらの考へ通り、赤髭たちは西瓜のために生命をすてようとはしない。

「おーい、西瓜だ。捨て賣りの西瓜だ。はやく舷艇をおろせ」

斬り込み隊は、夜店商人のやうに聲をからして叫ぶが、相變らず「ノー〜」の一點張りだ。

「うぬ、どうでも、われ〜を上船させぬなら、いよく砲撃だ、覚えてろ」第一番船の篠

原が、口惜しがつて泣き聲で怒鳴つた。

「臺場には、二十四斤加農砲が据ゑつけてあるのがわからぬか」永山彌一郎が力みかへつた。

「八十斤ポンブ砲だつてあるぞ、畜生、いまにしろ」赤塚源六が腕を叩いてみせた。けれどもどの艦も舷艇を下ろさうとはせぬ。このとき、旗艦、イユリアラス號の甲板に、でうん〜振袖をひるがへして、嬌慢な姿をみせたのがおれんだつた。

おれんは、舷艇に立つて、傳馬船を見おろし、

「まア、おもしろい西瓜なのねえ」と、なつかしさうに言つた。

篠原たちは、英艦の甲板に、思ひがけぬ振袖姿の女をみとめて、おや！ と叫んでしまった。逸る心が、ちよいと、たち〜となつたかたち。

おれんは、どよめく斬り込み隊を抑へるやうに、甲板のうへから、

「ねえ、薩摩で、できるのは、お芋ばかりかと思つたら、西瓜もできるのねえ」

この冷嘲を浴せられて、薩摩隼人たちは再びカツとなつた。

「おのれ！ 賣國奴！」

「犬畜生、人でなし、よくぞ吐かしたな！」

血氣の壯士たちは、思はず腰の一刀に手をかけてしまった。そして、それに気がついたときはもう遅かった。折角西瓜商人に化けてゐながら、たうとう尻尾をだしてしまつたからだ。英艦の赤髭たちは、このさまをみて、それみたことか、といはぬばかりに、下ろしかけた舷艇までも引つ込めてしまつた。

「女、おのれは一體なんだ」

篠原は、口惜しまぎれに、また怒鳴つた。おれんは、いよく賣女の笑ひをわらつて、

「おほ、一體なんに見えて？」

「おのれは、犬だ、畜生だ」

おれんはそれを軽く受流し、

「おや／＼、あたしが犬なら、おまへさんたちは、狼でせうよ。そんなところで、齒をかみ鳴らすなんか、みつともないわよ」

「おのれ、おのれ、いまにしろ、二十四斤加農砲を、お見舞申すぞ、おほえてろ」

「まア、二十四斤だとき……たつた、それッばつちの小さな大砲でいげれすの軍艦にかつて來ようなんか、身のほどしらすといふものよ。こちらには、憚りながらアームストロングといふ

恐ろしい大砲がいくつもあるのを、おまへさんたちは知らないの……」

おれんの冷罵は、いよくきびしい。

「おのれ、賣國奴！」

「おや／＼、こんどは賣國奴？なるほど、あたしア、こちらの御厄介になつてゐるわ。だつて日本なんか、いまにいげれすの屬國になるぢやないの。そしたらあんなたちも、やがていげれす人になるぢやないの。いまのうちこちらに降参して、いげれす人の靴でも磨いたらいゝわ、おほ／＼……」

赤塚はもうたまりかねて、西瓜船の舷べりに足をかけた。

「おい、どうする」

大山彌助は、その袖をとらへた。

「黒船によち登り、あの憎らしい女を、なますのやうに斬り刻んでくれる」

「さて、たかが女一人」

「だが、あるまじき雑言、許しておけぬ」

「といつて、單身艦上へ躍り込んだところが無駄死だ。口惜いだらうが待て。一旦は引返し再

びこれへ参るときは、われ等が日頃の砲術の腕をみせてやるときだ。引返さう」

「……………」赤塚の両眼からは、大粒の涙がほろ／＼とこぼれた。おれんは、なほも甲板で、黄色い聲を張りあげてゐる。

「おや、どうしたのさ、その口惜さうな顔つたらないわ」それを、聞き流して、破天荒の壯舉も得るところなく、斬り込み隊は怨みを呑んで引揚げてゆく。

東郷少年の強情と波に浮く大砲

その時、東郷平八郎は、辨天波戸の臺場の固めに加はつてゐた。東郷は、まだ十七歳の少年だつた。いくさは初めてだが、兵兒としての膽力は充分に据わつてゐた。いや、東郷のみでなく、内外八ヶ所の臺場固めに加つてゐる少年たちには、浮腰の者は一人もゐないはず。それらが、壯者、老人の中にまじつて甲斐々々しく立働いてゐる。

英艦が沖合に碇泊して威嚇してゐるのに、瀕の方では、まだ砲撃合圖の號砲を鳴らさぬので、臺場固めの老若は、いづれもあせりにあせつてゐる。

斬り込隊が、西瓜船を仕立てて英艦を襲はうとして、反つてらしやめんおれんのために冷罵を浴せられ、空しく引揚げたなどといふ報せも、一向に耳にせぬ臺場の人々にとつては、海岸固めの方で、何を愚圖々々してゐるのか、てんで合點がいかない。

「かうなるからは、面倒だ。海岸固めの方の合圖をまつてをられぬ。こちらで合圖をしてやらうぢやないか」砲撃方の貴島太郎が、血氣の少年たちを、けしかけてゐる。

「やらう、やツつけよう」

若手砲手の某が、すぐに二十四斤加農砲の背後に立つた。東郷少年は、砲手のそばへつかくと進んでいつて、

「待つてくださる」と

「何だ？」

「辨天波戸の臺場が、ぬけがけの功名をしようといふのは、いけないと思ひます」

「何い、貴島どんは、年上ぢやないか。年上の命令には従はねばならん」砲手はきびしくはねつけた。

「ですが、ぬけがけの功名は、いけません」東郷少年も、なか／＼強情だ。

「ちや、貴公に、妙案があるのか……」

「妙案がある！」

「では、どうするんぢや？」

「妙案は、海岸方の、つまり藩の参謀の、一齊射撃の合圖を待つにあると思ひます。それを待つてをるのが、妙案なのです」

「黙れ！」

弾薬方の貴島老人が、云ひ張る二人の中へ入つた。

「ま、まちなされ、味方同志が争つてをる場合ではない。なるほど東郷どん、貴公のいふとほりやはり合圖によつて、五ヶ所の臺場からの一齊射撃がよろしい。……諸君も、いまま少しの辛抱ぢや」

さう静かにおさへておいて、東郷少年にむかひ、

「東郷どん、貴公も、いつに變らぬ強情ぢやのう。ハツハ、ハ、……」

もと／＼洗つてみれば、早くいくさをして、英艦七隻砲諸共に拿捕したいからの議論なのだ。口を噛んでしまふと、お互に相手の氣持がよく呑みこめた。

「東郷君」若い砲手は、もう笑顔をみせてゐる。東郷も、これに答へて笑顔になつた。

「君の意見にしたがつて、もう少し待つが、そのかはり、撃ち出したらやめんぞ」砲手は、氣勢をあげた。

「それにしても、英艦の奴等も呑ん氣ですね。何をしに鹿兒島へやつて來たのかわからん」

東郷とて、焦つてゐることに變りはない。このとき、一人の足輕が東郷のそばへやつてきた。

「東郷さん、母上さまが御面會でござります」

屯所の方へ来てみると、母の益子が長次といふ小者を従へて控へてをる。益子は、そのころ三十八歳。

「母上、如何なされましたか」東郷少年は控所へ母を招じて訊ねた。

「平八郎や、いくさはまだ始まらぬ様子です」

「はい、英艦と交渉中とみえます。でも、おツつけ火蓋を切ることでせう」

東郷には、戦争直前の苛立たしい氣持は微塵もない。いつものやうに大人びた口のきき方だ。益子は、頼もしくおもつて、

「この辨天波戸と祇園の臺場が、このたびの海戦には、一ばん大切なところと聞き及んでをります。その臺場固めに加はつたおまへは、冥加だと思はねばなりませんぞ」

母の言葉は、落着いたうちにもわが子の初陣を勵ます情熱が潜んでゐる。

「はい、それはよく心得てをります。此の度のいくさで、わたくしも、はじめて紅毛人の砲弾の下を潜ることができるので、何より嬉しいと存じます」

「おまへは日頃強情だが、その強情も、かういふ時には、よい方面につかはねばなりませんぞ」いつも、母上さまを手古摺らしてをりましたが、今度のいくさでは、赤髭どもを手古摺らし

てやります」

「オホ、おまへに強情を張られたなら、いくら強い紅毛人でも敵はぬでせうよ」

「お殿様は、いくさの前にわが薩州の健兒たちに、いげれす軍艦を七隻共生捕にせよとの訓辭でございました。お殿様も私に負けず強情なお方だと思ひました」

「オホ、そんな事を仰しやられましたか……ときに平八郎や、おまへたちも、いくさの仕事で忙しく、さぞお腹も空かしてゐられるかと思つて、好きな薩摩汁をたくさんつくつて参りました。皆さんとお上りなさい」さういつて小者の長次にむかひ、

「お前、その鍋をこれへお出し」

「はいお坊ちやま、此の大きな鍋をもつて、此處まで來るのは、それはく難儀でござんしたよ」といつて、いさゝか手柄顔にそれを出したのは、五升焚きほどもあらうと思はれる大鍋、母の心盡しの薩摩汁がこぼれるばかりに満たされてゐる。

「おう、御苦勞……では、早速同志のものと戴くことにしませう」

「お坊ちやま」

「なんだ」

「初陣で、さぞ嬉しいことだと思います。長次も、つくづくうらやましくございます」
「うむ、いまにみてをれ、いげれず軍艦七隻、大砲諸共生捕にしてみせるぞ」
そこへ彈藥方貴島がやつてきた。

「ほう、これは東郷どんの御内儀、ようこそ」
益子は、それと知つて、丁寧に會釋し、

「貴方さまにも、御機嫌よう……此の度は倅が御厄介になりました」

「いや、平八郎どんも、こちらの固めに加はられて、われくも百萬の味方を得たやうに思つてをります」

「ほんのまだ子供でございます、かへつて足手纏ひでございます」

「いやくそんなことがありますものか。たつた今もな、我々老人たちの輕卒をたしなめてくれたほです、ハハハ……」

「貴島さん、これは、母の心盡しの薩摩汁でございます」と東郷少年は大鍋を指さした。

「ほう、それはく。どれ、諸君と共に戴くとしようか」

いくさの前の靜けさ。が、それもひと時であつた。

六萬兩の賠償金は借金ではない。だから談判折衝の如何によつて拂ふ、拂はぬは決まるのだ。ところが、英艦隊の司令長官は、それをあくまでも貸金のやうに心得てゐる。可愛いおれんに笑はれても、その考へだけはすてない。つまり大英國の權利だといふ氣構へなのだ。薩藩の重臣たちのうちにも、この六萬兩を借金のやうに思ひ込んでゐるものがないではなかつた。

「幕府は既に莫大な償金を支拂つた。當藩も支拂はねばなるまい」といつてゐる。

それどころか、重臣のうちには「償金のカタに、こちらの汽船でも押へられたら大變だ。いまのうちに匿しておくかぎり」と、主張するものがあつた。

いや、主張するだけではなく、血氣の士には告げずに、英艦來航に先立つて藩の大切な汽船天佑丸、白鳳丸、青鷹などを、鹿兒島灣から七里隔つた脇元村の沖へ匿しておいた。

さうして借金取りがやつてきて談判を開始したが、英艦司令長官キューバ中將は談判折衝見込なしとみてとつて、案の條、なにか抵當物件はないものかと灣内を物色したが、きれいさつぱりして六萬兩のカタにおさへるやうなものがない。

「おい、副官、薩摩には汽船があるはずだ。どこへ匿したか？」

キューバ中將は、まだ醉眼朦朧として、副官に訊した。あたかも副官が薩藩の汽船を匿したか

のやうに。

「ハッ閣下、小官の知らぬことであります」

「ばかッ！ おまへの責任ぢや……」

ところが、六月二十九日から暴風となつた。怒濤山の如く、艦の動搖が激しいため英艦は碇泊の位置を變へなければならぬ。そこで、小池村を距る千ヤードの沖合に避難した。みると、はるか彼方に汽船の櫓がみえた。脇元村沖にかくまつてある薩藩の汽船三隻が英艦に発見されたのだ。副官は司令官室へ飛んでいつた。

「閣下！」

「何だ……また、おれんしやんの顔がみたいのか」

「閣下、薩摩の汽船が……」

「なに！ 薩摩の船が、押寄せてきたか？」

キューバ中將は、驚いて寝椅子から飛び上つた。

「いや、かくまつてあるところがわかりました」

「な、なぜ早くさうと言はぬのぢや」

「はい、灣外の入江に錨を下してをります」

「よろしい、すぐに拿捕にとりかゝらう。天候險惡を好機に灣外へ去つたとみせかけて、その汽船をみんな拿捕するんだ。わかつたか」

「はい」

「しかし、わが艦隊七隻悉く向ふ必要はあるまい。五隻でたくさんだ。我輩は此處で、おれんしやんと待つてゐる。取おさへ方を僚艦へ信號しろ」

やがて、五隻の英艦は鹿兒島灣から姿を消した。内外八ヶ所の臺場を固めてゐる薩摩軍人が、これを怪しんでゐるうちに、七月二日早朝、その五隻の英艦が貸金の抵當物件を拿捕して、意氣揚々と戻つてきた。三隻の汽船は、時價三十八萬八千弗。これを分捕つて鹿兒島を引揚げようとは、聊か蟲がよすぎる。

大切な汽船を、賠償金の抵當にとられては薩藩の面目は丸潰れだ。陸の連中は、いまや勘忍袋の緒を切らした。

開戦の合圖！

大久保市藏が、天保山にその旨を通知に馳つけた。と、その開戦合圖の號砲の、まだ鳴らぬう

ちに、どこかの臺場から、二十四斤加農砲が、ドカンと發射された。

海岸の勇士たちが、おや？と思つてみると、辨天波戸の臺場からつゞいて第二彈が發射され、白い煙がバツとあがつた。

それッ！と天保山へ到着せぬまに、内外八ヶ所の臺場と一齊に火蓋を切つた。耐へに耐へてゐた滿腔の敵愾心が、一時に勃發したのだ。

それよりさき、英艦が三十八萬八千弗の抵當物件を握つて意氣揚々と戻つてきた時、それを眞先に發見したのが東郷平八郎。薩摩汁の腹拵へが充分できて、初陣の焦燥をじいッとおさへてゐた平八郎は、

「貴島どん」と、低い力こもつた聲で、彈藥方の貴島老人をかへりみた。

「おい」貴島は、顔をあげた。みると、わが藩船が情なくも英艦に降伏して従つてゐる。

「これは……」と、呻いた。

「貴島どん、そろ／＼始めてはどうです」

東郷少年は、食事でも始めるやうな調子で、いくさの火蓋をきらうと、彈藥方をうながした。

「さうだ、ヤツつけませうか」

そこで、ドタ……ン。第二彈を、英艦めがけて發射して様子をかゞふと、果してそれが開戦合圖となつて、八ヶ所の臺場が相次でドカーン、ドカンとやりだした。さアおもしろくなつてきた。臺場固めの青年達、雀躍りした。

「東郷どん。二十四斤加農砲は、なか／＼物凄い音を出しますなア」貴島が言つた。

「しかし、名前が二十四斤加農砲だとか八十斤暴母加農だとかいつて、如何にもでかい大砲のやうだが、彈丸があんまり遠くまで往かんやうですな」

東郷少年は、英艦砲撃を實彈射撃の演習のやうに思つてゐる。

「でも、海岸固めの連中の使つてをる竹のさやのはまつた木砲よりはよいですよ」

「さうですかなア」

東郷少年は、しきりに小首をかしけながら彈丸を運んでゐる。日本は、いつまでも、こんな大砲を使つてゐるたんで、世界の大勢におくれる。何とか研究して、日本でも立派な大砲をつくるやうにしなければならぬ。

いくさをしながら、海國日本の將來を講ずるのだから、この少年の強情もさることながら、その沈着に驚かされたのは、貴島一人ではなかつた。

「それ、英艦も射ちだした」

陣笠を冠つた連中が騒ぎだした。英艦も、いよ／＼應戦したのだ。ドドン……ンといふ砲聲はこちらとは比較にならぬ程大きい。アームストロングが唸りだしたのだ。

「貴島どん、大砲といふものは筒口を上に向けるほど、弾丸が遠方にゆくものでせうな」
東郷少年の研究熱はまだをさまらない。

「さういふ事になりませうな。然し、火薬の強い弱いもありますぞ」

「成程、してみれば大砲ばかりを立派なものに造つても火薬がそれに伴はぬといけませんな」

「あ！英艦が一艘やられたぞ」

誰か、耳もとで叫んだ。

そんなことはあるまい、と思つて東郷少年は、素足に草鞋ばきの若侍の指差す方をみると、なるほど英艦の一艘パーサス號が、胴中を一發やられて火煙をあげてゐる。

「おや、櫻島の袴腰臺場から射つた弾丸らしいぞ。うまくやつたなア」

誰かそれについて叫んだ。いかにも羨ましいといはぬばかりに。

「しかし、袴腰の臺場がいゝところに構へてゐるからだ。あの壘壁の真下に英艦が投錨してゐる

るのだから、あれぢやわけがないね。あれでは、砲を回轉するまでもない。照尺を計ることもい

らぬ。弾丸をこめて、上から見下して射ちさへすればいゝのだから、格別の手柄ぢやない」

東郷少年の負けず嫌ひが、そんなことを呟かした。

「だが、手柄だ、手柄だ」ほかの誰かゝ、横合から口を出した。

「手柄なものか、だいち敵艦の砲列をみるがいゝ。みな、灣内の臺場の方を向いてゐる。櫻島

に臺場のあることを知らないから、あんなとこに投錨したのだ。そこを不意射ちだ。忍んで行つ

て後からバツサリやると同じことぢや」

「ハ……また、平八郎どんの強情我慢がでたぞ」

しかし、それが本當なので、みんなは、東郷少年の説にしたがつて、あの負けず魂に好意ある笑ひをよせる始末。

パーサス號が、その態で不意を喰らつて狼狽、應戦の勇氣どころか、錨を巻くひまもなく、鐵鎖をねぢ切つて這ふ／＼の體で着弾區域外へのがれ、他の艦も僚艦の一頓挫に英氣を阻喪して頻りに無駄弾丸を射つてゐる。其中にあつて獨り旗艦イユリアラス號のみは、その偉力を誇るアームストロングの火蓋を切らぬ。旗艦にある司令長官キューバ中將は、そのとき何をしてゐたか。

かれは辨天波戸の砲聲を司令長室の寢椅子の上で聞いたのだ。

「おや」「おや」

閣下とおれんが、同時に「おや」といつた。

つゞいて第二弾。こんどはおやく／＼どころではなくて、二人とも寢椅子からころがり落ちた。

甲板に出てみると、たいへんな騒ぎになつてゐる。震へおの／＼おれんを抱きよせながら、

「艦長、ジョスリン艦長、何を愚圖々々しとるか」と、怒鳴りちらした。

ジョスリン艦長は副長ウエルモット少佐と共に司令塔に上つてゐる。戦闘準備を急いでゐる様子。のんだくれの司令長官など信頼できるものかといはぬ許りに、キューバ中將の怒號に應へなかつた。中將閣下は、火のやうに怒つた。

「艦長、……いやウエルモット副長、き、貴様アおりて来い」

薩摩が、よもや挑戦しまいと思ひ込んでゐたのに、それを裏切つて、向ふからズドンをやりはじめたので、それを皆、艦長や副長のせるに怒つてゐるのだ。副長は、司令塔をおりてきた。

「閣下、みらるゝ通りの状態です」

「おい、副長」

「はッ」

「彈藥庫の前に積んである金、幕府から得た二十五萬兩、あれを片付けることをお前に命令する」

「それは……」

「いや、副官が責任をもつてやりたまへ」

「戦機を逸する恐れがあります」

「黙れ、上官の命令だぞ」

そこで、償金を取片付けにだいぶひまどつて、單獨に鹿兒島の主力臺場たる辨天波戸や新波戸の砲撃にかゝつたときは、鹿島島灣は砲煙に閉ざされてゐた。

八ヶ所の臺場が頻りに加農砲を、ドカン、ドカンとやらかしてゐる時、一方海岸固めの連中は何をしてをつたか。無論晝寢をしてはゐなかつた。焼酎をのんでゐるものでもなかつた。

みんな——老若男女が、瀧の浮沈の場合とあつて、素足に草鞋をはき、袴のもゝ立を高くとりうしろ鉢巻凛々しく、砂原を、石ころ道を、右往左往してゐた。馬上豊に、長身の槍をしごいて沖の英艦の胸腹を只一突きにと身構へてゐるものもあつた。斬り込みの決死隊を出さうと、血眼

になつて叫んでゐる者もある。拔刀して、沖を睨めつけてゐる者もある。一列横隊になつて、西洋銃でねらつてゐる一團もあつた。兵糧をせつせと運ぶ士族屋敷の女房もあれば、女だてらに、小銃をかついで繰出す娘子軍もあるといつたありさま。

いや、賑やかなこと、騒々しいこと。國家の浮沈を思つてか、薩藩の緩急を考へてか、みんな沈痛な顔で沖の黒船を睨めつけながら働いてゐる。なにしろ、竹の筒のはまつた木砲や、二十四斤加農で海岸から射ださうといふのだから、臺場固めの方とちがつて距離があり、まだるつこいこと、到底お話にならぬ。

沖の黒船からはアームストロングや米式九吋加農といふ物凄いのが飛んできて、城下の後方まで射こまれるが、こちらから射だす弾丸は十町か二十町とんで波間にボチャン……と落ちるといふ有様だから業の煮えること夥しい。そこで、氣の短い連中は、そんな時代おくれの大砲を傳馬船に積んで、エッサエッサと漕ぎだした。陸で射つてもあたらぬので、沖へ漕いで出て、黒船めがけてぶつ放した。だが、まだ命中しない。腕が悪いのではない、大砲が時代遅れなのだ。

『もつと漕ぎ出せ、もつと〜』
ころ合ひはよしと、またぞろぶつ放したが、さらに手答へはない。

『それ、もつと漕け』
それでは、拔刀斬込隊と同じだ。なまじ大砲など擔ぎだして、手足纏ひだといふことがわかつた。

そのうち、英艦のアームストロングが、唸りをあげた。その一弾が、木砲積んだ決死の傳馬船の舳にあつた。

『あッ！』乗組の勇士達が思はず叫んだ。傳馬船はぶくぶく水船になつた。と、船が沈み勇士達が溺れかゝつたので、僚船がそれつと許り救助にきてみると、をかしい事には大砲が波間に浮いてゐる。

『ほう、石が流れて木の葉が沈むといふやつか』

僚船の勇士達は苦笑した。大砲が波間に浮くなど、あんまり情ないと思つたが仕方がない。流れる大砲に抱きついて恨めしさうに沖の英艦を睨めつける者もあつた。

『今にみる、立派な大砲をつくつてみせるぞ。覚えてゐろ』

強情我慢の薩摩隼人たちだ。波間に浮き沈みながら、口惜涙をボロ〜こぼしてゐる。

こんな有様で、英艦隊に太刀向つて勝負がないわけだが、不思議なことには英艦の新兵器ア

ムストロングが臺場にも海岸固めの方にもあたらぬのに、チビな時代おくれのこちらの大砲丸がうまく命中し、英艦は段々受太刀になつてゆく。

それは、つまり人間の意氣、精神力の差異なのだ。のんだくれ司令官と、六萬兩と一國を賭ける久光公の意地とのちがひ……。

心意氣ばかりではない、天祐でもあつた。

のんだくれ司令官が、償金取片付けに夢中になつたのと、パーサス號始め、皆櫻島から大砲を浴せられようとは思はなかつたからだ。

何よりも天候險惡が禍した。刻々戦況が猛烈となり、英艦隊は一回もしくは二回旋轉して廻り撃ちをやつたが、波浪が荒い爲照尺が定まらない。かて、加へて艦の操縦が意の如くでなく、臺場から射ち下す砲弾にやられるといふ始末。つまり、神風が吹いたのだ。たん／＼たる激浪に加へて猛雨が沛然として車軸を流すやう。元寇の昔の船いくさのやうであつた。

こんな有様で、パーサス號がまづ着弾區域外へ逃れたのをきつかけに、續いて六艘も抵當物件として拿捕した三隻の汽船を曳いて、同じく着弾區域外へ遁去した。

その途中で、リースホース號が祇園臺場下の淺瀬に乗りあけた。僚艦がよつてきて、坐礁せる

リースホース號を扶け、連れ立つて着弾區域外へ逃れようとおせつてゐる。

このさまをみて、よろこんだのが、祇園の洲臺場の砲手伊東祐亨。

『どつこい、二艘とも打沈めてくれん』とばかり、二十四斤砲を射出したが、先にも言つたとほり、舊時代な大砲のことゝて、まだるつこいことお話にならぬ。砲丸を大砲の先からこめ、ガタン／＼と回轉させ、照尺を定めてやつと射つと、そのあとで砲身をきれいに拭つて、またも先からこめるといふ始末、そのあひだ五分も七分も經つ。

二艘とも沈めようと狙つたが、そんなわけで一艘も打沈めることができず、沖へ逃してしまつたので、伊東を初め並る血氣の青年たちは、地團駄踏んで口惜がつたのは無理もない。

しかし、二艘一度に打沈めようとおせつて一艘も成功しなかつたが、伊東砲手のうつた砲弾が思ひがけなく旗艦イユリアラス號の司令塔に命中した。

司令塔には、やはりキューバ中將はゐらなかつた。甲板にも立つて居られぬ暴風雨を幸ひに、例の司令官室で、おれんを相手に酒をのんでもゐらなかつたであらうが、とにかく司令塔に立つてはゐなかつた。お蔭で命許りは助かつた。

助からぬのは艦長ジョスリン大佐と副長ウキルモット少佐の兩名。舊式な丸にあたつて、仲好

く戦死をとげた。勿論、名譽の戦死だが、兩名とも薩藩の砲撃に忤みを呑んで討死したといふよりも、司令長官を憎悪しながら死んでいつたのが事實だらう。

そこで、キューバ中將が、おれんのでやかな愛情を振り切つて司令塔へのほつたころは、もう七隻の英艦ことごとく着弾區域外へのがれたあとだつた。かれは、胸を張り威風堂々と司令塔に立つてゐた。いかにも大英國の支那海鎮司令長官としての貫祿をみせて……。

「どうぢや、サツマの臺場は、もう慘々の状態だらう」

「たしかに、それとうかゞはれます。しかし……」

「なに、しかしとは？」

「はい、味方もかなりの損傷のやうであります」

「黙れ！、我輩が、この通り元氣で司令塔に立つて敵を睥睨してをるではないか」

「はッ」

副官も、何やらわからぬ。

「まだ、いくさは終つたのではない。臺場の大砲丸は、沖の黒船には届かぬが、英艦の砲弾は時折忘れた頃空を飛んでくる。大抵は、天へ斜に發砲されるものとみえて、弾丸は遠く城山を越え

て、峰の向ふに落ちた。

そのうちに夜が来た。英艦は、沖合遠く灯を消して、ひっそり閑として碇泊してゐるが、陸地では當夜の警戒は愈々業々しかつた。相變らず、騎馬が飛んでゐる。徒歩の武將が沖を睨めてゐる。島津家代々の馬標をたて、あるひは甲冑に身を固め、弓を手に矢をえびらに、槍を提げ銃を携へ、千差萬別の武者姿で、夜を徹して海岸を警備してゐる。

奇男子伊地知正治は、何をしてゐたか。かれは甲冑に身を固めて、例の高足駄で、槍を杖に砂地に立つて下知してゐた。かれは、英艦が着弾區域外へ去つたのを誰よりも口惜がつてゐた。決死隊を募つて自ら先頭に立ち、沖へ夜襲を試みようとする第一番に主張するのも伊地知だつた。

それには、わけがある。あの妖麗牡丹のやうな英旗艦上のらしやめんの姿が、眼にチラついてかなはぬからだ。民族性の剝落した女が、心の底から憎々しかつた。

「あの女を掴まへて、白粉首を引つこ抜いてやらねば胸が納まらぬ」口へは出さぬが、その憎悪が夜襲を主張させたのだ。それは、伊地知一人ではない。赤塚源六も、それだつた。永山彌一郎も同じ氣持であつた。

「おのれ、汚女め、猥女め」と、口のうちに呟いて、憎々しげに砂を踏みにじつた。

けれど、何分にも猛雨だ。波浪が高い。沖合ひ遙に傳馬船を漕ぎ出しても無駄骨だ。詮方なく夜明けを待たうといふことになつた。朝になつて、いくらかなきたころ、夜襲ではなく白兵戦を試みようとして、それを樂しみに、伊地知はやつと胸を押し沈めた。西瓜船で乗りつけて、らしやめに冷罵された赤塚も、夜明けを頻りに待った。

ところが、夜が明けて、さて決死隊を出さうといふ段になつて、英艦は何を感じたか、ぞろぞろと鹿兒島灣を退去し始めた。行きがけの駄賃にアームストロングを二三發陸地にお見舞ひ申して、沖合はるかに姿を消してしまつた。それで、いくさは終りだ。

「いつたい、いくさは、どつちが勝つたのだ」伊地知は口惜まぎれに、眇眼を怒らして天に吠えた。

「さア、どつちが勝つたのかな」誰にも、勝敗がわからなかつた。

英艦が退去して、あとで調べてみると、燒失家屋が市家が三百五十戸、士家が百六十戸、合計五百十戸、どうやら、この分なら味方の敗戦らしい。が、更によく調べてみると、戦死者はたつた一人、負傷者も四五人といふ有様。どうも、これだけでは負けたとも思はれない。久光公をはじめ實戦にたづさはつた勇士たちにも勝敗の見當がつかかねた。

「わからん。英艦は遁走したのか一時引揚げてなごをみて再び襲來する腹か、どうもわからん」さういつて、半信半疑のまゝ、武装を解かず構へてゐるが、一向に英艦は姿をみせない。それもそのはず、英艦七艘は、錨を切つてそのまゝ、横濱へ去つたのだ。

久光公の腹の蟲が、どうしてもをさまらぬ。

「なぜ、英艦を拿捕しなかつたか、余の召料にしようと思つた旗艦イユリアラス號を取おさへて來い」といつて大久保市藏等を叱つた。

大久保達にしてみれば、味方が夫々の損傷で敗れたのだから、寧ろ案外といつてよい……といふ腹だつた。だから、久光公の怒りも、一時の感情にすぎないとみてとつた。

ところが、薩藩の大勢が敗戦説に傾いてゐるとき、「いや、確に味方の勝でござる」といつて、頑としていひ張つたのは、辨天波戸の臺場を固めてゐた連中。なかでも東郷平八郎は、「英艦が鹿兒島へやつてきたのは、償金六萬兩を取るためと、加害者を死刑に處するためであつた。それが何ひとつ得られず退出したのだから、當然勝はこちらのものだ」

事實そのとほりに違ひない。だが、東郷少年の説なぞ耳にもかさなかつた。

するうち、七月一日、横濱へ廻航した英艦の司令長官キューバ中將は、やつぱり、よつぱらひ

口調で、

「此度の戦ひは、明らかにイギリスの敗戦である。夫を充分に認める……」と力説した。をか
しな力説もあつたものだが、それもまた大英國流かもしれないと、幕府方では感心した。

感心しないのが、薩摩江戸留守居の岩下佐次衛門。さつそく、京都と薩摩へ飛脚を立てた。

「いげれす軍艦の司令長官が、敗戦であると聲明したぞ」といつた意味の報告である。

「なるほど、やつぱり味方の勝ちいくさか」薩摩では、やつと胸なでおろしてよろこんだ。

こちらは、キューバ中將、敗戦の聲明をなして置いて、あらためて「鹿兒島灣へ置放してきた
錨を返却して貰ひたい」と、あらためて薩藩へ要求した。

たかゞ錨ぐらゐる……と思つて、薩摩では直に海底から引揚げて送り返した。あとでは是をきいた
伊東祐亨、東郷平八郎など年少氣鋭の士は、藩の重臣たちの仕打を大層怒つた。

「軍艦が錨を置いて去るのは、一國海軍の最大恥辱だ。それを無條件で返すなどとは、何事か」
と言つていきまく。藩の重臣たちは、錨が、そんなに海軍にとつて大切なものか分らなかつた
が、東郷たちにさう言はれて、

「なるほど、さうか」と思つたが、既に後の祭り。案の定キューバ中將は、錨を受取ると、す

ぐに手の裏を返すが如く、

「遺族扶助料六萬兩を、薩藩に代つて仕拂ふがよい、これは萬國公法である」と弱腰の幕府を
おどしつけた。

幕府は驚いて、薩藩にこれを請求する。とゞのつまり、やつぱり六萬兩を拂ふことになつてし
まつた。薩摩は戦争に勝つて、談判に敗けた。この例は、その後屢々起つた對外交でくり返して
ゐる。

無口な、謙遜な東郷さんが、その都度、自國の外交家の軟弱外交に腹をたてたにちがひない。
けれど生涯政治に口出しをしなかつた。鹿兒島の變に、薩藩が外交談判に敗けたときも、むろん
口惜さに血の出るほど唇を噛んだらう。

それにしても、伊地知等の憎んだらしやめんおれんは、その後どうなつたか。

お江戸好み

榎本釜次郎は文久二年幕府から選抜されて、オランダに留學し海陸軍の戦術から、國際法までも研究し、六年後の慶應三年あつぱれ新知識となつて歸つてきた。御徒町の釜さんの人氣はたいしたもの、公儀でも待ち兼ねてゐたので、三十一才の釜次郎に軍艦乗組頭取といふ重い役を振り當てる。

おまけに、神田和泉町に邸をくだされ、從五位下和泉守とまで出世した。當り前なら、もう是れだけで上つてしまつて、鼻高々と飛ぶ鳥を落すいきほひで、御勘定方榎本園兵衛の子だなどといはれるのを厭ふのだが、釜さんは、いつ迄たつても釜さんで一向高ぶらない。

和泉町の豪大な邸にゐるときは町内の誰彼の訪問を受けて、あぐらをかいて世間話もするといふくだけかただ。本當に、さばけた釜さんだが、さて、軍事の事になると、とても難し屋だ。殊に、薩摩が、幕府の海軍をないがしろにして、のさばり始めてゐるのを見るにつけ聞くにつけ、齒を食ひしばつて口惜がる。

まもなく、伏見鳥羽の戦争、釜次郎も大阪に興味したが、時利あらず、薩長土肥の聯合軍のために劣勢にある幕軍はさんぐくの敗戦、將軍慶喜公に従つて江戸に歸り、海軍副總裁となつたが、どうも憂鬱だ。

「芋達に、いくさに敗るなんか、江戸ッ子の名折れだ。みんな幕軍がいくぢがねえからだ」
閨々のうちに酒、酒、酒……。酒のうちにも、幕軍の再興を策して勝麟太郎などに謀つたが、安房は用心深く、なか／＼榎本の遠大の計畫に同意してくれない。

「意久地なしめ！ そ、それで徳川の祿を食んだ人間か」と、口の端にまで出して思つてゐる。何しろ、あちらに六年もゐて西歐文明の空氣に十二分に觸れてきた急進思想家であらねばならぬのだが、一面には、徳川の恩顧を骨の髄までも感じてゐる江戸ッ子の悲しさに、論理や條理を忘れて情に生きようとする。

そこで、またも酒、酒、酒……。海軍方の役人を連れて、下谷や烏森などで痛飲する。血の氣の青年たちは、勝の條理よりも榎本の人情を好んで、みんなこちらによつてくる。

「困つたことになつたわい、釜次郎奴、事を構へるやうなことをしなくくれるとよいが……」
と、勝は、ひそかに氣を揉んでゐる。

ある夜も昔馴染の下谷の川又で、釜次郎は痛飲淋漓。そのお座敷へ出た藝者のうちの一人が、榎本をみるなり、

「おう、釜……」と思はず口走つて、俄に朱唇をおさへ、

「榎本の御前」といつて、にじりよつて来た。

「釜……」と言はれて榎本はびつくりして、下谷藝者の顔をみた。無論、並居る海軍方の役人も、ほかの藝者もみんな其方をみた。

それは、川又の抱へ妓の勝奴といふ、すつきりした江戸前藝者。

「御前、お久しぶりね」

あらためて、御前とはいつたがいかにも馴々しさう。釜次郎は、じつと勝奴の顔をみてゐるうちに、

「お、お前はお勝坊ぢやねえか」

といつて、勝奴の纖手をぐいと握つた。お供の役人やほかの藝者は、いよくわからなくなつてしまつた。そんなことにかまはず釜次郎は、

「いや、久しぶりだ。お勝坊がどうしてまた、こんなところに」

といつて、しげ／＼と勝奴の顔をみる。こちらもなつかしさうに見上げたまゝ、

「だつて釜さんが、薩摩つほうに負けて江戸へ歸るなんか、あたしが、藝者になつたことよりか、よつほど不思議ぢやない？」

「なるほど……赤面の至りさ。然し何しろきれいになつたなア」

「まア、釜さんだつてお立派になりなすつたね」

「いや、とても意久地のねえ海軍々人さ。ところで父は？」

「死にました」

「うむ、おふくろは？」

「おつ母さんを養ふために左棲をとつてますの」
一寸しんみりなる。

「さうか……」海軍副總裁の肩書が、どうも邪魔して、名乗りをあけたが、それ以上艶つほく又しんみりする事ができない。そこで宴席をいゝ加減に切上げ、席をかへて二人だけになつた。釜次郎の和泉守は、すつかり昔に返り、

「お前が、いきなり釜……といつてくれた時、俺ア、本當に嬉しかつたぜ」

「あたしだつて、お勝坊といはれたときは泣きたくなつたわ」

「何しろ、俺が十七八、おまへが七ツ八ツの頃だ。遠い昔の物語さ」

「その頃、釜さんに飴ちよこを買つて頂いたわね」

「さうだつた。飴ちよこを買つてやつて、お勝坊、おめえに片言交りのオランダ語を教はつたのだからなア、古い話よ」

釜次郎は勝奴の酌で、陶然となりながら少年の夢を逐うた。彼が江戸を立つて、長崎の海軍操練所へ入つたのは、まだ十七八の頃、いくら少年血氣があつても、其の頃長崎遊學は心細かつた。誰をたよりに長崎まで行つたかといふに、同じ下谷に住んでる父の團兵衛と心易くしてゐた鋸り職の平助といふ男、寶石その他異國品の取引きのことから、いつのまにかオランダ語やフランス語で話ができるやうになつてゐた。

これが、公儀御用で通詞となつて長崎に滞在してゐるが、その平助をたよつて釜次郎が長崎へ遊學したのである。

操練所へ入つてから休日はずつと平助の處を訪ねる。平助はお勝といふ娘を連れて來てゐるので釜次郎は、此勝坊の顔を見る事も慰めの一つだつた。遠く長崎へ遊學して、そこで同じ下谷生

れの少女とわだかまりなく語る事ができるといふのは何かの奇縁。十七八の釜次郎と七八才の勝坊……それは戀となるには、あまりに淡い、美しいものだつた。

それから、釜次郎が二十六才のときオランダへ遊學。同志五六人で發足の日に、品川まで送りにきたお勝、見違へるほど美しかった。

三度目に、久しぶりにまた、めぐり會つたときは、釜次郎は海軍副總裁從五位下和泉守、お勝は下谷藝者で勝奴を名乗つてゐた。

「おめえの父には、ずるぶん世話になつたが、何ひとつ恩返しもできなかつたよ」釜次郎は、しみんと迷懷する。

「あんなことを……たかゞ鋸り職のおやぢを、お引立て下すつたのは、釜さんのお父さんぢやありませんか、御恩はかへつて、こちらでうけてますわ」

「まア、そんなはなしはもういゝ……ときにどうだ、オランダ語はしやべれるかな。忘れやしめえ」

「でも、ちかごろは、少しもやりませんもの……」

「そのオランダ語、いやフランス語を、後に役立たせる時が、やがてくるかもしれぬ」

「え？」お勝の勝坊は、つぶらな眼をいつさう圓くして、釜次郎を見つめた。

「徳川のために、おめえのフランス語が役に立つのだ」

「どういふ事なの、ねえ釜さん」

「いまに、おめえに話すときがある。そのときは、藝者の勝奴ぢやねえ」

「女の、あたしが、どうして、お役に立ちますの」

「まアい、いまにおれからおめえのおふくろのところへ頼みにいくぞ。……おれは長崎で、おめえの父に世話になった。その恩返しが出来なくなつたのは残念千萬。こゝで、おめえや、おふくろに、せめてもの恩返しができる、おれもうれしい……おれはおめえが藝者をしてゐるのを、ただ見てはゐられねえ」

「まア、まだあんなことを……それはそれとして、あたしア、今夜ほどうれしいことは、ないわ」

釜次郎の酌で、お勝は盃を乾しながら眞實うれしさうだつた。

「おれも、うれしい。色戀を抜きにして、おれも、うれしい」

「うれしいけれど、あたしア、薩摩や長藩の芋侍たちをみると癪なの。ね、釜さん、なんと

か、あなたの威光で、この江戸の土地から追拂つて頂戴な」

お勝は眉をひそめた。

「時節を待つさ」

「でも、もう、あんな芋達の泥草鞋で、江戸の土地が踏みにじられるのが、あたしア口惜い」

「おめえ、賣れないのだな」釜次郎は、笑つてゐる。

「だつて……」

「いや、おめえのやうな、すつきりした江戸藝者は、諸大名のお留守居役とか、藏前の札刺とかみぢんも厭味のねえ通人の居たころはよかつたが、當節はもう、そんなのは種切れだらう。切ればなれの悪いくせに、二言めにはイヤらしいことをいひだす、お國なまりの田舎侍にのさばられてはかなはぬさ、ハハ、ハハ、」

「いくら、御時勢とはいひながら、當節藝者といへば三味線枕がはやるのですから、この勝奴のはやらないのは、あたりまへなんでせうけど……」

「まあい、いまに、われ／＼の手で徳川再興の機運をつくるさ。江戸八百八町に、薩長土肥の田舎侍を一匹も入れて堪るものか」

「うれしいわ、異國歸りの釜さんにまだその心意氣があるとは」お勝は嬉しさに胸をおさへた。

「ときに、長崎にゐたころ、おめえの近所に住んでゐた惣八の娘」

「あのおれんさんのこと？」

「さうだ。おめえの幼友達のおれんはどうした。あれも、オランダ語を片言交りにやつてゐたが」

「おれんさんは大變な出世よ」

お勝は意味ありけに含み笑つた。

お勝の勝奴は、なほも語る。

「おれんさんは、あれからやつぱり、あたし同様たいへん苦勞しましたわ。お父さんに死なれてから長崎で異人さん相手になしてたのよ。それから横濱へ戻つて矢張賣笑をしてゐるうち、イギリスのキューバといふ海軍の偉い人に買はれたが、いまではフランスの軍人さんのらしやめんに出世……」

「ハツ、ハ、ハ、らしやめんが出世か、面白い。して、そのフランスの軍人といふのは何者な

のサ」

釜次郎は、長崎遊學時代のおれんの面影を偲びながら、興深げにたづねた。

「軍人だといふし、海軍の教師だともいひますの」

「ニコール君だな」

「え、さうよ、ニコールといふ方なのよ。釜さんどうして、その方を知つてなさるの？」

「わが幕府海軍の教師なのさ。おれは毎日のやうにそのフランス人に會つてゐる」

「まア、それは奇縁ね」

「お勝坊」釜次郎は改まつて勝奴の顔をみた。

「え」

「おめえ、そのおれんと共に、蝦夷へ往く氣はねえか」

「蝦夷ですつて！」

「蝦夷松前領、箱館といふところへおれんといつしよに出稼ぎに往くのさ」

「まア、釜さん、からかつちやいやですわ。いくら江戸前藝者が賣れなくなつたからつて、おれんさんの眞似はしたかアありません。オホホ……」

「いや、箱館へらしやめに往けと勅めるのぢやねえよ、おめえの異人語を賣りにいくのさ」
「と仰有ると？」

「幕府海軍の通詞といふ立派な肩書で往くのさ」

「女の身で通詞？」お勝は、ふしぎさうに釜次郎を見上げた。

「お勝坊、おれア、おめえを離れたかねえ、おれアおめえを連れて箱館へ渡らうてんだ」

釜次郎は、さういつて情熱的に、いきなりお勝を抱きよせた。少年の日の古い記憶が、戀の甘さのやうに甘かつた。

釜次郎に抱きよせられながら、お勝も甘い情緒に身を没しながら、うつとりと、

「釜さん、あんた蝦夷へいらつしやるの？」

「うむ時勢に敗けて、蝦夷へ落ちていくのさ……」

「まさか」

「いや、おまへと同様、江戸ッ子は薩長の芋たちに追はれて住み馴れた土地にも住めなくなつてしまつた」

「そんな」

「いや伏見鳥羽のいくさに敗れ、大阪を立退いてこのかた、幕府はその威信地に落ち、すでに公方様は謹慎せられてをられる……明日にも迫る幕府のいのちさ」

「でも……」

「お勝、おれの海軍副總裁としての威勢も官位も、いつ擄奪されるかしれぬ。榎本和泉守も、

もとの釜次郎にかへり都落ちの日も迫つた」

「それがほんとうなら、あたし、どうしませう……釜さんは、それを信じて蝦夷まで落ちていらつしやらなくともよさうなもの……」

「や、蝦夷は幕府回天の壯舉をなすに適當の地なのだ。お勝、おめえを通詞に雇つたぞ」

釜次郎の言つたことが實になつて、まもなく下谷藝者の勝奴が男に化けた。色白で細面なうつくしい顔容に、たつぷりとした總髪。黒羽二重の裾裂羽織に細身の大小、裾金欄の野袴といった扮装。雪駄をはいて歩む姿は水も滴るばかりの男つぷり。

お雇教師フランス人ニコールの通詞として、その名も田島勝太郎となつたが、釜次郎の眼からみれば、やつぱりお勝にちがひなかつた。フランス文字は讀めなくとも手許通詞で役立つのだから、海軍方でも榎本釜次郎の推舉といふので、女とは知らずに雇入れたわけだ。

これで、どうやら、釜次郎はお勝の父平助への恩義を返すことができ、また愛するお勝を傍に置くことができるのだつた。おまけに、ニコールのらしやめんおれんにも、久々に會ふ機會も得られるといふわけ。

ところが豫期したとほり、幕府は潰滅慶喜公が歸順、薩長の泥草鞋に江戸の土地が踏みにじられてしまふ始末。従五位下和泉守海軍副總裁の榎本釜次郎は、たゞの釜次郎になり下つてしまつた。いやもう、口惜しいことおびたゞしい。三十三才の血氣さかりだからたまらぬ。優柔不斷の勝安房を憎悪してみても仕方ないので、自分の肚だけで、かねての計畫を實行しようと思つた。慶應四年（明治元年）四月の十一日、江戸城はめでたく官軍の手に歸し、西郷どんと勝が握手した同じ日。官軍の海軍方が、品川沖の幕府軍艦を束ねるために赴いてみると、釜次郎が、一足さきに、その八隻の軍艦を率ゐて房州の館山へ去つてゐた。

官軍の海軍先鋒總督大原實郷は、たいさう怒つて舊幕の勝さんへ談じ込む。安房も駭いた。「榎本の奴、たいへんなことをしてくれた。これでは慶喜公のせつかくの恭順に瑕瑾がつくぢやないか」とばかり、馬を飛ばせて館山まで行き、釜次郎の暴舉をいましめた。

釜次郎は徳川家に對する義理合ひから、そして勝の顔を立てる意味からして、いつたんは品川

へ引かへしたが、若い士官たちは、どうしても官軍の海軍に下るを潔しとしない。幸ひ、フランス東洋艦隊が舊幕海軍を援助したいとの意向を洩らしてゐるので、その助勢を得て、この際、函館まで走らうと榎本に勧めるものが多い。

もちろん釜次郎の肚もきまつてゐる。北方へ走る部下は、少くとも三千人は下るまいと信じてゐた。この三千の精銳をつれて北方へ走れば、江戸に潛む不平の徒は續々とわがあとに従つてくるし、また東北親藩の同志も、徳川の恩義を忘れず加はるだらう。いやしかし、釜次郎の肚の底は、舊徳川勢を蝦夷に糾合して、江戸改め東京へ押よせようといふのでもなささうだ。

「いま、徳川舊臣は失業して困り果てゝゐる。その日の食にも苦しむものがある。自分は、それら失業浪人を救ふために、蝦夷に赴いて土地を開拓し、植民しようといふのである。さすれば自分等が品川沖から退去するのは、北方開發の外に他意なく、日本國內の平和を念ずるが故である」と、これが勝安房への捨科白だつた。

フランス通詞の職に有つてから十日ほどして、官軍の泥草鞋のために江戸がさんざ踏みにじられ、再び職を失つたお勝の勝太郎は、木から落ちた猿のやうにほかんとしてしまつた。もちろん、釜さんも和泉守ではなくて丸腰の失業浪人。

「ね、かうなればもう、蝦夷へ一刻もはやく往きたい」と、榎本に訴へたが、十日前の榎本とはちがつて、儼しい顔をして男装の勝太郎にいつた。

「おめえは、やつぱり、藝者に返り咲くがい」

「え、ちや、蝦夷へ往くと仰しやつたのは、嘘なの」

「嘘ぢやねえよ」

「ぢや、あたしを連れていつてくださるはず、あたしア、立派に通詞なのよ」

「ところが、おめえを雇入れたのは幕府海軍方だが、その幕府は名實ともに失はれてしまったのだ。したがつて、おめえもお拂ひ箱だ。あきらめるがい」

「あんたも、蝦夷へ往くのを、あきらめますのねえ」

「いや、おれア往く。失業一介の浪人として蝦夷へ渡つて百姓をするつもりだ」

「ぢや、あたしもお供して蝦夷へ往つて百姓をしますわ」

「いけねえ」

「どうして？」

「おめえのやうな、白い手の、うつくしい女を、百姓にするのは可哀相だ」

「い、え、あんたとなら、どんな泥仕事でも厭ひません」

男装のお勝の、そのときのうらめし氣な容姿は、かへつて艶な風情だ。

「いけねえといふのだ」釜次郎は、いつになく情ない。

「どうしても、お供をするといつたら、あんたは？」

「斬つて去る」

「え……あたしを殺して蝦夷へ往くと仰しやるのねえ……ありがとう」

「なに！」

「あんたは、あたしを愛してゐなから、それで連れてかないのかわ」

「そ、そんな……」

「い、え、こんどのあんたの蝦夷行は、よほどの覺悟でいらつしやるのかわ。蝦夷の箱館とやらに立籠り、官軍を相手に最後の戦をなさらうとの肚」

「いや斬じて」

「それには、あたしのやうなものは、足手纏ひ……い、え、あたしを官軍の芋侍たちの手にかけたくないからといふので、江戸へ残して去らうとなさるのよ。それぢや、あんまりかわ。い

いえもちろん、そのお心はありがたいけど、あたしはいやだ」お勝はしきりは駄々をこねる。

「お勝、いやさ、女のやうにうつくしい勝太郎君、おめえの氣持はよくわかる。おれは、おめえを愛してゐる。地獄の果てまでも、いつしよに往きたい。しかし、おれの蝦夷行は、十日前の計畫とはまるでちがつてゐる。おれは、蝦夷へ死に、往くのだ。幕臣を連れて彼地に行き、開拓事業をやりたい肚だが、官軍はおれの眞意を汲んでくれず、きつとおれを陰謀と見なして、海陸聯合の追討軍を向けるだらう。さすれば、いきほひそれを追ひ討つやうにならう。おれが彼地で討死をしたとき、そのそばに女も死んで居つたといはれるのが口惜しい。さきに約束したのは幕軍として彼地へ渡るつもりだつた。が、いまは賊兵として、彼地で死なねばならぬ。お勝、おれに死花を咲かしてくれ」

「釜さん」

男装のお勝は、きつとなつて、榎本の顔を見た。

「なんだ」

「あたしア、釜さんのために、男にされてしまったのよ」

「……」

「どうか、もと通り女にして返してください。緑の黒髪を短く切つてしまつては、もう藝者になれないぢやないの、ね、釜さん、どうかしてくださいな」

「……………」

「フランスの通詞にしてやるの、海軍方のお雇に引上げてやるのと仰しやつて、あたしに藝者をやめさせてさ、ほんの十日や十五日で、振りすてるなんか、あんまりだわ。仰しやるとほり、軍艦に乗せて箱館へ連れていくことができないなら、もともと通り、あたしを藝者にしてくださいな」

お勝は、切れの長い美しい眼で、釜次郎を睨んだ。

「無茶を言つては困る」

「いゝえ、無茶でも甘茶でもかまやしないから、もとの下谷藝者になりたいのよ。かつらぢやいやだから、もと通りの長い髪にしてくださいな」

「お勝、いやさ田島勝太郎、おめえ、それほどおれを苦しめたいのか。それほど、おれのすゝめたことが腹が立つのか」

「だつて、幕府が亡びたから、おまへはもうお拂箱だ、勝手に仕事を探せぢや、少し薄情ぢや

ないこと……』

「さう言はれると、二の句がつけないさ……しかし、時勢だ、お互に忍べるだけ忍ぼう」

「いやです。あたしア、いつたんあなたに雇はれた女、いや男です。立派に田島勝太郎を名乗つてゐるぢやありませんか。亡びた徳川に雇はれたのぢやなくて、榎本簽次郎さんに雇はれたのです。あくまでも、あなたのあとを追ひます」

「もし、おれが、蝦夷——いや北海道で百姓をするとしたら……」

「あたしも、肥桶を擔ぐわ」

「もし、薩長土肥の聯合軍をむかふに廻して、一戦を構へるやうになつたら」

「よろこんで、討死しますわ」

「もし、聯合軍が攻めてきて、おれが一戦も構へずに、奥蝦夷の方へ遁けるとしたら」

「いやですわ、そんな簽さんぢやないわ」

「いや、さうでもない。おれの蝦夷行は、いまもいつたとほり、徳川舊臣の新生の天地を求めに往くのだ。いたづらに事を構へたくはない。そこで攻めて來たら、奥蝦夷へ遁けるかわからんぞ。そのときの、衆議に決したいおれの肚だ」

「あたしア、一人居残つて、芋侍に双方向つてやるわ」

「バカ、そんな氣持で、おれについて往かうといふなら、おれは、おれは、なほさらいやだ」

「ぢや、あたしも遁けろと仰しやるのねえ」

「時勢だ」

「また、時勢と仰しやるわ。だけど時勢とあきらめ切れない、江戸ツ子の氣性を、どうすればいゝのでせう」

お勝の勝太郎は、おもはず嗚咽して、簽次郎の膝に顔を埋めてしまった。

「田島君！」簽次郎の聲は、凜とひびいた。

「え」

「泣くほど、往きたいなら、連れていかう」

「さア、ほんとう？」

「しかし、品川沖を脱走する軍艦に乗せるわけにはいかぬ」

「ぢや、どうすればいゝの」

お勝は、涙にぬれた顔をあけて榎本の返事を待った。

「お勝、いやさ勝太郎君、おれは数日のうちに、品川沖から再び脱走する計畫だ。おれに随つてくるものは二千餘人、徳川の恩義を忘れぬ舊臣二千人を八隻の幕艦に分乗せしめて、品川沖をのがれる」

「まア」

「開陽、回天、鱗龍、千代田、神速、長鯨、美加保、威臨の八艦はみな、おれにとつては因縁淺からぬ船だ。なかでも開陽艦は、幕府がオランダから四十萬兩を投じて買ったもの、おれが回航委員として萬里の波濤を乗切つてきた愛すべき船だ。日本が三百年の鎖國の夢から醒めて、海外諸國と對等の交際をするやうになつて、はじめて軍艦商船の必要を感じてあわてゝゐるが、おれは疾うからその必要を知つて、勝さん等を説いて、オランダから買はせた船なのだ。それをおれは、自分の旗艦として、つゞく七隻を従へて、とほく北方へ植民に往くのだ、祝つてくれ」
次郎は感慨深げにいつた。

「で、釜さん、あたしのことは、どうなるの」

「先日、勝さんから、かういふことを言はれた。もし意見があつたらおれに相談してくれ、できるだけ力にならう、けつして輕はづみのことはしてくるなと言つた。そのとき、おれは、あ

りがたう、しかし、私のやうな時勢おくれが、たうていあなたのやうな偉い方に意見を述べざる資格がないが、一寸の蟲にも五分の魂はあるといふたとへのとほり、時勢おくれの私も、何れつまらない意見を申上けるかはりに實行してお目にかける……と言つてやつたら、勝さんは妙な顔をしてゐたぜ。勝は智者だが、おれの氣持がわからん」

「ね、あなたのことばかり言つてあたしをどうしようとなさるの」

「いまから二ヶ月ほど前に、幕府の運送船長崎丸といふのが、單獨で品川沖を脱走した」

「ですからね……」

「乗組の士は、みな舊幕臣、しかも海軍義兵を名乗つて出帆の際に檄文を飛ばした。それにはもし、わが義兵の義心に同意するものは、速かに追船して一味に加はらりたい……といふことが書いてあつた。これ以來、おれの部下の若い士官たちの心は動いた。いや牢固として抜くべからざる決心をなした」

「はやく仰つしやつてくださいいな」

「待て、……その前に奥州一圓の徳川親藩、つまり伊達、米澤が會津の松平容保をたすけて、東北同盟をつくつて官兵に反意を示した。その東北同盟からも、わが舊藩海岸に應援をたのんで

来てゐる。遠からず北方の海が荒れ、怒濤が逆捲くだらう。おれは、そこで近く蝦夷へ参る途中奥州仙臺に立寄る。仙臺領の寒風澤に滞船して、しばらく天下の動靜を觀望することに決めてゐる。そのときの情勢次第で、おれは官兵と戦ふか、あるひは遠く蝦夷奥地へ去つて百姓をするか……で、おめえのことだ、品川脱走のときに、おめえを乗船させることは人目に立つていかん』
『では……』
『おれが、寒風澤に滞留中に陸路をやつてきてくれ。仙臺表で、あらためてフランス通詞としての田島勝太郎に會つてやらう』

いくさを孕んで

明治元年八月二十日。幕艦八隻（うち一艘運送船美加保丸は、銚子黒生浦で暗礁に乘揚けて破壊）を率ゐて北方へ走つた。日本の海軍の新知識、釜さんの榎本和泉は、二十七日に仙臺領寒風澤に到着したが、それから何を愚圖々々してゐたか。

もとより、江戸前藝者のお勝の男装姿を待ちあぐんでゐたのではない。約束したフランス海軍教師ニコールと落合ふためでもない。まして、ニコールの愛妾、れいの二朱賣笑のおれんの顔が久々に見たためでもなかつた。釜さんは、自負心が強かつた。『日本の陸軍は、そりア薩長の芋の聯合よりは弱いだらうが、海軍となると、斷然幕軍は強い』

さういふ肚だから、江戸城開城のときにも、釜さんは、官軍に幕艦を引渡すことを拒んだ。『強ひてといはゞいくさで来い』といった態度で頑張つた。

これには、幕府方の勝安房も弱つた。官軍の將軍も『おのれ和泉奴』とはおもつたが、川にゐる河童みたいに、海上に頑張る榎本には手出しもできかねた。そこで止むを得ず、官軍も折れて

幕艦わづかに四艘の引渡しをうけて、その他は、それなりになつた。つまり、海のことば船頭にかなはず、釜さんの云ひなりにしたがつたわけだ。

そこで、釜さんに見れば、幕府は亡んで軍艦は用がない。官軍はまた、たつた四艘より受取らぬ。あとの八艘は、おれの自由になる。日本の海軍は、おれの手に歸したとおもひ込んでしまつた。そんなわけで、八月十九日の夜半、いや二十日の未明品川沖を出帆するときも脱走といふよりか、大意張りて出ていつたのだ。

蝦夷——北海道へ赴く前に、仙臺領へ立寄つたのは、美加保丸が軍用金や糧食を積んでゐたので、それを黒生浦で失つたため補給しなければならなかつたからだ。それから、東北同盟に應援して戦機を見ようといふ肚でもあつた。榎本の率ゐる幕艦が東北同盟軍に加擔したといふことがわかれば、薩長の海軍は海路などを追うてくるだらう。

「陸戦のことは、伊達や會津にまかしてよいが、海戦は、おれの一手で引受けよう」と、カミ返つたのは、いかにも釜さんらしい自負心であつた。釜さんは、薩長の海軍、ことに先年鹿兒島灣で英艦を撃退したといふ、薩摩の海軍の小ざかしさが忘れかねてゐた。「なアに、あの海戦は天祐さ」と、タカをくゝつてゐるものゝ、しかし薩摩の海軍の強さが、どの程度かわからぬ。こ

とに薩摩の海軍の老人組の手並は、およその口當がつくが、さて、同藩の若武者たちの腕前のほどが計りかねるのだつた。

幕府海軍副總裁時代すでに、釜さんは、薩摩の海軍の若武者、伊東祐亨の名を知つてゐた。海陸に通じた大山彌助の名も、伊地知休八、奈良原繁、赤塚源六などといふ豪者の名も耳にしてゐた。なかでも、加治屋町の貧乏士族の子、仲乃郎改め東郷平八郎といふ若武者の名を、よく記憶してゐた。

「そんな奴らを、こゝまでおびき寄せ、手並をみたいものだ」

釜さんの仙臺領滞留の重要な理由は、それだつた。

が、いくら待つてゐても、その東郷少年はじめ、陸海軍の落武者どもがやつて來ない。

「えい、口ほどにも無い奴らだ」と口外に洩らすほど、釜さんも寒風澤滞留が脾肉の嘆に堪えなかつた。

「このうへは、東北同盟の義軍に加はつて、奥州の山野を轉戦しようか」とまで決し、寒風澤から仙臺城下に移り、松ノ井屋敷に落着いて伊達藩といろ／＼交渉を重ねてゐた。

そのうちに、どうやら、各地で官軍と戦つてゐる東北同盟軍の旗色がおもしろくない。いや、

おもしろくないばかりではなく、どうも仙臺藩の様子がかしい。自分等を敬遠するかたむきがある。「をかしいぞ」とおもつて、だん／＼探つてみると、すでに仙臺をはじめ、奥州の諸藩は官軍のために打破られ降伏してゐた。それでは、いくら仙臺藩でも、榎本等を客分扱ひにするわけにいかない。「どうか、去つてもらひたい」と言はぬばかりの敬遠ぶりだ。

釜次郎は江戸ツ子だ。カツとなつたが、さすがにそれを押へて、すぐに寒風澤へ引かへした。寝心地のいゝ開陽艦で足腰をのばし、大の字に寝て遠大の計畫を描いた方がました。

そこへ、松平容保も降伏したとのしらせ。東北親藩中、最後までガン張つてゐた會津ツ子も、たうとう官軍に降伏したのだ。強情我慢の會津ツ子が歸順したうへは、もう東北同盟も自然解消といつたかたち。

すると舊幕臣の脱走組だ。東北諸藩が降伏してみると、いづれも他人の住居も同様だ。いや昨日の味方が今日の敵だ。身を容るゝ地もないので、みな仙臺へ流れてきた。釜次郎の榎本和泉の海軍を頼つてやつてきたのだ。榎本はすでに寒風澤へ去つたといふので、更に彼等は、寒風澤まで榎本を慕つてくる。

大鳥圭介も来た。新選組の近藤勇の合棒、土方歳三も、やつてきた。古屋佐久左衛門、人見勝

太郎、松岡四郎次郎といった豪の者も、相次いで兵をまとめて寒風澤へ現れるといふありさま。かう風向きが變つてくると、しぜん釜さんの考へも變つてくる。大鳥や土方を迎へ、だん／＼東北諸藩の情勢を探つてみると、諸藩には戦意更になした。東北同盟などは、趾片もない夢となつて、みな猫のやうにおとなしく、官軍の芋たちを迎へてゐるといふはなし。残るは、やはり、舊幕臣の脱走兵だ。

「土方君、あなたの胸算用では、脱走兵はいくら集まると思ふか」

釜さんは後年、活動寫真で憎まれ役をつとめる土方歳三の人材を尊重して、相談をなした。

「左様、およそ三千人と見込んでをります」

「大鳥君、あんたは」

「やはり、その邊かな」

大鳥圭介の胸算用も土方と變りない。まづ、三千人。この純情な血の氣の多い失業群を合併して、蝦夷へ渡らう。

釜さんの肚は、そこで全く決つてしまつた。

開陽艦の一室で、釜さんは土方、大鳥の兩雄、それに松平太郎、荒井郁之助、澤太郎左衛門、

永井玄蕃、人見勝太郎といった連中と膝をつき合して協議した。

「土方、大鳥兩君の見込では、舊幕臣でわれらのもとへ集まるものは三千人といふことだが、そのほかに仙臺、會津、高田などの親藩の脱走兵も加はるだらうから、合して五千人はあるだらう。この五千人を糾合して蝦夷へ渡ると、それは一つの侮り難い勢力だ。そこで蝦夷に新勢力を扶植して、諸君は何をしようとなさるか」

釜さんはわかりきつたことを一同にたづねる。

「徳川に仇する薩長土肥の雜軍を蹴散らすためだ」荒井郁太郎は、言下に答へた。

「感情論を抜きにして、協議をすゝめたい」

釜さんは、めうに冷静だ。

「感情論ではない、副總裁の遠大な計畫ではないか」

荒井は、いまでも、榎本のことを副總裁といつてゐる。

「それもよい。しかし、ものには順序といふものがある。いつたん蝦夷に落着いて、勢力の充實をはかつてからでも、計畫を實行できると思ふ」

「しかし、徒らに機運を逸しはしまいか」

土方は言つた。

「さうだ、ものには順序があるかもしれぬが、ものにはまた機會といふものがある。いまは、舊幕臣の大部分は官軍の横暴を極度に憎んでゐる。この憎しみ、これこそ義兵を起す絶好の機會であらう。これを逸しては、永久に徳川の再興は覺束ない」

荒井の情熱は、釜さんを動かした。

「なるほど、それも一理だ。わしは、品川を脱するとき、すでに蝦夷を占領する計畫だつた。

が、これは蝦夷を開拓し、徳川の血統の一人を推戴して、こゝに一國を樹てようとの考へであつた。この點には異存がござるまい」

「異議なし」

永井玄蕃の聲は、大きい。一同も異議を挟むものがなかつた。

「そこで、われらは、これより七艘の艦船を率ゐて蝦夷へ渡るが、遠大の理想をこれに置いて徒らに戦争を好む事を致したくない。どうぢや、これにも異存がござるまい」

「異議なし」こんどは、荒井が叫んだ。

「よろしい。もとより蝦夷地に上陸すれば、松前藩ではきつとそれを拒むだらう。さすれば、

戦争のきつかけをつくることになる。諸君の望んでをらるゝ官軍とのいくさの機会を、あまりに早くつくることになるかもしれない。そのときは、一步も退くことはない。存分に舊幕臣としての腕前をみせてやるがいゝ」

「賛成！」永井は、雀躍りしてよろこんだ。

「その吐さへ決まれば、一日も早く出發だ。諸般の準備を急がうぢやないか」

こんなわけで、豫想以上に早く寒風澤を出帆する段取となつた。数日中に寒風澤を退去と定まつたので、一日、簽さんは、仙臺表へやつてきた。伊達の重臣たちに面會して、堂々と別れの言葉を述べるためだつた。

さて、松ノ井屋敷へ、一旦立戻つたとき、かれを訪ねて来たものがあつた。それは、仙臺藩の櫻田ながしといふ男。

取次のものが「江戸の勝安房どの、手紙を持参したとのことでござります」と傳へた。

「それならいゝ、その手紙を置いてゆけど、さう使者の者にいつてやるがいゝ」簽さんは、ぶつきら棒に言つた。

取次のものが、そのやうに傳へると「いや、是非お目にかゝりお手渡ししたい」といふ。

「いまさら、勝などに用はないのだから、手紙など見るには及ばんと、さういつて追ひ返してくれ」

どうしても、その櫻田といふ男に會はない。それもそのはず、異國三界を渡りあるいて来たほどの簽次郎だ。勝の手紙をもつて會ひに来た奴は、自分を刺しに来た曲者だと睨んだのだ。

それは、まさに適中。櫻田といふ男は、藩の宿老遠藤又七郎から依頼された刺客だつたのだ。過日、榎本が仙臺藩を訪問したとき、奉行詰所で宿老の遠藤に會つて、「御藩では、官軍に降伏なされたさうだが、力が屈しての降伏か、それとも、他の理由があつてなされたか」と、江戸ッ子らしく、單刀直入に突つ込んだ質問をなした。

又七郎は、それをきくとぶるぶると怒りにふるへ立ち、

「もとより、力屈してではない。大義名分により歸順の意を表したのだ」といつた。

榎本の簽さんは、せゝら笑つて、

「薩長の奸物どもは、まだ御年若の禁廷様を戴いて、天下の政權をほしいまゝにしようとしてをる。それを憎んで奥州諸藩が義兵を起したのではないか。にも拘らず、今となつて俄にその奸物どもの前に膝を屈するとは何ごとだ。何でそれが大義名分だ。もし、御藩が力屈したと言はる

るならば、東洋一の艦隊を率ゐるわれ〜が應援いたさう。歐式の武器作戦は整つてをる」と大聲叱呼した。又七郎、いよく腹を立て、

「既に、徳川は天下の賊と決つてをる。その賊がすでに歸順いたした。もはや王師に反抗する理由がないではないか。それにも拘らずあくまで賊論を主張するなら、當藩の力をかりずに、あくまでもおのれが力でやるがよい」と言つた。

「むろん、われらは自分の力でやるさ。たゞ、せつかくの名藩も、薩摩の芋たちに膝を屈するのが氣の毒だから忠言したまでだ。いまに後悔しても追つ付くめえ」と、いつのまにか、江戸ツ子の本性をあらはして、憎々しげにせ、ラ笑つて別れてしまつた。

又七郎は、その捨科白がどうにも腹に据ゑかねた。「おのれ、只は置くものか」とばかり、偏狹な勤王家氣取りも手傳つて、歐式海軍を振廻す榎本を、斬つてしまはうと心に決した。

しかし、自分は宿老の身、軽々しく行動できぬ。よつて同志の櫻田なにかしを唆かして、刺客を立てたのだ。役者が一枚うへの簽次郎は、その氣配をすぐ見破つて追ひ返した。

ところが、まもなくまた、かれを訪ねて來たものがあつた。色白な、細面のうつくしい若侍、裾金襴の袴さばきもしなやかな田島勝太郎。

田島勝太郎と聞いて簽次郎は、ぎよつとした。ぎよつとしてから、うれしさに胸おどらした。品川沖脱走以來の、砂を嚙む様な日常に片時も忘れかねた女だ。

「お、お勝、おめえは、よく訪ねてきてくれた」といつて、すぐに會はうとしたが、いや……とかぶりを振つた。

取次のものに、「田島勝太郎？ そんなものは知らぬ。おほかたまた、勝安房の手紙を持つてきたといふのだらう」と、冷たく言つた。

「いゝえ、勝さんの手紙ではありません、お目にかゝればわかるとさう申してをります」取次のものは、さういつた。

「どんな男だ」

「はい、水も滴るやうな……」

「いや、そ、そんなものは、追返してくれ」

「でも……」

「いゝから、追拂ふのだ」

簽次郎は苦しさに息づいた。取次のものはまたやつてきた。

「長崎時代からの、田島勝太郎、にせものではござらぬと言つて動きませぬ」

「うるさい奴だ。手紙など、見る必要がないといふのだ」

「いゝえ手紙ではありません。ぜひお目にかかりたいとのことでございます」

「榎本は、釜次郎は、誰にも會はぬ……と、さう言つてくれ」

「はい、そのやうに再三申しましたが、そんなはずはない、お約束がちがふと言つて動きませぬ」

釜次郎は、じいと考へ込んだ。さぞ、お勝のやつ、おれを恨んでゐるだらう。仙臺で會はうと約束しながら、その仙臺まで、はる／＼陸路をやつて来たものを、つれなく追ひ返すなど、そんな非人情なことがあるものかと思つた。

しかし、いまのさつき、仙臺藩の櫻田ながしといふものが訪ねて来たとき、理由なく會はずに追つ拂つた。それなのに、その舌の根の乾かぬうちに、勝太郎に會ふなどとは、釜次郎の男にかゝるなぞと思つた。

刺客におそれて、面會を謝絶した榎本が、味方がはる／＼訪ねてきたので、よろこんで會つたときこえては男がすたる。

しかも、その味方は水も滴る美男子だと、のち／＼までも噂されるのがくやしい。

「釜次郎は軍務多忙だ。誰にも會ふわけにいかぬと、さう言つて追つ拂へ」

「はッ」

取次のものが、それを傳へにいつたが、すぐに戻つてきて、

「いろ／＼諭しましたが、どうしても面會ができなければ、門前で腹を切ると申してをります」

「うむ……腹を切るといつたか、困つた奴だ。その、水も滴る美男子が、門前で腹………まで、

まで、それは釜次郎にとつては迷惑千萬なはなし……」

釜次郎は、苦笑したが、へたに腹でも切られたら、その美男子の化の皮があらはれてしまふ。

いよく事面倒だ。そこで考へた末、

「では、おれは近々蝦夷箱館へ赴くから、改めて箱館で會はうと、さう言つて、なだめて返してくれ、腹なぞ切られてたまるものか」

取次のものは、そのとほり傳へると、お勝の勝太郎は、す／＼歸つていつた様子。

戦機が、しだいに迫ってくる。北方の海に怒濤逆巻くの日が近づく。

釜さんの率ゐる幕艦——釜さんが、みづから東洋第一の精銳と誇る艦隊が、まもなく寒風澤か

ら仙臺領の荻ノ濱に移り、こゝで淡水を積んで、いよく舊幕臣と奥羽の脱走兵とを合して三千の兵が、十月十二日北方へ向つた。

海路九日。二十日の朝、蝦夷渡島の國の鷺木の濱へ無事到着した。松前藩の役人が、黒船を迎へてびつくり仰天、馬を飛ばして福山城へ注進。濱の漁師たちは口あんぐり、軍艦を眺めてゐるばかり。濱の、丸小屋には、まだアイヌもゐた。酋長は白髭を上げて黒船を迎へる。メノコもシヤモ（内地人）の女も、わく／＼顫え上つた。

そのむかし、箱館では、すでに黒船を迎へてゐる。寛政五年にオロシヤのラツクスマンがやつて来た。

例の、浦賀を訪れたアメリカ水師提督ゴードン・ペリーが、下田のやうな女がゐるだらうと箱館へもやつて来た。それから、開港。

開港場箱館となつてからは、もう土地の人たちは、恐怖の眼で異國の船を迎へるやうなことはない。松前役人が齋戒沐浴し、香を焚いて、

異國の船ふき送れ日の本の

たみを恵みの天津神風

などと、雨乞小町の故智にならつて、國風を詠じて追つ拂はうとするやうなことはもうなかつた。その點では、箱館の市民も、役人も場馴れてゐる。

山の上の遊女屋街には、乙な西洋館のお女郎屋も出来てゐる。辨天町の山田屋が、異人應接所として立派に改築されてある。日本人のくせに箱館の市民は牛の乳を平氣で呑む。麵麩にバターをつけて食べる豪の者も少くない。

それどころか、鹽漬の豚さへ食へるといふありさま。

いやもう基督のガンガン寺天主教會にお詣りする酔狂な市民もあるし、はやくも、英佛和辭典の編纂をもくろむものもある。かと思れば、海岸通りで牛なべ屋を開店するといふ始末。

安政の六年ごろには、大町に、はやくも箱館洋食店があつたといふほどなハイカラな箱館だから、濱へ黒船があらはれたくらゐに、さう、うかく／＼とおどろくわけがない。

おどろいたのは、それが異國の船ではなくて、日本の黒船だつたからだ。日本人が、和船ではなくて火船を回航したからおどろいたのだ。つまり、いくさの豫感といふやつ。

そこで、松前藩の出張役人が、眞蒼になつて、馬を飛ばしたのだつた。アイヌのメノコが、天を仰いで嘆息を洩らすわけだつた。

海戦がはじまる。駒ヶ岳の噴火よりもおそろしい戦禍——。箱館の街が、七重の濱が、大森の濱が焼け出されてしまふ。

そんな恐怖の渦巻くなかを、釜さんの榎本は、部下を率ゐて鷺木の濱から箱館へ進軍した。

黒船が十艘近く沖にかゝり、異様の風采の幕兵が、徒歩で濱傳ひに箱館へやつてきたとき、まづ、ガンガン寺の鐘が鳴りだした。

山背泊のお臺場の空砲が鳴った。箱館府の役人たちは、藩兵は武装して迎へた。しかし、釜さんは、寡兵を尻眼に砂濱を歩いていつた。

「木ツ葉役人などを相手にするな、しかし双向ふ奴は追つ拂つてよい」さう下知だつた。

山背泊の大砲が鳴る前に矢不束臺村の臺場でも鳴つたのだ。市中辨天島臺場でも、千代ヶ岳臺場でも、尻澤邊立待の臺場までが真似して鳴つたのだ。

一貫目、三百目、大筒玉目不分二挺……そんなところだつた。筒口を上向きに、ド、……と鳴るが、それは、あたかも遠来の珍客を迎へる祝砲のやうに、釜さんたちには感じられて愉快だつた。

だから、こんな、箱館役人の應酬を、くだぐと述べる必要がない。松前藩の役人は、けんめ

いに戦つたつもりだが、新銳の幕軍にとつては小手調べほどの小戦。そこで、まもなく箱館府は幕軍の手に歸し、府知事清水谷ながしは海を渡つて青森へ逃げた。

箱館に到着した幕軍は、そろく基礎工作にとりかゝつた。官軍の征討を前に、蝦夷一圓に勢力を布いて置かねばならぬ。まづ、第一番に、松前藩の根據福山城を陥れた。つぎに江差を取つた。松前藩主も、津輕へのがれた。さうして、あまりにも呆氣なく、蝦夷あらため北海道を手に入れてしまつたのは十二月。

「さア、いつでもやつて来い。薩摩の海軍も、長藩の陸軍も、土州の隊兵も東になつて来い」とばかり、意氣軒昂たるものがあつた。

そこで、第二の補強工作。まづ、箱館郊外五稜廓に幕軍の根據を置き、箱館、福山、江差に各奉行を置いた。それから、室蘭には開拓奉行を設けた。これは榎本の釜さんの遠大の理想の一端である。小樽、石狩などへも若干の兵を置いた。

かうして一先づ、北海道を平定したので、釜さんはアメリカ流に政治を行ひ制度を布かうと考へた。まづ軍の首脳部を定めるのに一般の投票によつて決した。選ばれた重なるものは、總裁榎本釜次郎、副總裁松平太郎、海軍奉行荒井郁之助、陸軍奉行大鳥圭介。それから、開拓奉行澤太

郎左衛門、箱館奉行永井立藩、松前奉行人見勝太郎、江差奉行松岡四郎次郎といった顔觸れ。そこで、制度を布く前に、榎本は首脳部と計つて朝廷に向け嘆願書を奉つた。文意は、蝦夷地を賜はり、徳川の一血統を奉じて開拓したき處存、決して朝廷に反意はムらぬ。といふのだつた。が、もとより許さるべき筋のものではない。斷乎として拒絶された。

「薩長の奸物どもの取計らひだな、おのれ、いまにしろ」
せつかく、北海道を平定して、これから心機一轉開拓に就かうとした釜次郎の氣持が、再び元へもどつた。

やがて、北の海の怒濤。

明くれば明治二年。

その二月の十五日、朝廷では令を海陸軍に下し、箱館に構へる舊幕臣の脱走兵追討を命じた。清水谷總督の下には山田顯義、黒田清隆、大田黒亥和太、曾我裕準、増田虎之助などといふ連中が海陸の參謀に任じ、薩藩をはじめ諸藩に號令して兵を青森に會合させた。もつとも、青森には、すでに餘程の兵が集まつて、待機中であつたが、そのあとへ續々と集まつてきて、その兵七千と註せられた。

舊幕義軍（榎本等は、のち／＼までも自分等を賊軍とは信じなかつた）の兵は、およそ三千。してみれば、官軍の陸兵のみで既に二倍以上。

舊幕軍は、いづれも幕末幾多の戦場で砲火の下を潜つてきた猛者、官軍もまた同様で、そのうへ二倍以上の兵勢、後詰はいくらでもゐる。誰がみても、この勝敗の数は極つてゐる。が、海軍では榎本が豪語するまでもなく、海内一を誇つてよいのだ。官軍にくらべて軍艦も立派だし、海兵も訓練が行届いてゐる。長崎の海兵傳習所第一期生隨一の才人、榎本の釜さんの統率する海軍だ。弱からうはずはない。

ところが、去年十一月、釜さんのもつとも誇りとするところの旗艦開陽が、江差で暴風に遭ひ暗礁に乗りあけて廢艦になつてしまつた。これは、舊幕義軍の海軍にとつて非常の痛手だつた。それに引かへ、官軍の海軍は、初めの目算では物の數ではなかつた。

前年幕府から受取つた朝陽艦、薩摩の春日艦、長州の丁戌艦その他二三といふ貧弱さであつたが、幸ひなことには、待望の甲鐵艦を、いくさの直前に手に入れることができた。甲鐵艦は、舊幕府がアメリカ國に注文して造つたもので、前年日本へ回航されたが、アメリカでは官軍と徳川方との對立をみて、局外中立を守つて引渡さずにあつたのだ。

そのうち幕府が倒れたので、注文主が變つたが、官軍へそれを引渡してしまつた。官軍では、この甲鐵艦を手に入れて、とても優勢となつたのである。

榎本等は、はじめこのやうに考へてゐた。

『兵力では官軍に劣るが、われには優勢の海軍があるから、これをもつて海上權を握れば、敵を津輕海峡から一步も踏み込ませるやうなことをしない』

しかるに頼みにしてゐた開陽艦を失つたところへ、反對に敵は甲鐵艦を加へたのだから、海軍力においてもなかく、油斷がなくなつた。そこで、いくさは、勢ひ機先を制し、先手に出なければならなくなつた。榎本は、しきりに間諜を放つて敵狀を探らせた。官軍の兵力が、すでに青森に集中したことも、それによつて知つた。

三月の九日に、官軍方の軍艦八艘が品川を抜錨し北上したことも、十八日に南部領宮古港に無事到着したことも、手に取るやうに舊幕義軍の耳に入つた。官軍の軍艦が、宮古港に碇泊し待機してゐることを知つた榎本は、

『よし、まづ何よりも、甲鐵艦を奪ひ取らねばならぬ』と、海洋を望んで強く叫んだ。

肉弾七勇士

無茶なはなしだ。初めから舊幕義軍は無謀だつた。官軍の甲鐵艦を分捕らんがため、わざと南部領宮古港まで軍艦を進めようといふのだ。

こんな無茶はない。しかし、無茶はときに轉じて好策と化す結果となることもある。古來幾多の戦争で、それが試験された。

よそさまからみて無茶でも、釜さんや郁さんに、それは當意即妙の戦術なのだ。たゞそれには將兵の膽力が必要だ。幸ひ舊幕義軍は、みづから義によつて集まつた軍だけに決死の士が多い。このたびの決死隊には海兵みなこぞつて應募するといふありさま。

まづ軍艦は回天、蟠龍、高雄の三艦を選んだ。總指揮は、海軍奉行の荒井郁之助が自ら進んでなつた。參謀は、フランス海軍教師ニコル君。たゞこれは、イギリス海軍司令長官キューバのやうに、らしやめんを同乗せしめなかつた。

愛妾おれんは、だんなさまとしばしの別れを告げて、辨天町の異人應接所山田屋の海の眺めら

れる一室で、やつぱり、ねそべつてお酒をのんでゐることだらう。

旗艦回天の艦長には、義軍隨一の勇者甲賀源吾が据つた。その他腕におほえの決死の士が乗組んだ。そこで進軍。三月二十一日の朝は港にも波があつたが、ヤツつけろくといふので、回天、蟠龍、高雄の順で進んでいつた。

運わるく、翌朝は暴風。津輕海峡を乗切つて、太平洋の荒波を迎へたころ、烈風と逆巻く波浪のため針路をとることさへできなかつた。さうして、その夜にいたつて、つひに三艦が離散してしまつた。回天艦は、さすがに、しつかりしてゐた。波浪と戦ひ烈風と抗しながらも、右方に南部領を望んで南下しつゝあつた。

「荒井しやん。蟠龍や高雄を待ちませうか」参謀のニコール君は荒井に計つた。

「しかし、この暴風中に假泊することは、かへつて危険。かまふことはない、一艘で往かう」豪快な荒井郁之助は、飛沫を浴ながら強く言つた。

「だが、荒井しやん。一艘で八艘に當るは、無謀ではありませんか」

「螳螂が斧を揮つて龍車に向ふが如しだといふのだね。しかし、ニコール君。わが回天は螳螂ではない。十三挺の大砲は、回天は伊達には乗せてをらぬワハ、」と、怒濤に向つてわらふ。

「なるほど、その意氣、その意氣」

ニコールも血の氣の多い異人とみえて、荒井の一言に血を湧き立たし、よろこび勇んだ。海の豪傑甲賀源吾は、もとよりそれは望むところ。

そのうちに、暴風もいくらかをさまつた二十五日の拂曉、目指す宮古港の入口に差しかつた。「艦長、いよく面白うなつたぞ。甲鐵艦を分捕つて、まだ餘力があつたら、薩摩の春日艦をも生捕りにしようぢやないか」

荒井は、甲賀艦長をかへりみた。

「むろん。春日も分捕りますさ。長の丁度もついでに……」

薩摩の春日艦の後尾甲板で、あらしのあとの朝の太陽を迎へてゐた三等士官の東郷平八郎は、上官の大川盛義にむかつて、「大川さん。怪しい船が港口にみえますぞ」と注意した。

東郷は、筒袖に白の兵見帯をぐるぐる巻いて白いズボンをはいてゐた。大小を差してゐるが、これは、まさかのときに抜刀して敵艦に踏込むために必要だつたのだ。士官も兵士も、みな、邪

魔だ長い奴をブツ込んでゐる。

東郷は、瘦きすで、背が低かつた。砲術方の大川は、その反對に六尺豊の大男。黒の洋服に三日月だといふのに、やはり白ズボンをはいて聊か得意然としてゐる。

「どこだ？」大川は、小手をかざして港口を望むと、なるほど二本橋の火船が、曉の海を乗切つて、こちらへ進んでくる。

「東郷君、あれは、アメリカの火船だ」大川は、東郷だけではなく後尾甲板の誰にもきこえるやうに言つた。

つんつくりんの、異風装の海兵たちは、みな沖合に眼を投じた。二本橋の火船が、あきらかに星條旗を掲げてゐる。誰がみてもアメリカの火船にちがひない。

「アメリカの火船が、どうしてこの宮古港を訪れたのでせうか」

東郷は、大川が事もなげに言つたことが、満足できなかつた。

「さア、わからんな。さき様がどんな用向きがあつて寄港したのか、わからんな。炭水の補給でやつてきたかな」

「しかし宮古は開港場ではないから、みだりに寄港はできません」

「といつて、二三日來の暴風で、針路をあやまり、海洋を流れてゐたので、炭水が缺乏したとしたら、どこへでも寄港するよ。われくがもし海外へ赴いて、さういふ目に遭つたら、やはりサンフランシスコでも、シアトルへでも寄港して炭水を補給するよ」

「アメリカは門戸を開放してゐるが、わが國では、開港場以外に外國船の入港を禁じてをります。あれは、アメリカの火船ではないと東郷は睨みました」

「ほう、アメリカの火船ぢやない？……君には、あの橋にひるがる星條旗が見えんのかい」大川は大仰にわらつてみせた。

「たしかに、星條旗をかゝけてゐますが、あれは、舊艦らしいですぜ」東郷の、大きな双眼が異様にかゞやいてをる。

「ほう、舊艦……はてね。日本の船が、アメリカの國旗をかゝけて入港するとはおかしいぜ。それとも、榎本が、金に窮してアメリカへ軍艦を賣つたのかな」大川は、いよく呆けてみせる。

「榎本さんは、軍艦を賣りはしません。あれは榎本さんの戦略です」

「さう斷言なされるところをみると、君ア、たしかに見とどけたのか、あの火船にアメリカ人が

乗つてをらすに、釜次郎の奴が、乗つてをるといふのだね」

「さうです。アメリカの國旗をかゝけて、官軍を油断さして、われに近づかうといふのです」
東郷は確信をもつて言つた。

大川もさう言はれると怪しく思つたが、「しかし、そんな戦略を弄して、もしアメリカに知られたら、榎本は何と言ひ開きができるか」といつた。

東郷は、落着いた口調で答へた。

「敵陣に迫るとき他國の國旗を掲けても、いざ開戦の機にいたつて、自國の旗に引かへる時は一向に差支なしと、萬國公法にあきらかに示されてあります」

後尾甲板の海兵たちは、なるほどと思つた。そんな駈引ができるとは初耳だといつた顔付で、ふたゝび沖の火船を望んだ。星條旗をひるがへした三本櫓の怪しい船は、ぐんぐん進んで甲鐵艦に近づいてゆく様子。

「それ見たまへ。あれはまさしくアメリカの船だ。なぜならば、甲鐵艦は昨今わが官軍に引渡したばかり。したがつてアメリカの海軍技術者が、まだ大勢甲鐵艦に乗つてをる。品川から、こへ来るあひだの運轉の成績を示すために同乗したのだ。その任務が、こへ来て果されたので

アメリカ海軍の技術者を引取りにやつて來たのがあのアメリカ火船なのさ。見たまへ、アメリカ國旗をかゝけたまゝ、甲鐵艦へ近づいてゆくではないか。東郷君、榎本がよし萬國公法の明文を戰略に應用するとしても、あゝまで大膽に、官軍の僚艦を無視して甲鐵艦へ近づけるものではない」大川はさういつて、ことさらに胸を張つてみせた。

海兵たちは、大川の説明にもやはり、なるほどとなづいた。しかし、三等士官の東郷だけはさうは思はなかつた。

戦機は、一見無茶とおもはれるほどのことをしなければ、つかめるものではない。イギリスのネルソンがトラファルガーの海戦のときも、この無茶をやつて勝つた。ナポレオンのアルプス越えも、いはば無茶の功名だ。

「大川さん。しかし、あの火船の型は、幕艦に似てをりますよ」とまだ屈しない。

「ところが、幕艦の開陽は坐礁して廢艦となつたといふよ」

「では、回天艦かもしれません」

「なアに、回天が單獨で奇襲を試みるなど、考へられんことだ。やつてくるなら、全艦隊がやつてくるだらう。榎本が……あッ！日章旗！」大川は、急に、瞠目して、叫んだ。

その聲におどろいて後尾甲板の海兵たちの眼が、一齊に怪しい火船に注がれた。

「おう、日章旗だ！」「國旗を取替へた！」

と、みなは、おもはず口走つた。なるほど、甲鐵艦めがけて接近して行つた、星條旗をかゝけた怪しい火船は、そのアメリカの國旗をおろして、たちまち日章旗を高々と檣にかゝけた。

東郷は、それをみると、唇を固くつぐんでしまつた。大川の不明をなじることはせず、口をへの字に曲けたなり、その火船に探謀遠慮の眼を向けた。

と、みてるうちに、その火船——たしかに幕艦と睨んだ軍艦が、甲鐵艦に砲火を浴びせかけた。

「うぬ！」大川は、やつと、かう、唸つた。三等士官に對するきまりの悪さを、それにまざらはして、うぬ、うぬと、連發する。

朝陽艦でも、艦長中牟田倉之助が逸早く幕艦回天の突入を知つたのだつたが、なぜか砲を差控へた。のちに海軍々令部長となつたほどの人だから、萬國公法の明文を戰略に應用してゐるなど氣がついたが、何しろアメリカの國旗を揚げてゐるから、砲火を浴せるわけにいかない。

甲鐵艦にはもとより、朝陽艦にも外國武官が便乗してゐる。アメリカ武官のみてゐる前で、た

とひそれが回天艦とわかつても星條旗に向けて發砲したら、あとで、どんな難癖をつけられるかわかつたものではない。

そこで、今に國旗を取かへたらと、その機を狙つてゐるうちに回天は、たくみに甲鐵艦の左舷へ廻つてしまつた。つまり、朝陽や春日や丁戌艦からみれば、甲鐵艦のかけになつたわけだ。

「うぬ」と、春日の大川のやうに唸つて、さて砲術長に發砲を命じようとしたが、味方の甲鐵艦が邪魔になる。

「取舵だ！」かれは、烈しく怒鳴つた。港内を大迂回して、回天艦と一戦を試みようといふのだ。が、戦闘準備もないところへ、不意に襲はれたのだから、艦隊の統制がゆき届いてをらぬ。まだく海戦には、よほどの日があらうと、宮古港あたりに待機してゐたのだから、いきほひ氣がゆるんでゐた。

そこで朝陽が大迂回をしようとしたとき、春日も丁戌も同じく迂回を試みた。狭い港内で、おたがひに自儘に大迂回をやらうとしたのだから、頭の鉢合せ、お尻の衝突がはじまりさう。おまけに、多少あわてゝもゐた。

その間に回天艦は、大砲を連發しながら、舵を轉じて甲鐵艦の左舷に掛けていつた。これも

無茶。荒井郁之助は無茶ばかりやる男だ。それとも、参謀ニコールの献策か、艦長甲賀の獨斷か
とにかく敵艦の左舷へ乗かけたから敵もおどろいた。自慢のアメリカ渡來一分間百八十發の連射
砲ちやいけな。官軍の將兵は、小銃や槍をもつて應戦した。

その槍襖の只中へ、小銃亂射の中へ、回天艦から刀を揮ひながら躍り込むものがあつた。つゞ
いて一人二人、五人、七人——大將が無茶なら家來も無茶だ。甲鐵艦の左舷へ乗つけたが、何分
にも回天の甲板の方が高く、敵艦は遙に低い。どや／＼と乗り移つて肉弾戦を試みるわけにいか
ない。

そこで自發的な決死隊。廟行鎮の肉弾三勇士のやうに、七勇士ほどの人数が、高い回天の甲板
から低い甲鐵の甲板へ、ボン、ボン、ボンと、肉弾を投げつけた。

驚いたのは官兵たち。小銃を擬し、槍をしごいたが、氣を吞まれてゐるから、どつこい、うま
くはその肉弾を田樂刺し、芋刺しといふわけにもいかない。

そのまに、肉弾七勇士は當るを幸ひ殲倒し斬りまくり、たちまち敵甲板に屍の山を築いてし
まつた。

いや、おどろいたのは、同乗のアメリカ武官たち。こんな、野蠻な海戦といふものは、世界の

海戦史にも見當らぬと、おもはず嘆聲を洩らした。

薩摩の海兵にも、もちろん無名の勇士がゐた。

こちらも拔刀、しかし鬼神のごとく暴れ狂ふ肉弾七勇士へ、ボン、ボン、ボンと肉弾を打つけ
ていつた。この場合、小銃も、刀も、槍もそれは無用の長物。肉弾には、肉弾にかぎるのだ。

たちまちそこは二七、十四の肉弾の組打が始まる。

敵も味方も、このさまをみて、われを忘れて見物してゐる始末。さながら、戦國時代の一騎打
の勝負が海の上で見られるのだから、科學を超越してゐる。無茶を上越してゐる。

こちらは、回天艦長甲賀源吾。はじめから甲板梁のうへに突つ立つて兵士を指揮してゐるが、
やはり敵艦上の肉弾戦を見惚れてしまつた。「その意氣、その意氣！」いくさを忘れ、手を拍つ
てよろこんでゐる。

あたかも、海軍傳習所の兵二調練のあとで、傳習生たちの相撲を見物してゐるといつた調子。

「おもしろい、おもしろい」

と、そのとき、迂回してきた朝陽艦の射つた弾丸が、甲板梁の甲賀の左の股を打貫いた。
「あッ！ 畜生！ 痛快だ」

なにが痛快なものか。敵弾に股を打貫かれて痛快もあるものではない。甲賀は、はじめて、戦争らしいものを身にかけておもしろくはす痛快を叫んだ。しかし、それは、敵の五十斤砲ではなくて、小賢しくも小銃弾だった。

甲賀は、それに気がつくとも、につこり笑つて、

「見物止めい。射ち方にかゝれい」をかしな號令を發したものだ。

回天の兵士たちも、その怒號におどろいて、はじめてわれにかへつた。甲鐵艦上の、肉弾戦を見惚れてゐる場合ではないのだ。

「おい、艦長の左の股が眞赤になつとるぜ」

そんなことを、叫ぶものがあつた。

「おい、戦争なんだ。いくさなんだよ」

にはかに、小銃を取りなほすものもあつた。砲術方は、大砲の筒口の掃除にとりかゝる。

「そうれ來い」

ドバババン。五十斤砲が、重たくうなり出した。バチ、バチ、バチ。小銃の音が、小さく、姦ましくひびきだした。が、そのときはもう、回天も敵の諸艦のために、ぐるり取圍まれてしま

つてゐた。

荒井郁之助は、「しまつた」とおもつた。

みると、甲鐵艦上の肉弾戦があらかた片がついてゐた。無名の肉弾七勇士が、敵の無名の七勇士と取組合つたまゝ息絶つてゐるものもあつた。屍の山に打重なつて動かないものもあつた。強敵とともに、引組んだまゝ海へ落ちてしまつたものもあつた。敵のために、串刺しに遭つてにつこり笑つて落命したものもあつた。敵を追うて後尾甲板の方まで断けていつて見失つたものもある。

もう片がついたのだ。そこで、「後退！」と荒井が叫んだ。

そのときまた、甲板梁のうへの甲賀源吾が、「あッ畜生！」と叫んだ。

こんどは、さすがに痛快とはつゝかなかつた。右腕を、やられたのだ。鮮血淋漓として、甲板まで散つた。

「甲賀、降りろ。おれが代る」荒井は、怒鳴つたが、甲賀はやはり笑つてゐる。親柱に、左腕でつかまつて、なほも指揮するさまは凄壯を極めてゐる。

「甲賀、降りろ！」荒井が甲板梁へのほらうとしたとき、三たび飛んできた敵弾がこんどは、

甲賀の左のこめかみに當つた。彈丸は、ぐるり前額部を廻つて、右のこめかみから、どこかへ飛んでいった。

「畜生！」そのまゝ、さすがの豪傑も甲板へ顛落して息絶え果てた。

「ようし來い！」こんどは、荒井だ。甲賀に代つて甲板梁のうへに上つて、指揮した。そのまに甲鐵艦の左舷へ乗つけてゐた回天艦は、おもむろに後退した。

彼我の距離が三十メートルほどになつたころ、ニコール教師は舳の砲術方へ、

「射て」と號令した。

ドッ、ドッ、ドッ。すさまじい五十斤砲が、のろい加速で飛んでいつて、甲鐵艦の太煙突に命中。彈丸は轉々蒸氣室まで達して火をはいた。

「あツ分捕りはできない」甲板梁の荒井は、思はずつぶやいた。

甲鐵艦を分捕りにして、箱館表へ引いてゆき、榎本君の前で手柄顔したかつたが、その目的物が火を吐いてしまつては、もう用はないと思つた。

そこで、甲板のニコールに向つて「ニコール君、そろく引揚げようか」と言つた。

「さうですね、味方も、かなりの損傷です、引揚げるのはいまだすな」

相談一決。甲鐵艦を分捕りできなかったが、回天一艘で、八艘に當り散らして引揚げるのだから、けつして負いくさではないぞ……といつた意氣で、退帆を號令した。

官軍諸艦の砲撃が、あらためてはけしくなつた。煙突を打抜かれ、火を吐いてゐる甲鐵艦までが、例の一分間百八十發の連射砲で、追撃するといふありさま。そのあひだを、回天艦は、悠々と港外へ向つて退艦する。荒井は甲板梁をおりてきた。

「おや、痛いぞ」さういつて自分の足をみると、膝のあたりが眞黒になつてゐた。「おれもやられたのか」ニコールをかへりみて笑つた。

「やられましたな」

「それにしても、甲賀君は氣の毒だつたな」荒井は、甲板で手當を加へられてゐる、甲賀艦長をかへりみて、暗然となつた。

「甲賀さんは名譽の戦死です。わたくし、日本軍人の武勇に、今さらおどろきました。なかでも將官が、まつ先になつて奮闘するさまを目撃して、感激しました」

ニコールも碧い眼に涙をたゝへてゐる。

幕艦回天を逸して、第一番に口惜がつたのは薩艦春日の將兵だつた。なかでも砲術方の大川盛

義だ。巨きな兩眼から、ボロ／＼涙をこぼし、東郷の手を固く握つて、男泣きに泣いた。

『君の意見にしたがつて、挑戦すればよかつた。君の萬國公法の議論は正しかつたのだ。濟まん、濟まん』といつて、またもボロ／＼涙をこぼす。

東郷は、少しも動じない。いくさの前も、いくさのあとも同じことだ。唇を固く結んだまゝ、回天の去つた沖の方を見詰めてゐる。

『おれに、うんと泣かしてくれ。兵兒は涙もろいぞ。西郷さんも、うんと涙もろい。西郷さんは、手ばなしで泣くが、おれは、それを真似て泣くんぢやないが、兵兒の涙もろいことは、わかるだらう』

大川は、しかしもう泣いてはゐなかつた。これも、同じく沖を睨んで、『なぜ回天を追はんのだらうか』と言つた。

東郷は、はじめて口を開いて『回天一艘を追うては、かへつて恥です。いまに箱館で相見えるまで回天のいのちをあづかつて置ませう』と微笑した。

『なるほど、よく言つてくれた。それでおれの胸もすいたぞ。箱館へ出かけていつたときは、そのときこそは、おれの射撃の妙術をもつて、回天はじめ幕艦を一氣に爆沈してみせよう』

あとの祭だが、それも決して空元氣ではない。男泣きに手ばなしで泣くほどの情熱がある。薩摩人の血のにじむ情熱。

『それにしても、賊軍にも、血の氣の多いものがあるとも見えるのう。甲鐵艦へ諸身で躍り込んだ七勇士は、敵ながら天晴だ。そのさまが見たかつた』大川は敵をほめそやした。

『味方にも、豪の者があつたさうですね』東郷の負じ魂の片鱗がチラリ。

『七勇士と七勇士が甲板で組合つたときは、敵も味方も、しばし鳴りをしづめて見物したさうだ。まるで戦國時代のいくさのやうだなア』

『いつの時代でも、最後は肉弾です。將來、どのやうに立派な兵器ができ、いくさの形式が變つても、最後の切札は肉弾だと思ひます』

『それよ、しかし、異國人にはそれがあかな』

『……………』

東郷は、そのまゝ口を噤んでしまつた。薩摩灣で、英艦砲撃のとき、弾薬を運びながら大砲彈藥の改良といふことを痛切に感じた。大阪戦のとき、同じこの春日に乗つて幕艦開陽と交戦したとき、じぶんの放つた四十斤砲彈が、みごとに開陽に當つたとき、なほさら歐式兵器のありがた

さを思つた。三度目の、今日この宮古港で回天とたゝかつたときには、兵器のありがたさもさることながら、やはり肉弾だといふことを、しみじみ感じた。

『日本が將來、國際的にいろいろ面倒なことが起つて、いくさをする場合、いたづらに兵器のみ拘つてはならぬ。やはり人だ、人間の強さがなければならぬ』
さう、心に呟いて、いよく唇を固くへの字に結んだ。

戦争ゴツコ

いくさの直前、はやくも外國の軍艦が箱館沖へやつてきた。イギリス、フランス、アメリカの諸艦。

これら歐米の軍艦が、何をしにやつて来たかといふに、未開の國東洋の島帝國の生れて間もない海軍が、どれほどの實力を有してをるか、それを念のために觀戦しようといふに他ならなかつた。つまり、日本國內の戦争ゴツコを見物に來たのだ。

しかし、幼稚な海軍だが、なか／＼馬鹿にしたものではないと、かれらも、ひそかに思つてる。馬關戦争をみたり、鹿兒島灣の海戦を實際に味はつてゐるイギリス、フランスの軍人は、單なる戦争ゴツコ以上のものを期待してゐた。

ことに、それらの外國軍人は、それ／＼の觀點から、こんどの箱館戦争に善處しようと、戦ひの前にはやくもやつて來たわけだ。

イギリス支那海艦隊は、先年薩摩に敗けたが、それを根にもつていまだに官軍を敵視しようと

はせず、どうやら、薩長土肥の聯合軍に秋波をおくつてゐるといふありさま。『いつでも、イギリスの軍艦をお貸申さう』と言つてゐる。

アメリカの海軍も、官軍に外交辭令的な好意を寄せてゐる。幕府のためにつくつた甲鐵艦を、いつのまにか官軍に引渡したアメリカだから、話によつては應援をしようといふ肚らしい。

ところが、フランス東洋艦隊だけは、考へ方が異つてゐる。

『官軍といへども、まだ正規の日本の軍隊といふことはできない。幕軍とて最後の戦に官軍に勝てば、それで再び徳川の世にならう。要は……彼我の海軍の實力によつて決せられる。榎本釜次郎の率ゐる舊幕海軍は、俄つくりの官軍の海軍とは比較にならぬ實力をもつてゐるから、こんどの一戦で、どのやうに局面が、轉換するかわからぬ』といった觀想だつた。いや、何よりもイギリス、アメリカが官軍に肩を入れてゐるのだから、わがフランスは、いきほひ義軍を支持しなければならぬ……といった風に、感情もからんで義軍最負に傾いてゐる。

そんなわけで、ひよいとすると、官軍と舊幕義軍の海戦が起ると同時に、フランス對イギリスの海戦も起りさうな形勢さへほの見える。

そのうちに、南部領官古港に滯船してゐた官軍の軍艦が青森へ集まつてきたといふ情報があつ

た。その軍艦の護衛で陸兵を運送船に搭載し、箱館へ攻め寄せるのも間近に迫つたある日、我慢できなくなつたフランス東洋艦隊司令長官ビュールが、副官と共にひそかに榎本に會見を求めた。

榎本は、繁忙な軍務の小閑をみて、ビュール長官を、會所町の臨時應接所に招じた。海軍教師のニコール君が、通詞の役を承はつた。

『いよく、いくさが始まりさうだが、貴官は、このいくさに勝てば、どういふ方針をとられるか』

ビュール長官の質問は、あまりにも露骨だつた。それだけに、どこかに友誼的でもあつた。

『それは、未だ考へて居りません』榎本は、あつさり、その質問を避けた。

『いや、その方針は、いくさの前に、ぜひ必要だと思ひますが』

ビュールは、片頬に笑みをうかべてゐる。

榎本は白々しく、『まったく何の方針もない。薩長の兵が攻めて参つたなら、よんどころなくこれを追つ拂ふまでのこと……』と、いつた。

ビュールは、それでは満足できず、『しかし、尙箱館に立籠つて官軍に備へてゐる以上、そん

な無方針では困る』

「いや、われ／＼は、たゞこの蝦夷地を開拓し、失業流浪の人々に授産し、北方に安住の地を得ようといふに過ぎない。いたづらに官軍とことを備へるを欲しない』

「ところが、實際問題として、官軍が攻め寄せてくる日も間近に迫つて居るではないか、避けようにも避けられぬいくさだ。官軍が攻め寄せても、貴官はこれに對抗なさらぬか』

「いや、蝦夷地に一步も官軍の足跡を印せしめない覺悟である』

「では、勝つか負けるか、その二途のみよりない。貴官は戦争に勝たうとなさるだらう』

「もちろん』

「いくさに勝つても津輕海峡を越えて内地へ追撃なされぬのか』

「その必要を認めない』

「もし』といつてビュールは、ちよいと口を噤んだが、再びつゞけて、「もし、イギリス艦隊が官軍に加勢して、幕軍に當つたならばどうなさる』

「双向ふものは、誰彼の容赦はなく、殲倒す覺悟』

「だが、イギリス艦隊が官軍に味方して、いくさを挑んだならば、失禮だが、幕軍はたうてい

勝目があるまい。せつかくの蝦夷地開拓の壮志も、これによつて挫折するおそれがある。それを貴官は憂へぬか』

「そんな先のことまで考へてはをらぬ。日本武士は戦ひに望んで善處するより他に念はない』

「なるほど……しかしイギリス軍の加勢で負けるのは情ない。わしは幕軍のために、それを憂ふる。何とか、ならぬものか』

「何とか……とは？』

「官軍にイギリス艦隊が力を貸すうへは、フランス東洋艦隊が幕軍を支持しようとするのは、あまりにも當然な話だと思ふ』

榎本は、やつと眞剣にビュールの言葉に耳を傾けるやうになつた。

「東洋におけるフランスの勢力は、プロシヤ、イギリスに劣るものではない。もちろんわが東洋艦隊は、極東第一の實力をもつてをる。決してイギリスに負けることはない。貴官もその點安心なさるがよろしい』

榎本は、ふしぎさうに、

「安心とは？』

「されば、イギリスが、いかに優秀の海軍を誇らうとも、幕軍では……」
「ちよつと、お待ちなさい。それは、イギリスとフランスのいくさに就て語られてゐるのではないかな」

「いや、舊幕と官軍とのいくさに、イギリスが官軍に味方いたした場合、わがフランスは幕軍に加勢をいたさうといふのである。異存はござるまい」

「勝手に、いくさをなさるがよろしい」

「なに？」

「いや、日本領海三海里外で、イギリス、フランス兩海軍が、どのやうに砲火を交へようともわれらは、厳正に中立を守ります」

榎本はきはどいところで一流の呆けかたをして、ビュールを煙に捲いてしまった。

ビュール長官は、周章で、「いや、わが軍とイギリスとが、事を構へようとするのではない。誤解されては困る。舊幕軍が、當箱館において薩長土肥の大軍を迎へるのではないか。そこでわが海軍が、誠心もつて舊幕軍のために力を貸さうといふのである。誤解されては困る」と、つけ足した。舊幕海軍の利けものときいてゐたのに、聞きしに劣る男だ……と、ビュールは、腹のう

ちで歎いた。

榎本は、なほも呆けて、「どうも、意味が、よくわかりませんな」

「榎本さん、どうか、眞面目にきいてください。つまり舊幕軍がいかに強くとも、薩長土肥の大軍、それにイギリス海軍が加つて攻めて参つたならば、たうてい勝目はない。よつて、わが海軍が加勢いたさうといふのである。おわかりか」

「……………」

榎本は、すでにビュールの外交的辭令の底を見抜いてしまつてゐる。

フランスが、こんどの日本國內の戦争を機會に舊幕軍に助勢して、みごと官軍を撃退し、大衆の信望をはなれた徳川に再び天下の權を握らせ、その背後にあつて徐ろに極東の海軍の覇をつかまうとするにちがひない。

いや、徳川を囚につかつて、あはよくばわが日本國をフランスの屬領としようとの、かれの肚にまらひはない。これは、イギリスやアメリカが巧に官軍に接近して、日本の分割を圖つてゐると同じ野望なのだ。

榎本は、それを思つて慄然とした。

「さうだ、わが義軍は、この際どうあつても敗けてはならない。幸ひにして勝てばよいが、敗けたら力の薄弱な官軍は、やがてイギリス、アメリカに乗せられ、わが國はこれらの毒爪にかゝつて分割の憂目をみるにちがひない。負けてはならぬ。といつて、勝つためにフランスの助勢を得ようとするのも危険だ。」

ビュールは、そんな深い榎本の肚を知る由もなく、

「どうだ。おわかりかな。徳川再興のために、わがフランス海軍の支援をうけられては！」と一膝のり出した。

「お志はありがたいが、義軍はこの際獨力をもつて、官軍に當りませう」

「もし、イギリスが官軍に軍艦砲弾を貸しても、貴官は、それに對抗せぬか」

「自力で對抗しませう」

「それでは舊幕軍は負ける」

「勝敗は時の運です」

「と、いつて、あきらめられぬ場合だ。日本國家の浮沈にかゝるいくさを、さう投やりに捌かれては困る」

もう江戸ッ子の喧嘩早い釜次郎の氣性は我慢がならなかつた。

「このたびのいくさは、國內の事件であつて、賊軍といふも官軍と稱するも、たがひに國家のために懸命するもので、けつして、これを國外に洩らすべきものではない。したがつて、勝敗ともに日本の浮沈にかゝるものではござらぬ」と、ボンと最後の土壇場で突つ放ねてしまつた。ビュール長官は、當が外れて眼を白碧にしたまゝ、次の應答がでかかねた。これほど、はつきりした意志を示されては、もうこちらの野望を伸ばすことができない。

ビュールは、這々の體で退却してしまつた。

舊幕義軍が、箱館の内外を固め薩長聯合の官軍を待ちわびてゐるが、どうしたものか、なかなか攻めては來ない。來ないはずだ。四月七日まで、海陸聯合の官軍は青森に集まつて悠々戦機をみてゐたのだ。

あくれば八日、陸兵を運送船に満載し、軍艦がこれを護衛してやつと青森を發したのだから、義軍が待ち呆けたのは無理もない。官軍は、津輕海峽を西に廻り、九日の早朝、江差沖を過ぎ乙部村に着いたが、そこには義軍の手配も薄く、何の苦もなく陸兵の上陸をみるにいたつた。

「ほう釜次郎の、手ぬかりかな」

官軍の將たちは、みんな意外の面持で、江差一帯の地を攻略してしまつた。

さて、その報が一たび義軍の方に傳はると、こちらも鼻息が荒く、「幕艦の威勢におそれ、江差廻りをするななか、やはり芋侍だけの智恵しかねえ」と言つて、タカをくつた。

そのとほり、これは義軍の實勢をみて山田國義、黒田清隆等の深慮からだつた。官軍は、七部に上陸してから軍を分つて四道に進めてゐる。

第一は江差から海岸傳ひに福山を襲ひ、さらに箱館に進むもので、第二は上の國の天川を遡り、間道を木古内に出て海岸傳ひの軍と合する。第三は鶴村から山道を越えて龜田平原に出る。

第四は安野呂から山を越えて、遠く噴火灣の部落といふところへ出るといふわけで、この四道のうち、海岸傳ひの軍路は容易だが、その他の山傳ひは、山を斫り開き道を修め、橋を架けながら進むのだから、たいへんな難行軍だつた。道々、義軍との小競合が各所で演ぜられた。もちろん一進一退といふ状態で、いくさの妙味をお互に感ずることがなく、牛の歩みのやうだつた。

たゞ、さすがにお城下の福山での合戦が、めざましかつた。こゝには、人見勝太郎が、松前奉行として控へてゐて、官軍を一步もこれより入れまいと、義軍の方もよく防いだ。寄せくる大軍を、二度も三度も反撃したが、もとより衆寡敵せず、十七日の激戦のうち福山を官軍の手に渡し

恨みを呑んで、退却といふことになつた。

木古内方面でも、山道からくる官軍を、二度も迎へ撃つたが、激戦二日に渡つて、これも義軍の兵數少く引揚げるといふ有さま。

それらの義軍は、たいてい矢不來へ集まつてきた。こゝで死守して官軍を追ひかへさうといふのだつた。まづ鶴山道に構へた義軍は、土方歳三を隊長として、二股に壘を築いてこれに據り、官軍を二三度撃退したが、たうとう支へ切れずに總崩れとなり、二十九日には遂に矢不來が破れたので、もう、かうなる上は官軍に後を絶たるゝ憂ひがあるので、引揚げて五稜廓に入つた。かうして義軍は、五稜廓と箱館諸臺場のわづかな部分を保つのみとなつた。

官軍は、かうして小競合をつゞけながら五稜廓まで義軍を追ひつめていつたが、そのあひだ海軍でも、海岸傳ひの陸軍に應援するほかは松前の臺場を攻めるぐらゐで、西洋の海戦にみるやうな痛快味を満喫することができず、若い士官たちは、陸兵の進撃をむしろ羨むといふありさまだつた。

何しろ、回天はじめ幕軍諸艦とめぐり合ふこともできず、臺場を相手に、いくさごつこをやるだけだから、腕が鳴つてかなはぬ。

福山の立石野臺場を沖から砲撃陥落せしめ、松前が官軍の手に歸したのを見、甲鐵、朝陽、丁戊、春日の各艦が、ぐるり箱館の方へ廻つた。そのころは義軍はもう、五稜廓と辨天、神山の臺場を守つてゐるありさまで、勝敗の数はすでに明らかになつてゐた。

たゞ回天、蟠龍の諸艦が、依然幕艦の威力を誇つて官軍に砲火を浴せてゐたが、こゝで官軍の諸艦と顔を合せることになつた。春日の艦長赤塚源六は、いくさの前に、三等士官の隈崎左七郎に言つた。

「左七郎、だいぶ外國の軍艦も觀戦してゐるやうだな」

赤塚は、木綿の着流しに大小を差して、いがぐり頭だつた。隈崎は白の洋袴のハイカラ士官、六尺豊の魁偉な體格の持主だ。

「アメリカ、フランス、イギリスの諸艦が、ぐるり取巻いて觀戦して居りますな」

「イギリス軍艦のうちに、おれんといふらしやめんが乗つてゐる筈だ。いくさが終つてから、あ奴を生捕りにする工夫はないものかな」

「おれんといふのは？」

「文久のいくさのとき、イギリス旗艦に乗つてをつて、われく、西瓜隊を愚弄した、憎むべき

女だ

「あ、あのことを、あんたは、未だ根に持つてゐますか」

「憎まずにゐられるかい。おれはこの海戦に勝つたら、イギリスの軍艦に交渉して、おれんの引渡しを求めらるつもりだ」

「もし、引渡してくれなかつたら」

「そのときは、イギリス艦へ乗込んでいつて、暴れてやる」

これを、はたできいてゐたのが伊地知休八。

「赤塚どん、おれんは、もうイギリス軍艦には居らんぜ」

「なに」

「あの女は、フランスの軍人を旦那にしてゐる」

「ほう、相手は誰だ」

「相手は、榎本の海軍顧問でニコールといふフランス軍人さ」

「賊軍にまじつてゐるのか」

「ニコールは加つてゐる。しかしおれんのやつも一緒にきてゐるかどうか、それはわからん」

「いや、外國人は、いくさにも女を伴つてゆく。そのニコールといふやつも、たぶんおれんを連れてきてをるだろ。萬事歌風を做つてをる榎本が女を携帶することを差しゆるしてをる」

「あんたは、箱館の賊軍攻撃の第一條件は、つまりはおれんを生捕りにしようといふのだな」
伊地知は笑つた。

「それもある。あのらしやめんの奴は、何といつても肚に据ゑかねる奴だ」

「もし、いくさが終つて、おれんの奴、ニコールとともに降伏して命乞ひをしたら、あんたはどう處分する？」

「許さん。斷じてたすけるわけにいかん。一寸試し、五分みにしてくれるわ」

こんなありさまで、官軍の將兵たちは舊幕の殘黨を箱館まで追ひつめても、まだ、いくさの意義を解さなかつた。

春日の艦長までが、そんな氣持でいくさをしでるるのだから、部下の諸兵、薩長土肥の烏合の勢に、こんどのいくさが、天下の形勢にどう響くかの見解もつかぬのは當然。だが、さすがに、思慮ある青年士官たちには、おのづと一つの戰爭觀があつた。

——こんどのいくさで、わが海軍の實力を試すのだ……と。

のちのアドミラル・トウゴも、このときは三等士官、やはり、こんどのいくさを實彈演習のやうに解してゐる一人だ。宮古港で、舊幕艦回天のために一杯喰はされたときは、人並に口惜しいとおもつたが、じきにもとの平靜にかへつた。

松前攻撃ののち、艦長赤塚源六の命によつて書いた報告書に、
官軍、立石野臺場八九町程の處迄押寄するや否や、諸艦一同繰打にて發砲す。此時、甲鐵、朝陽、丁戌春日合艦す。賊も砲臺を築き、海陸へ發砲防禦す。暫くして官軍山手の方へ筋違ひに進撃、賊の砲臺を我横に見下し發砲す。賊不堪して遂に敗走す。諸艦も城下の方へ廻り、城中に止まり、吉岡、福島の方へ落去、夕刻、官軍城下へ侵入の旗見ゆるを以て發砲を止め、伊地知休八、東郷平八郎を以て陸軍へ問合せしに、賊は總て逃げ去り、既に落城の趣なり。但し此日賊彈一も中らず、當艦の發砲は凡そ九十五。

とあつた。これではまるで演習報告だ。

たゞ東郷ら進歩的青年士官は、この戦ひを機會に大いに武を練り、他日外國と事を構へた場合にその實力を發揮しようとの肚だつた。だから、どう考へ直しても、箱館に籠る賊軍に敵意を感じない。

この點は、敵將榎本らと同様だつた。彼我將兵の胸中が、そんな工合だから、いくさに張がない。矢不來が破れて五稜廓に立籠つた義軍や、辨天台場や神山臺場に孤立して官軍に對抗する連中と、これを攻める海陸官軍とのあひだに、明けても暮れても相變らず小競合が續くのだつた。

「どうも、賊軍を相手には、戦争にならぬなア」隈崎左七郎が、太い腕をさすりながら、東郷平八郎をかへりみて言つた。

箱館沖で、官軍の陸兵に應援して、辨天台や神山の臺場に向け發砲したり、幕艦と砲火を交へてみたりしても、どうも氣乗りがせぬので、みんな、さういつてコボしてゐる。東郷は思慮ある眼付で、隈崎をじいつと見るだけだつた。

「鹿兒島灣で英艦を追つ拂つたときのやうな面白さが味はれん。何とかならぬものか」隈崎はやはり太い腕を撫でてゐる。

「戦争は民族と民族との敵意から起るものだ」ぶつきら棒に、東郷の重たい口からそんな言葉が出た。

「それは當然だ。が……」

「たとひ賊軍といへども、みな同胞だ。同胞の血をみてよろこんだのは、戦國時代のことで、

今日は國內の争ひを好むものは一人もあるまい」

東郷はふだん無口だが、時には思はぬ議論を構へることがある。

「しかし、現にいくさをしてゐる」

「これは演習だ」

「いや、君ばかりではなく、黒田さんも山田さんも、偉い參謀方がみんなその肚だから、面白

いにくさにならないのさ」

「しかたがない。面白いくさがしたければ、あの黒艦へ發砲するのだね」

東郷の指さしたのは、イギリス、フランス、アメリカの觀戰諸艦だつた。

「なるほど、あれか」

「他日、あゝいふ巨艦を相手に戦ふ時もあるだらう」

けれど、演習も小競合だけでは終らなかつた。五月上旬以來、海陸の小競合が屢あつて、や

がて十一日に至り、俄然大激戦が行はれた。最後の決戦なのだ。

彼我ともに、小競合がいやになつたからだ。はやくケリをつけてあつさり死ぬ人は死に、視杯

をあける人は擧げなければ、をさまりがつかなかつたからだ。いや、いつまでも、こんな状態を

つづけてゐると、やがてイギリスもフランスも、我慢し切れず手を出し兼ねる形勢をみてとつたから、官軍の總帥が参謀と計つて總攻撃を開始したわけだ。

無断でイギリス海軍が我に加勢するのは勝手だが、それへ賊軍が發砲し、英艦が怒つて、さらに總攻撃とならば、フランス海軍も傍観できず、待つてましたとばかりイギリス軍艦に發砲するだらう。

さうなると、もう國內の事件ではない。官軍、賊軍の争ひではなくて、日本、イギリス、フランス、それにアメリカも手を延ばして四ヶ國、五ヶ國の大戦争とならう。結果は、列強のおもふ壺にはまつて、戦争終了のあかつきは談判が開始され、日本を四ヶ國、乃至五ヶ國で分割しようといふにきまつてゐる。

「こいつは、早く戦争のケリをつけて彼奴等に乘ずる隙を與へぬにかぎる」と思つたのは、ひとり榎本のみではなく、官軍の参謀黒田らの肚でもあつた。

もちろん、青年士官や雜兵たちのうちには、列強の海軍が乗り出してきて、このたびのいくさに加はつてくれたら、とても面白い場面になる。イギリス、フランス、アメリカ、オロシヤ、それに支那も加はるかもしれぬ。

「まさに、極東の大戦争が始まるだらう。さうなつてほしい」と、血氣の青年たちは、切りにそのことをねがつてゐた。

そのうちにあつて、東郷はじめ二三の青年士官だけは、榎本や官軍の参謀たちと同意見で、列強の参戦をおそれてゐた。ことに東郷は、艦長赤塚を介して幾たびか参謀部へ獻策を試みた。

もちろん、この獻策も、血氣猪勇の赤塚はいつも握りつぶしてゐたので、東郷の意志は清水總督はじめ黒田らの参謀に傳へられなかつた。赤塚などは、はじめからイギリス、フランスの海軍が入亂れて大海戦となることを望んでゐた。

その大海戦の結果、四ヶ國乃至五ヶ國が締盟して日本の分割となり、日本民族が列強の勢力下に碌々として生きねばならぬやうになるとは、深く考へ及ばなかつたのであらう。

『外國海軍の應援などはどうでもいゝ。觀戰の外國軍艦もついでにやつてしまへ』

こんな無分別なことをいふ連中もあつた。この激しい言葉が、東郷らの深謀遠慮な獻策よりもさきに、官軍参謀部の耳に入つたので、そこでこのまゝの状態を、このまゝ數日つゞけては山々しい事件を惹き起すにちがひない。はやく戦争を切揚げる必要があるといふことになつた。

『箱館に立籠る賊軍を、いさゝかも憎むのではないが、國のためにやつつけるのだ。國のため

に、やっつけられてくれ』

さういふ、情味のこもつた、最後の決戦を試みられたのだ。

いくさの経過を、かんたんに語らう。この日、官軍は最後の決戦を試みるため、大舉して大川方面から五稜廓に向つて進撃した。さらに別軍は、前夜上磯から船で箱館山の背後なる寒川に上陸し、山上から箱館市街を砲撃しようとの策戦。

大川方面から攻め寄せた大軍を途中に喰止めることは、義軍にとつては、さほどの難事ではなかつた。三多摩の勇士土方歳三の率ゐる本隊、古屋左久左衛門の率ゐる遊撃隊などの奮戦は、殊のほか花々しく、寄せては返す官軍の大勢をいくたびか反撃するといふありさま。

ところが、箱館市街を守る義軍に拔かりがあつた。箱館は背後に山を控へて要害を誇る地勢なので、たゞ前面の敵にのみ備へてゐた。その慮を衝いて、箱館山の背後へ廻つた官軍の別働隊は山下に砲陣を布いて一度にとつと射ちおろしたので、まさか背後から迫らうとはおもはず、幾分安心して兵備も十分でなかつただけに、たちまち破れ、わけもなく官兵に蹂躪されてしまつた。そんなわけで、折角の地の利も反つて仇となり、辨天臺場はまつたく孤立に陥つてしまつた。さうなると、大川方面へ出動した義軍も、たいさう不利となつた。氣がついたときはいつのまにか挾撃に遭つてゐる。

か挾撃に遭つてゐる。

とにかく、野戦の挾撃をうけるぐらゐるばかりか、これはないので、關東勇士たちも一先づ五稜廓に引揚げることになつた。ここで、神山臺場もつひに官軍に占據されてしまふ。いまは、千代ヶ岳と辨天臺場方面だけが、連絡を断たれながらも、孤立を守つてゐるにすぎない。

いつたん、五稜廓へ引揚げた土方歳三、關東人特有の猪勇を發揮した。

『ようし、市街を奪還しよう。てめえたち、おれにつゞけ』とばかり、引止めるのもきかず先頭を切つて、五稜廓の壕に架かつた木橋を飛ぶやうに駈けていつた。

『それッ！』といふので、これにつゞく勇士は百人餘。

土方一黨は、沿道の敵陣を突走つて一氣に辨天臺場までゆき、臺場を死守する永井立藩と力を合して市街を官軍の手から奪はうといふのだ。が官兵達は、この關東男の猪勇に、指をくわへて見送るわけはない。

白刃を振り廻しながら、どん／＼突走る百人あまりの賊軍に、『それ、脱走だ』といふので、たちまち追撃、追撃。五稜廓から市街入口までの平地に一直線に白刃の火花が走るといつたありさま。そのあとに點々として残されてゆく兩軍の屍體、屍體、屍體。

面白いことには、彼我いづれも砲をもつて狙ふものがなかつた。あくまで白刃。むかしの一騎打ちの血戦だつた。

しかも、おたがひに敵を憎む心は微塵もなく、無我夢中に追つては斬り、進んでは刺し、血の笑ひを笑つて、やがて市街に入つた。

そのとき、土方は、どこからか飛んできた流れ弾に胸板を射貫かれた。

『あッ！、うぬ卑怯な』

飛び道具を卑怯な、とは、土方も、よほどの舊時代人だつた。

この日の海戦はどうであつたか——。義軍の方では、数度の戦ひに、だんぐ艦船を失ひ、すでに回天、蟠龍に過ぎなかつた。

しかも、宮古港へ單身乗入れて、甲鐵艦を分捕らうとした回天艦は、連日の敵の砲撃に艦體いたく損傷し、舵は失ひ、櫓は折れて運轉できず、いまは淺瀬に移して浮砲臺といつたありさま。

この浮砲臺とともに、最後の應戦を試みてゐるのが、蟠龍わづかに一艘だつた。蟠龍は日の丸の旗を高く掲げてゐた。宮古港で回天一艘に巧名手柄をさせたが、こんどは、たつた一艘となつて敵艦に取圍まれながら、暴れるだけ暴れて敵艦の最期を譲らうとの悲壯な覺悟のほどがみえた。

何しろ、一發の弾丸を射ち出すのによほどのひまを取る。そんな大砲で、甲鐵艦の自慢の一分間百八十發の速射砲はじめ、各艦からの猛射を浴るのだから、はじめから勝敗の數はきまつてる。しかし、蟠龍はよく力戦した。

これが最後の徳川家への奉公だ、といつた意氣で、ドカン、ドカンと射ち出してゐるうちに、やがて、どうもちがつたのか、蟠龍の發した榴弾が朝陽艦の土手ツ腹に命中した。しかも、それが火薬庫に中つたとみえて、物凄いな音響とともに火焰を吐き、たちまち全艦爆裂してもろくも海底に沈んだ。官軍の俄兵たちが、海に吞まれるさまが、こちらから手に取るやうに見える。

このありさまに、もう戦争どころではない。

『それッ！ 薩摩の芋たちが溺れる、救つてやれ。草鞋はいた芋たちの屍體を外國人に見つけられたら、國の恥だ、救つてやれ』

蟠龍の指揮官が、かういつて櫓のうへから怒鳴つた、國內のいくさで、死んだ芋侍たちのつんつるてんな醜い雜兵姿を外國人にみせたくないといふ心づくしだ。

もちろん、官軍の艦船からも同じ思惑から短艇を漕ぎ出した。しばらく、彼我の砲火をわすれて、醜い屍體の搜索にけんめいになつた。

イギリスの軍艦からもフランスの軍艦からも、西洋風なキリスト流の博愛主義者たちが端艇を漕ぎ出したが、官軍、賊軍の短艇は、それを寄せつけず、自分たちの手で溺れる者を助け、死んだ者の跡始末をしようとする。外国の博愛家たちは、妙な民族もあつたものだ、ふしぎがつたのも無理はない。せつかく、こちらが手を貸して溺れる者を助けようとする、それをさへぎり止めて、ときには白刃を擬しておどしつけて、自分たちの手で助けようとするのだから。そんなありさまで、朝陽艦の乗組員の救助や、溺死體取まとめであたら時間を取つて、改めていくさを始めたのはもう夕刻だつた。

いまのやうに、驅逐艦や水雷艇といったものが無かつたので、夜襲はなかくうまうかぬ。どうしても、日のあるうちに猪小才な蟠龍を仕止めなければならぬといふので、官軍の諸艦は、いよく蟠龍に猛射を浴せる。そのうちに、蟠龍の弾薬が盡きてしまつた。

「船を焼いて、上陸し、辨天台場へ立籠らう」
そこで船を焼いた。これであつさり海戦は終りを告げたわけだ。

武 人 の 情

この戦争の真最中、龜田の方から、陸路を迂回して五稜廓へ向つた一人の怪しい青年が官兵に捕へられた。

年の頃二十二三、色あくまで白く黒羽二重の裾裂羽織に金襴裾野袴、細身の大小を差した水も滴るほどの美男子。

どうやら、見たことのある男だと思つたが、これが、男に化けてゐる榎本の愛人お勝の田島勝太郎だが、もちろん官兵たちのうち一人としてこれを見破るものはなく——まつたく、どうも、美しい男もあつたものさ、とさゝやき合ふばかり。

いくら美男子でも、戦線を單身突破しようといふのは怪しいかぎり。そこで、捕へて屯所へ引立てられた。

長州出身の隊長格が、進んで取調の任に當つた。屯所の外では、間近に豆を煎る様な小銃の音が、しきりだつた。

「こらッ、おまへの出身藩は？」

隊長も、もちろんお勝の美しさに見惚れながら、聲音だけに威厳をみせてゐる。

「そんなものはない」お勝は、あくまでも男らしく装うて、非禮の言葉を吐いた。

「出身藩をわきまへぬのは、つまり、國籍が日本國にはないといふことになるぞ」

「いや、僕は江戸ッ子」

「江戸ッ子？……ぢや龜川の殘黨だのう」

「下谷ッ子さ」

「名を名乗れ」

「忘れた」

「何に！ 吾輩を侮辱するかッ」

「いや侮辱はしないが、打續く戦ひのため名を忘れてしまつた」

「うむ、江戸から、まつすぐにこれへ參つたか」

「まつすぐに、鐵砲丸みたいに飛んでくるわけにもいかないから、歩いて來たし、馬にも乗つたし、船にも乗つた」

「どこへ上陸したか」

「江差濱」

「そのとき官軍の手に捕へられなかつたのか、江差濱には、肥州の兵が守つてゐるはず」

「さア、アイヌが居て僕に土下座をしたよ」

「こら、もそつと言葉を謹まぬか」

「だが、これが地聲で仕方がない」

「よし……それで、これから何處へ參らうといふのぢや」

「五稜廓」

「なに！ 五稜廓？」

「いや、箱館病院」

「なに、病院？ 病院に何をしに行くのぢや」

「さア、何をしに行くのか、僕にも一向にわからぬ」

「黙れ！」

「では、山の上の遊女屋へ參る」

「黙れ、黙れ、いよく吾輩を侮辱するにおいては、その分に捨て、置かぬぞ」

「いや、侮辱などもつての外だ。僕はこれから、箱館市街元町なるフランス館、つまり天主教會にメルヌ・ド・カシユン師を訪ねて参る」

「うむ、おのれは、切支丹だな」

「明治の御代のありがたさ、切支丹は御法度ではないはず……」

「しかし、切支丹の怪しい坊主の所へ、戦争の最中に、たゞ一人訪ねて行くといふことが何より怪しい。坊主の所へ何用でゆくか」

「そんな他人の内密事など、根掘り葉掘り聞くものぢやないよ」

「いや、坊主と榎本との仲が怪しい。そして、おのれが、何よりも怪しい。どれ、そのふところを見せろ」

隊長は、お勝のふつくらしした胸元へ手をやらうとした。

此時ばかりは、お勝の勝太郎はぎよつとなり、思はず二三歩後退りして、おのが胸に手をやつた。隊長は、ニヤリ笑つた。

「その胸のふくらみが怪しい。何を隠してをるか」

「……………」

「それとも、そのふくらみは、乳房か」

「えッ！」お勝は、顔面蒼白となつた。捕へられて、むごたらしい目に遭ふことは一向に怖れぬが、あくまでも男のまゝで殺されたかつた。それが、人もあらうに長瀬あたりの足輕上りに乳房を弄ばれたり、大切なところを露はにされたりしたのは、死に切れない。第一、榎本の釜さんに濟まなれと思つた。

「おい、おまへの胸のふくらみは秘密書類か、それとも、乳房か、はつきりと申立てろ。云はぬと手荒なことをしてまで、正體あばくぞ」

「どっぢや」

「……………」もう絶體絶命である。

「どっぢやら乳房らしいぞ。見せろ」

日焦けのした、いやな目付の隊長は再び手をのばして、お勝の乳房に觸れようとする。それを振拂つて、腰の一刀に手をかけた。

「乳房ならどうした？」

「それが乳房なら、おぬしア女だな」

「……………」

「おぬしア、やつぱり女だな」

「女なら、どうした」やぶれかぶれで、おもはず言つてしまつた。

「女か、女ならいよく怪しいぞ。男装して戦線を抜けようとするには、仔細があらう。見破られたら観念して、包まず申立てろ」

「いまも言つたとほり、元町の天主教會へ切支丹坊主を訪ねていくのさ」

口から出まかせに言ふのではない。もちろん教會へカシユン教父を訪ねてゆくのではないが、長崎時代のカシユン教父を知つてゐたし、その頃箱館の元町で教會を建て、傳道に一身を捧けてゐるといふ風のたよりを、ふと思ひ出したので、それを訪ねるといつて此場の危急を脱れようといふのだ。

「生臭い、いやさバタ臭い坊主のところへ、お伽にゆくのか」

「そんなことは、どうでもいゝぢやないの」いつのまにか、勝太郎は、女の聲になつてしまつた。

「いやバタ臭い坊主のところへ、おぬしをやるのは惜いものぢや。どうだ、あんなところへ往くのは止しにせい」

「ぢや、どうするの？」

「吾輩に、その肌をゆるせ」

隊長は情熱の眼をお勝の全身に注いだ。

「ば、ばかにしてらア」

「何に！」

「おまへさんなどに許す肌ぢやないよ」

「ぢや、誰にゆるすのぢや」

「天下第一等の人傑に許す大切な肌なんだよ。そんな足輕上りの芋たちに、肌をみせるのも汚ららしいッ！」

隊長は眞赤になつて怒つた。

「おのれ、云はしてをけば悪口雑言。よしッ、今は容赦はせぬぞ、その黒羽二重を一枚剝がして、白い肌を天日に曝してくれるわ」

猛然と襲ひかゝつた隊長が、しかし次の瞬間よろ／＼となり、その場に崩折れてしまつた。
お勝の右手には、いつのまにか懐剣が……。

屯所を一步外へ出たが、たちまち官兵たちに取巻かれた。

「芋、芋たち、寄らば斬るぞ」

一刀を抜いて、四邊を睨めつける容姿は、繪にしたいほどの美しさ。官兵たちは思はず見惚れながら、チリ／＼と寄つてくる。

「退けい、芋たち！」

またしても、芋たちだ。芋たちは、しかし一向に退かうとはせぬ。官兵の一人は、つか／＼とそばへ寄つて、「おとなしく縛に就けい」といつた。

女のやうな美男だが、腕自慢の隊長をたゞ一撃のもとに倒したほどだから、よほどの妙手だと官兵たちはおそれてる。だから、お勝のそばへつか／＼と寄つてきたのは、官兵隨一の腕達者かもしれない。

「退かぬか、生命は無いぞ」と、お勝は、殺氣立つて刀をやけに振つた。
「縛に就けい」官兵は、お勝の前に立塞がつた。

「斬るぞ」

しかし、人の斬り方も知らぬ女の悲しさ。といつて、素直に繩にかゝるのも業腹だ。何とか、虎口をのがれる工夫はないものかと考へた。かれは、何思つたか、一刀を鞘にをさめた。

「縛に就くか」

「いや、中牟田君に會はせろ」と言つて、わざと肩肘を張つて、虚勢を示す。

「なに、中牟田？ 朝陽艦長中牟田倉之助殿と知り合ひか」

相手は、いさゝか容を改めた。

「長崎時代からの知り合なのだ」

中牟田も、榎本等と共に傳習生の一人だ。釜さんと一緒に、よくお勝の家を訪ねてきたことがあるので顔見知り越した。が、その中牟田に會ひたいために、危難を冒してやつてきたのではない。ただ、一時の危いところをのがれる方便に、中牟田の名を云つたのだ。

そんなこととは知らず、朝陽艦長の知人が訪ねて参つたのに、それを不審のかどで引捕へようとするのは無茶だと、官兵たちは少しづつ、圍みを解きはじめた。

「中牟田殿に何用がござるかな」官兵の一人は、おだやかに訊ねる。

「江戸よりの密令」

「何に密令……なるほど、では直接、總督にお會ひになつては？ それとも、參謀にお目にかかつた方がよろしいではござらぬか」

官兵は、密令の一言で、すつかりお勝を信じてしまった。いまごろ、江戸から密令を發するなぞ、常識から判断しても、怪しいのだが、官兵の頭は粗雑で單純で愚鈍に近いのか、深くも考へずにお勝を江戸からの密使にしてしまった。

お勝の勝太郎は、をかしがこみあけて來たが、それをおさへて、

「いや、中牟田君から總督に傳へて貰はうと思つてをる」

中牟田に會つたら、何とか助けて貰はうとのお勝の肚だ。

「さうか、それならばよい。拙者が同道いたさう」

官兵は先に立つて歩きだした。お勝は、うまくいつたと、内心よろこんで、官兵のあとに隨いていつた。

と、このとき、他の官兵が屯所の調室で血汐に染まつて倒れてゐる隊長の死骸をふりかへつてさらに眼を轉じてお勝の背姿に鋭い一瞥をくれてゐるが、

「待てッ！」と、叫んだ。

待てといはれて、お勝よりも案内に立つた官兵の方がおどろいて立停つた。

「何用か」

こちらの官兵は、息せき込んで、

「江戸からの密使が、何故にこれなる隊長を斬つたか」

「うむ」といつたなり、案内役の官兵は、動けなくなつた。

「密使は密使でも、それは賊軍の密使にちがひない、繩をかける」

「それッ！」と、たちまち、二三人で、それへお勝をねぢ伏せてしまった。

「怪しい奴だ。五稜廓へ參る賊軍の密使だらう、どうぢや」

強さうな官兵は、腹癩せに、お勝の肩を、泥草鞋で汚した。

「さア、隊長を叩き斬つたが悪かつたら、なほのこと中牟田君のところへ連れていくがい。」

そして賊軍の密使か、それとも官軍にとつて大切な密使か、それがてめえたちにわかるだらう。

芋たちのうちには、一人だつて僕の正體を見破るものがないのか」ねぢ伏せられながらも、お勝は、啖呵を切る。

「よし、望みにまかして中牟田殿のところへ案内しよう。来い」

お勝は、二三の官兵に護られながら、會所町の司令本部へ連れて行かれた。司令本部には、中牟田は居なかつた。朝陽艦沈没の責任者として春日艦に移つて、陳述書をつくつてゐるころだつたらう。それで、参謀黒田了介（清隆）のところへ引出された。

「江差から、陸路を忍び参つて五稜廓へ潜入しようとした曲物でござります」

官兵の一人は、さう言つて黒田に手柄顔を見せた。黒田は、じいとお勝の男裝姿を見入つた。「おい、おまへたちは皆歸つてよい。わしが一人で取調べる」

「あんたは、どうして五稜廓へ行かうとなされたか」

たいさう、おだやかな調子だ。お勝は面喰つたが、わざと荒々しく、

「中牟田君に會はせろ。倉之助に用があるんだ」語氣は荒いが、さすがに女らしく、美しい聲だ。

「中牟田君ぢやなくともよかる、わしは黒田ぢや、了介だ。五稜廓の誰に用向があつて訪ねなされるのか」

「そんなことは、どうでもいゝ。中牟田君に會ひたいのだ」

「中牟田君に會ふことは、あんたに不利ぢや」

「え」

「あの男なら、すぐに、あんたの化の皮を引ン剥くだらう」

「えッ！」

「あんたはやはり、その男の姿で五稜廓の尋ねる人のところへ往くがいゝ」

「ぢや、あんたは？」

「いやいや、わしは何も知らぬ。たゞあんたが、敵將榎本簽次郎君を訪ねてゆきなされるものと見込んでるだけぢや。榎本君のところへ往きたいのぢやらう……中牟田君に、そのことを頼んでも駄目だ、わしが、萬事都合よくしてあげよう」

「えッ！ あんたが」

「わしが、榎本君のところへ、あんたを送りつけてやりませう。安心なされるがいゝ、しばらく旅の疲れをやすめなさい」

黒田了介は、お勝を五稜廓に送りとゞける前に旅の疲れをやすめよと言つて、そのまゝ箱館病

院に送つた。

「僕は病人ぢやないから、こんな所へ放り込まれるわけがない」といつて拒んだが「戦争中ほかに休息の場所がないから、一先づ病院に身體をやすめるがよい。そのうち五稜廓へ送りとよけよう」

と、黒田は、お勝の身柄を院長高松凌雲にたのんだ。

これで、お勝は、黒田のおかげで、官軍に殺されることだけは免れた。しかし、病院の一室で安易なベッドに起臥して遠く鐵砲の音を聞いてゐるのは、さすがに辛かつた。榎本の安否が氣づかはれてしかたなかつた。病院には、官兵も賊兵も運びこまれた。なかには、賊軍の相當な人物も手傷を負うて擔ぎ込まれる。お勝は、もしや、その中に釜さんが交つてゐるやしまいかと、負傷者の擔ぎ込まれるたびに胸をおどらした。

病院へきて、お勝は初めて箱館戦争の様子を知るにいたつた。江差、松前はじめ、各所はすでに陥落して、義軍の勢力は今ほとんど地を拂ひ、僅に五稜廓と辨天、千代ヶ岳の兩臺場にのみ追ひ詰められてゐるといふことを知つて、暗然となつた。暗然となつたばかりでなく、關東、東北の諸士が、かうまでもろくも薩長土肥の芋たちに追ひ詰られたかと思ふと、口惜しかつた。

「女ながらも五稜廓に赴いて、釜さんと共に最後の戦をして死にたい」と、お勝は心に決して、いくたびか病院を脱け出さうとしたが、高松凌雲はお勝をも病人扱ひして、めつたに自由の行動をゆるさぬ。かうなると、お勝は、黒田がむしろ恨めしかつた。

お勝が病院へ放り込まれて二日目に、賊軍の隊長で會津藩の遊撃隊長諏訪常吉といふのが、お勝の收容されてゐる病室へ入れられた。病室が満員なのでお勝の病室までベッドが持込まれた。諏訪常吉は重傷だつた。そこで病人でないお勝は、自發的に看護の任に當つた。男を裝うてるが、お勝はさすがに女だけに看護が行届いてゐる。

「ありがたう」諏訪は、ベッドに仰臥したまゝ、お勝に禮をいつた。

その諏訪のところへ、ある日、陣中から參謀の池田治郎兵衛と同じく黒田了介が訪ねてきた。

「いかゞでござる」黒田は、やさしくいたはつた。

「ありがたう」會津者の一徹だが、諏訪はさすがに、黒田等の親切に感謝してゐる。

いろいろ五稜廓の義軍の状態などを、諏訪からきいたのち、黒田は、「もはや、この戦争も終りに近づいたと思ひますが、この邊が五稜廓の開城の時期と存する。いかゞなすものでござらう」と、おだやかに義軍に開城の意志のあるかどうかをたづねた。いや諏訪の意見をきいて、開

城勸告の使者を立てようといふのだ。

「……………」諏訪は、黙して答へない。

かたはらにお勝も立つて、熱心に兩者の意見を聞いてゐる。

黒田は尙も言葉をついで、「既に、聖天下の御世と成り、新しい政治が初まり、新しい制度が布かれてをる。いかに徳川の恩顧を感銘してをるとも、榎本總裁初め義軍一統は此以上の反意は既に慮外の事と存する。開城は決して御一統の恥ではござるまいと思ふが、貴殿は如何思はれるな」

かう柔かく出られると、一徹な諏訪も、これ以上口を噤んでをるわけにいかぬ。

「總裁はじめ六將の御意見は如何か、その御心中察し難いが、拙者は既に覺悟を致してをる」

「と、言はれると……………」

「これ以上御聖慮を煩はすに忍び申さぬ。ことに當病院における心づくし、賊軍に對して、かくまでの御仁慈、心に銘じて居りまする」

「なるほど、御胸中はとりも直さず總裁はじめ御一統の御意見と存する。……新國家に必要なのは何を措ても人材である。榎本總裁以下幾多有爲の士を、この國內の事件のために瓦と共に碎

くことは國家の損失、遺憾千萬におもふ。畏れおほくも聖天子の勅として、寛大を旨とすべき仰せを戴いてをります。開城後の處置については、われ等生命に代へても善きに計らひませう」と率直に誠意を披瀝して、開城の時機である事を諄々として説いた。

「段々の御勸告、忝なう存する。このうへは拙者、五稜廓に赴いて兩總裁はじめ一統に開城を勸告いたすでござらう」と、病床に起き直つて諏訪は言つた。

けれども、重傷の人を五稜廓に向かせるわけにはいかない。そこで、黒田等は高松凌雲にその傳達方を依頼した。高松は、會津藩の小野權之丞を説いた。兩者の署名で榎本總裁、松本副總裁宛に一書を送ることにした。その文面は、

書翰を以て一大事申上候、一昨日の形勢に立至り薩州侯の御手にて病院御改めに相成り寛大の御仁心を以て病人一統これ迄の通り大切に療養致候にとの事にて、御仁恵心魂に徹し有難罷在候、借昨夜半頃薩州池田治郎兵衛と申人其外四五名諏訪常吉方へ被罷越候て、談判には昨今の形勢海軍は相敗れ候得共、五稜廓並辨天臺場に於ては實に奮戦の事士道於ては感服の至りに候へども萬民塗炭の苦をうけ御仁心ある天朝には決して左様の御趣意には無之、飽迄寛大の思召にて平穩を旨と被遊候事に候、此段五稜廓並に臺場へ貫徹相成り候様懇談

に御座候、即今誠に御大切の場合と奉存候、篤と御賢慮の上平穩の道御立被成候て可然存奉候、何れとも必死の防戦歟否歟報被成下候様私共より申上候、常吉申聞候得御意度如斯御座候

さア、手紙が出来上つたが、誰を使者に立てるか問題だ。諏訪常吉は適任だが病中、といつて、病院長自身が出馬するわけにはいかぬ。官軍の將兵を使者に立てたのでは、初めから開城勸告といふ事になる。それでは、榎本はじめ義軍は、つむじを捥げるだらう。あくまでも、義軍の有志の意見として作成し、局外者の高松凌雲と會津藩の小野の意見として手紙を送るのだから、官兵を使者とする角が立つ。院長初め、思案に暮てるるとき、黒田が、

「それに在る、田島勝太郎君に頼まう」と言つて、お勝を名指した。

黒田の取計らひで、お勝は大びらに五稜廓へ趣くことができる。はじめて、黒田の深慮を知つたお勝は、薩摩の芋にも、こんな人情を解する仁があつたのかと密におもつた。

そして、芋々と、薩長の誰彼に毒舌を弄した自分の認識の不足が、いまさら可笑しかつた。もちろん、お勝には腕達者な官兵が二人、護衛としてついた。それに「病院御用」の小旗と鐵砲を持たせた。これで官軍の布陣を自由に通過できるわけだ。お勝は久々に釜さんに會ふことのでき

る嬉しさよりも、この手紙を素直に受取つてくれるかどうか心配だつた。

やがて官軍布陣の中を銃火を避けながら抜けて、五稜廓の第一木橋までくると果して義軍の隊長に咎められた。

「何かッ！」賊兵は、一齊に鐵砲の筒口をそろへた。

「箱館病院からの使者でござる。榎本總裁に御意を得たい」

もう、こゝまでくると大丈夫、飛んでいつて、釜さんの首根ツ子に抱きついて、一別以來の恨の數々をならべたい……といふ、女らしさが胸元にこみ上げてきたが、それを、じいと抑へて、嚴かな口調で來意を告げた。

「使者の用向は？」

「密書でござる。直接總裁に御意を得たい」

「拙者が取次いで進ぜよう」

「いや、密書でござる、取次は無用」

お勝は、こんな隊長づらに取次がれては、せつかくの苦心も水の泡だとおもつた。こんな密書などどうでもいゝが、密書を手離すと、未來永劫に釜さんに會ふことができないと信じた。隊長

も弱つてしまつて、

「では、總裁に申上げよう。して使者の御名前は？」

「田島信太郎と申す」

勝太郎といつては、榎本は會つてくれないと思つたので、信太郎と、でたらめの名をいつた。

「暫く待たれい」

隊長は、廓内へ駈けて行つた。お勝は、木橋の袂で待つた。

小銃の弾が風を切つて飛んでくる。休戦状態のやうだが、それでも、時々思ひだしたやうに銃火を交へてゐるので、木橋のそばに曝されてゐるのは危険だつた。ほど經て隊長は戻つてきた。

「お役目御苦勞に存する。總裁には、直接御面會下さるとのこと、拙者と同道されたい」

「千萬忝ない、それではお供を仕る。君等は、これにて暫時待たれい」と言つて官兵を殘し、お勝は木橋を渡つて廓内へ足を踏み入れた。

そのまゝ屯所の控へ室へ通された。床几に腰かけ、おどろ胸を抑へて待つたが、なか／＼總裁はやつて來ない。「どうしたんだらう。いやに待たせざるわ」もう、すつかり、お勝も里心づいて、兩眼に嬉しい悲しい涙をさへ湛えてゐる。

江戸で別れたときの別離の悲しさ。それがいま、うれしい涙となつて、抑へても抑へても、兩の眼に溢れてくる。仙臺での釜さんのつれない仕打、あのときのうらみの涙が、やはり眼がしらを溼ませる。

「こんなことでは、大事な役目が果せないわ」

黒田了介の情義を、このときお勝は、じわ／＼と身に感じた。女らしい氣持で釜さんに會はうとする一方で、使者としての役目を果さうと、お勝はせきくる涙をじいと抑へるのである。

涙の白旗

粗末な扉が開いて、懐しい釜さんが、いかめしい服装でそれへ現れた。副官とおほしいのを随へて出てきたので、お勝は釜さんの胸に取すがることができかねた。それが、うらめしかつた。いくさの苦勞で、釜さんは面やつれてゐた。頬の肉が落ち、頬ひげが延びて、髪も蓬々となつてゐた。硝煙彈雨のあひだに數十日晒してきたその顔は、日にやけて黒かつた。

榎本は、お勝の勝太郎をじろりみて、床几に腰をおろした。副官は、その傍に立つてゐる。冷たい理智的な感じを榎本の釜さんからうけて、お勝は、たゞなんとなく悲しまれた。一別以來の言葉を交す氣にもなれず、床几をはなれて、黙禮した。

榎本は、やはり冷やかに、「わしは榎本釜次郎ぢや、箱館病院長高松凌雲殿よりのお使ひといふが、どういふ用かな」と、あまりに他人行儀な挨拶だつた。

お勝は、おもはず、釜さん……といふところをやつと抑へて「はい、高松凌雲殿より密書を持参いたしました」と、例の書狀を前に差出した。その織手が長い旅のよごれで日にやけてゐた。

榎本は、その手をじいと見てゐたが、やはり冷やかに書狀を受取つた。披いて讀みくだした榎本は、「諸將と謀つて返書を認めるあひだ、暫時それにて待たれい」といつたまゝ、副官とともにのつそり控へ所を出ていつてしまつた。

取残されたお勝は、抑へに抑へてゐた溜涙が頬を濡らすのを、拭はうともせず、床几の前の荒木の卓子に突伏してしまつた。「なんほなんでも、釜さんはあんまりだ」

思はず咳いてお勝は、はつとわれにかへり、四邊を見廻し、そつと涙を拭いて唇を噛みしめた。「大切な使者だ。使者の役目を忘れてどうなる」といつた凛々しい氣持が、かの女を、もとの田島信太郎にかへらした。

やがて、榎本は再びそれへ現はれた。こんどは副官を隨へずに、たつた一人で入つてきた。江戸以來、いや、仙臺でつらい別れをしてから、けふはじめて二人きりになつたのだ。

お勝はうれしさのあまり「釜さん」とおもはず口走つてしまつた。

榎本は、やはり冷たく、「田島信太郎といつたのう、君は？」と空呆ける。

「いゝえ、釜さん、あたしお勝です。お勝の田島勝太郎です」

「勝太郎？……いや田島信太郎といふ名札をもらつて、面會をさし許したのだ。勝太郎なら會

ふわけにいかん』

「簽さん、そ、そんな情ないことを仰しやるものぢやありませんわね。簽さん、あたしア、はる／＼江戸から訪ねてきたのよ」

「これ、おぬしは、箱館病院の高松凌雲殿の使者ではなかつたか？」

「え、ですけれど、使者はあなたにお目にかゝりたいばかりの方便、もう、簽さんに會つてしまつたら、もとの勝、いゝえ、田島勝太郎といふ通詞でいゝでせう」

お勝は、床几をはなれて、榎本のそばへ馴々しく寄つていつた。

「いかん！」

榎本は、険しい眼付でお勝を睨めつけ、「高松殿の使者なら、この返書を持つて歸られるがよい」と認めてきた返書を、お勝につきつけた。

「いやです」

「なに？」

「あたしア、五稜廓へくるのが目的なのよ。もう、あなたの傍を動きません」

「それはいかん」

「いゝえ江戸でお別れのときは、仙臺で會はう、そのときは、蝦夷地へ連れていつてやらうと仰つしやりながら、さて仙臺でお目にかゝつてみると、こゝでは人目についていかんから、箱館へたづねて参れと仰つしやつたぢやありませんの。その箱館まで、女の身で辛苦艱難をして尋ねてきて、やつとお目にかゝれば、返書をもつてすぐ歸れなどと、そりア、簽さん、あんまりといふものよ」

お勝は、もうすつかり女になつてしまつて、涙の眼で榎本をかくく睨んだ。

「わしを無責任な男といふのか」

「無責任といふよりか、不實です、薄情です」

「うむ……さうか、だがまア、おまへは高松殿へ返書を持つてゆく任務を果さぬではないか」

「でも、その御手紙なら、橋の袂に待たしてある官兵に持たしてかへせばいゝわ」

「で、おまへは？」

「あたしア、五稜廓に立籠つて、いくさをするわ」

「いかん」

「おや、なぜですの」

「おまへは、高松殿からたのまれて、手紙を持つて参つたといふが、あの手紙の内容より察すれば、官軍の参謀あたりから依頼されたものとみえる。おまへは参謀あたりの信頼をうけて使者に立つたのに、返書を官兵に持たしてかへすとは、それこそ無責任だ」

「ぢや申しますわ。あたしが、箱館へ入ります前に官兵に捕へられ、すでに銃殺に處せられようとしたとき、助けてくださったのは薩摩の黒田了介といふ方」

「なに黒田？ して了介はどうした」

「あたしを、病人にして箱館病院へ收容し、一先づ旅の疲れをやすめ、機會を得て五稜廓に榎本さんを訪ねていくがいと仰つしやつてくださったよ。そして、やつとねがひが叶つて、官軍からあなたへの密書、それを齎す使者の役目を黒田さんは、あたしに振つてくださいましたの」

榎本は、深く考へ込んだ末に、

「では、黒田了介は、おまへを女と見破つたのだな」

「さア、それはわかりません。あくまでもあたしが男に成り切つて、役目を引受けたやうなわけ……」

「いや、あの男は、たしかにおまへを女とみて、おれのところへ遣はしたのだ」

「でも」

「いや、云ふな……官軍の眼に入らず、うまくかこみを抜けてこれへ参つたのなら、もとの通詞として置いてもよいが、いつたん官軍の將兵に見破られた以上は、この釜次郎は、どうしても黒田の情をうけるわけにはいかぬ」

「あなたは、武士の情を知らぬ人、黒田さんは人情を解して、あたしをせつかく五稜廓まで寄越したのに、そのおもひやりを無にするのは武士の情ではありませんまい」

「いや、この釜次郎が、女の情にほだされて、おまへを引入れたと知られては口惜しいのだ」

お勝は、何といはれても立去らうとはしない。

「せつかく、こゝまで尋ねてきたあたしの心を、釜さんあなたは汲んでくださらないのねえ」

榎本は、さういはれると、はじめて、この人らしい情のこもつた眼をして、

「その、お前の心根はよく分る」

「ぢや、なぜあたしを置いてくださらない？」

「さア、おまへを愛するがゆゑに、なほのこと置くわけにはいかぬ。それと、もう一つは、おれの意地からだ。黒田了介はじめ官軍の將兵に、おれのこゝろの底が見られたくないからだ」

「なるほど、ようくわかりました。ぢや、あなたにもう、これ以上おたのみしませんわ」

「……………」

「そのかはり、この五稜廓を一步外へ出てしまへば、あたし勝手な真似をしてもよござんすね」

「どうするのだ」

「五稜廓を出て、あの木橋の袂で、あたしア腹を切つて死んでしまひます」お勝は、凜とした聲で言切つた。

「そ、それは困る。おれが迷惑する。あんなところでおまへを死なせるくらゐなら、こゝへ置くも同じことだ。そんな困らせを言はず、この場は素直にかへつてくれ」

「……………」

「お勝！」榎本は、急に厳しい聲に歸つた。

「あい」

「おまへは、この釜次郎を愛してくれてゐるなら、この際、おれに男を立てさせてくれ」

「と、仰つしやると？」

「おれは、一統とともに、この五稜廓で死ぬる覺悟だ。おれの死骸のそばに、おまへのやうな

美しい女が死んでゐるといはれては、おれの末代までの恥だ」

「いゝえ、何の恥なものですか」

「いや、さて、釜次郎が五稜廓まで馴染の女を連れて參つた。あれは西洋かぶれの男だ。毛唐の真似をして、戦争まで女を連れて往つたといはれては、何としても口惜しい。どうか、釜次郎の一生のたのみだ。お勝、運命だとあきらめて、素直に引揚げてくれ、たのむ。釜次郎がこの通り手を合はして頼む」

榎本は、眞實手を合はした。お勝は、それを振拂つて、

「まア、勿體ない。そ、それほど仰つしやるのに無理にこゝに居据わらうとしたあたしは、やつぱり女の愚痴ね。悪うござんした」

「いや、悪いのは、この釜次郎。無情薄情とおもつてくれるだらうが、しかし、武人の名譽にかへられぬ。これが日本の武人の意氣なのだ、ゆるしてくれ」榎本の双眼にも、怪しい涙が溢えられた。

「わかりました。釜さんのおこころが、ようくわかりました。それでは、あたし歸りますわ」とお勝は、萎々と床几を離れた。

「歸るか……いざ、今世の別れとなるだらう。もう一度、その顔をみせてくれ」

「あい」お勝は、おもはず榎本の胸に取すがつて、聲を呑んで泣いた。

「さア、人にもつかると悪い。その涙を拭いて歸るがい」

「はい」

「黒田殿はじめ、官軍の方々によろしくと傳へてくれよ」

「はい」

「そして、黒田殿の情で便をもとめて、江戸へ戻るがい。老いさき短い母上に安堵さしてやりなさい」

もう、お勝は返事もできなかつた。

使者の役目を果し、返書を持つて司令本部へ戻つてきたお勝の姿をみて、黒田は意外の面持だつた。

「おや、君はどうして歸つて参つたか」

そんなことは、訊ねる方がをかしい。お勝は、

「はい、榎本總裁よりの返書を持つて参りました」

「あさうだつたか」と、黒田は言つて、榎本からの手紙を受取つてひらいた。

來書拜見致候、然らば薩州池田次郎兵衛より諏訪常吉へ談判の儀に付、御申越の件は委曲致承知候、因て衆議を盡し篤と熟案致候處、今更別段申す迄も無之我輩一同桑梓墳墓を去り君親を辭し遠く此地に來り候譯は、先般再三再四、朝廷へ歎願致候通り蝦夷地の一分を賜り、凍餓に逼る頑民の活計相立加之北門の守衛致度志願より他念無之候處、不計も語辭失體舉動不作法の廉を以て被加天兵至窮之餘り無是非戈を以て是迄の舉動に至り候處、今日に至り過を悔ひ、兵を休め、朝命に従ひ申可旨寛大の御所置不知所謝候、去乍我輩品海出帆固より勝敗に關係不致覺悟縱令一統粉碎相成候、共志願少しも貫徹不仕候へば外致方も無之若し歎願の趣、勅許相成此地一分を下し賜り候様相成候へば、上は奉仰朝化下は北門の關鎖を守り死力を出し、天恩萬分の一に可奉報候様一同へ申論候、上我輩兩人儀干戈を動し候罪は如何様の嚴罰たりとも甘んじて可奉從、朝裁候前文の次第誠也、以御諒恕無之候はゞ五稜廓並に辨天台場その他出張同盟の者一同枕を共にし、潔く天戮に附可申候、右の段池田氏へ然る可御申通有之度奉願候、以上

讀み終つた黒田は、高松病院長にその手紙を渡して、

「うむ、さすがは榎本だ。よい覺悟だ」と一人呟いた。

「やはり、屠腹の覺悟でござりますか」お勝は、おもはず黒田にたづねた。

「手紙によれば、あくまでも北地の一分を賜はりたいとある。それが許されなければ、一統枕を共にして討死をする。書いてある」

「……………」

「榎本君が、君を五稜廓に引止めずに、この手紙を持たして返してよこした氣持は、わしにはよくわかる。君にも、わかるか」

「はい、わかります」

「榎本は人情を解し得る男だぞ。それが、君を無情にも送り返したそのころの苦しみが、わかる」

「……………」

「榎本は、惜しい人物だ。而も涙もある男だ。それに當代第一等の才人だ。あれを殺すのは惜しい。のう高松さん、何とか、かれに降伏をさせる工夫はないものかな」

黒田は、さういつて高松院長の顔を見た。

「されば……………改めてあなたより開城勸告の使者を立ててみてはどうでせうか」

「うむ、それよ、それよりほかはあるまい」

そこで、お勝を再び病院へ收容して置いて榎本に書を遣はし、恭順をすゝめたが、その返書はやはり前の手紙と同じものだった。

手紙のほかに榎本は、黒田の好意を謝する意から、秘藏の書物「海律全書」を贈った。

五月五日になると、海上の軍艦が五稜廓の總攻撃をはじめた。ことに、甲鐵艦が七十斤砲をもつて砲撃するので、廓内の義軍はこれに惱まされた。

すでに弾丸は盡き、糧食も缺乏して、義軍の意氣が甚だしく衰へてゐるところへ、俄に海上から巨砲を放たれるので、廓内は混亂を呈した。

榎本は、望樓に上つて敵狀をみてゐたが、この總攻撃に心を痛めた。すでに、お勝が齎した手紙以來、黒田や池田からの恭順勸告に二度も接したが、榎本は最初の意志を掛けようとはしなかつた。三度目の、田島圭藏なる使者を以て懇切をきはめた黒田からの勸告狀を手にしたときも、榎本は、その使者を鄭重に取扱つてかへしたが、返書にはやはり深く厚意を謝するのみで、烈々たる義軍の覺悟のほどが認められてあつた。

そこへ、海上からの砲撃だ。榎本は、望樓のうへで、そのさまを観測して、さては、辨天臺場も彈藥盡きて、永井玄蕃以下降伏したのだなとおもつた。辨天臺場が陥落し、千代ヶ岳の義軍もすでに力盡きてしまつたら、もう五稜廓だけだ。その廓内には、飢ゑた諸兵が空鐵砲を杖にしてうろくしてゐるありさま。

「松平君」榎本は、松平副總裁をかへりみた。

同じく望樓にのほつてゐる松平太郎も、悲痛の面持で、「おう」と短く返答した。

「辨天臺場が陥ちたやうだな」

「さうかもしれん」

「千代ヶ岳の中島三郎助も討死をしたさうだ。もはや箱館奪還は覺束ない。この五稜廓も、用ふるところの兵は、ほとんど死人に等しいありさま。松平君、どうだ、手負を湯の川に移し、廓外の民家を焼き拂ひ、生前の一快戦を試みようではないか」

「それもよからう」

松平は同意した。そこで、最後の決戦の準備にとりかゝつてゐるところへ、またぞろ、使者がやつて來た。

「れいの功告狀か」とおもつて使者を迎へてみると、この日は、黒田からは手紙と共に、清酒五樽を贈つてきた。

「ほう酒か」榎本はよろこんだ。手紙には、先日贈られた秘藏の書物に對する厚意に酬ひるしに、認められてあつた。

「敵ながらも、黒田は血も涙もある男だ。おれは、官軍の將兵一人残らず、みなわが同胞だといふ感を深くしたよ」と、さう松平に言つた。

「何にしても酒はありがたい。陣中には、すでに一滴の酒も無いのだからなア」

松平も、黒田の厚意を身に泌みて感じてゐる様子。二人は暫く感無量の態であつたが、臆て、「松平君」と、榎本は改めてまた松平に言つた。「兵力はすでに、この通り衰へてゐる。これも使嗣して戦へば、我國無二の城廓故に、五日や十日支へられるであらうが、わづかの殘兵をもつて六十餘州の大軍に抗し、徒らに無辜の士卒を傷つけるは、將たる者の取るべき道ではないとおもふが、どうぢや」

「おぬしは、開城を決意されたか」

「いかにも……」

二人は、それなり顔を見合つた。

榎本は、すでに開城を決意し、廓内の諸將にこの意を傳へると誰もこれに反對するものがなかつた。そこで官軍に應戦することをやめて、諸兵に號令して廓内の整理に當らしめた。夕刻、やつとそれが濟むと、廓内の廣場で最後のかたちばかりの酒宴をひらいた。幸ひ、黒田から贈られた酒がある。鏡を抜いての振舞ひ。

その夜、一室に入つた榎本は、衆に代つて罪を謝する意味の遺書を認め屠腹しようとしたとき松平太郎に止められた。

「諸兵に代つて自刃するのぢや。松平君、たのむから見のがしてくれ」と、榎本は言つたが、松平はそれを肯かなかつた。

「榎本君、よく聞きたまへ。この際自刃して申譯をすることは、いと易いことである。が自刃して一身を潔くすることは、慘害を衆に残す所以だ」

「何に？」

「よろしく自刃を止め、衆に代つて敵軍に赴き、私に干戈を動かした罪を皇裁に仰ぎ、甘んじて天戮に就き、もつて残兵の命乞ひをするのが、むしろ將たるもの、最後の義務ではないか」

「……」

「おれは、甘んじて敵軍に下る。君も、さうしてくれ」

榎本は、まさに腹に突き立てようとした刀をおさめて、

「うむ、松平君、よくいつてくれた。おれは、自刃するのを第一等の快と信じたが、それでは残兵が救はれん。ようし、君と行動を共にしよう」

「さうか、よくきてくれた」と言つて、松平は、榎本の手を固く握つた。

「では、明朝打連れだつて、敵の軍門に赴き命乞ひをしよう」

「新しい時代の武人は、徒らに屠腹はせぬ」

「さうだ」

その夜は、ぐつすり眠つて翌朝、諸兵を廣場に集め、恭順のことを誓はしめ、それが終ると丸腰になつた榎本、松平の兩人は、從卒をしたがへて五稜廓をあとにした。

降伏の白旗をかへけて、敵陣へ進んだ。これで、全く、いくさは終つた。

あとで、官軍の司令本部で、黒田と面會したとき榎本は、

「彼我ともに、よく死力を盡して戦つて申分はないが、たゞ僕としては、幕艦を率ゐて甲鐵艦

はじめ諸艦を向ふに廻し、一大海戦を試みる機会を逸したのを終生の恨事とおもつてをる』といつた。

「さうであらう。あんたは當代一流の海將、さぞそれが残念でござつたらう」

「官軍の海軍には、中牟田君をはじめ、伊地知休八、赤塚源六などといふ豪の者も居られるし東郷平八郎、隈崎左七郎などといふ有爲な青年士官も居る。それらのものと、戦ふことができなかつたのが残念だつた。しかし、戦争が終了して、さうした有爲な青年士官が傷つかなかつたのは何よりの幸福。こんどのいくさは、いはゞ國內の事件に過ぎないが、日本も開國して國際的に覇を争ふやうになると、海外に敵を求めて、日本海、太平洋に波騒ぐときも度々あらう。一旦緩急の場合、海國日本の重任を双肩に擔ふのが青年士官たちだ。舊幕海軍は今日をもつて亡んだが、新しく芽生えた日本の海軍の前途の光榮を、僕は死して後も祈念するものである」

榎本は、さう言つて唇を結んだ。

五稜廓開城の手續萬端が終つて、あらためて、黒田と榎本が顔を合したとき黒田は、

「いよく、あんた方を、檻に入れて東京へ護送せねばならぬことになつた。どうか、その邊御諒解ください」と氣の毒さうに言ふのだつた。榎本は、もちろん覺悟してゐる。自刃を思ひ止

まつたのは、東京へ護送されて、仕置をうけるためだ。「いや、僕の一身は生きた屍です。いかにやうにお取計らひくだされても、よろこんで命に服します」

黒田は、さう言はれると、根が純情なだけに一層氣の毒になり、

「ありがたう。さうわかつてくだされると、われ／＼の面目も立つ。政府では、きつと、あんた方を嚴罰に處すると主張するものも多からうとおもふ。木戸さんなどはきつと、嚴罰を主張するだらう。が、わしは、あんた方を助けるつもりで降伏を勧めたのだから、萬一死刑などといふ場合は、一命を屠してあくまでも赦免を主張するつもりである。どうか、わしの義のあるところを御承知ください」

「なアに、その邊は榎本はよく心得て居る。けつして御心配なきやうに」

「いや、この儀は前以て、黒田了介、あんたにお約束いたして置かう……次に、榎本さん」といつて黒田は、言葉を改め、「東京護送の日も切迫したので、あらためて、あんたに御引合せする人がある」

榎本は、その人はおよその見當がついたので、

「いや、無用の人物に面會はいたしたくない。お心盡しはありがたいが、それよりか、東郷

平八郎君その他の、官軍の青年士官たちに一度お目にかゝりたい』といった。

「勿論、青年士官を引合せ致し、一場のお話を承はりたいものだが、それと同時に、目下箱館病院に收容されてをる一青年に、是非とも面會してやつて貰ひたい」

榎本は心に感謝したが、いままら未練がましくお勝に會つてどうする……といった考へから、

「いや、その儀は、又の日におねがひしたい」と固辭する。

「あなたが、會ふことを避けられても、その青年が、どうしても面會したいといつたらどうなさる」

「やはり、無益のことでごさる」

「それでは、その青年は、あんたを恨む」

「是非がない」

これでは、どうにも、引合せるわけにはいかぬ。

黒田は、わざわざ病院を訪ねて行つた。お勝は、相變らず諏訪常吉の看護につくしてゐた。黒田が入つてくると、さすがにうれしさうに黙禮した。

「いよく五稜廓は開城したよ」

黒田が言ふと、お勝は、「はい、承はりました」と、冷靜を装うて答へた。

「榎本さんはじめ、將兵はみな恭順の意を表され、何よりと存じてをる。あんたもよろこんでくれ」

「……………」お勝は、それには答へず、何故か唇を噛んだ。

「もはや東京へ引揚げることになつたが、あんたも、むろん一緒に歸られるだらうのう」

「はい、い……や、僕は、單獨で東京へ歸る覺悟です」

「だが」

「いや、僕は官軍、賊軍のいづれにもゆかりのないもの、一介の放浪者です。どうか、僕の自由の行動をゆるしてください」

黒田は呆れて、「それは、あんたの自由だが、しかし、あんたは榎本さんに會ひたくはないのか」といつて、男装の美女の顔を、じいと見詰めた。

「……………」

「榎本さんは、近々檻に入れられ東京へ護送される。東京へ到着してからはどうなるか、あの人の運命もわからぬ。したがつて、東京で面會できるかどうかもわからぬ。榎本さんにお目にか

かるなら今のうちだ。わしが、引合してあげようか』

お勝はしばらく考へてゐるが、「お心づくしのほどは、ありがたいが、僕はもう二度と榎本さんにお目にかゝらぬことにきめてをります。どうか、その點も僕の自由におまかせをねがひます」
一刻もはやく榎本のところへ飛んでいつて、その胸に取りすがつて泣きたいのだが、お勝はそれをじいと押へた、そのくるしさ。

「榎本さんが、切腹をせずに降伏したのを、あなたは不満におもふのか」
黒田は、さう思つたので、あからさまに打ちまけた。

「いや決して」

「では、人目をはゞかつて遠慮するののか」

「決して……」

「はて、では、江戸ツ子の片意地から、さういふのか」

「さうではありません。たゞ、いまさら榎本さんにお目にかゝつても仕方がないと、あきらめてゐるのです」とお勝は、せきくる涙を押へた。

「うむ」黒田は低く呻くやうに、嘆息を漏した。

「たゞ……」と、お勝はいつて口籠つた。

「何か、言つてでも……」

「はい。どうせ東京へ護送されてお仕置になられるだらうと思ひますが、それまでは、どうぞお身體を大切にされるやうにと、僕が申上げるのは、それだけです」

そのまゝ、お勝は俯向いてしまつた。ふたゝび顔を上げ得ない。男装してをれど、その襟足の美しさに、黒田は思はず見惚れて、

「そ、その言葉を、あんたが直接榎本さんにいふがよい。榎本さんも、どんなに喜ぶかしれんぞ」

「いや、いまさら、會はぬ方がよいとおもひます」

「さうか。それでは、その美しい一言を榎本さんに傳へよう。で田島君、あんたは、いつごろ立つかな」

「はい當分病院に居つて、重傷者の看護をいたしませう。そのことを院長にもねがつて置きました」

「なるほど……それでは、われ／＼が一先づさきに東京へ歸るから、あんたも、そのうちに歸

つてきて、一度わしを訪ねてください。そのときまでに、榎本さんの運命も決してゐるだらう」

「はい、ありがたう存じます」

黒田は、そのまゝ司令本部へかへつた。そして、改めてまた榎本に會つて、

「田島といふ青年は、あなたに劣らぬ片意地ぢやのう、ハ、ハ、ハ」と傳へた。

「僕に引合さうとなさつたのか」

「獨斷だが、田島君をこれへ連れて來ようとしたが、まんまと拒絶されたよ。しかし、東京へ護送されて仕置になるまでは、お身体を大切にするやうにとの、かれの傳言でしたぞ」

「さうか」

榎本は、さすがに眼がしらをうるませた。

東郷海軍留學生

箱館戦争を一轉機として日本の開化の曙がやつてきた。徳川幕府の鎖國、自給、自足主義がようやく破綻を來して開國、續いて大權投げ出し……けつして革命の慘禍をみることなくして新政府が樹立し、いつのまにか、外國並の體面をつくらうと、その基礎工作にとりかゝるやうになつた。

ところが新政府の政治に參與する人々は、まつたくの文盲に等しい頭で維新の改革に當つたので、その衝にあたつてみて、はじめて日本の文物文化が外國に比べて甚だしくおくれであることを悟つた。

「何よりも學問だ、泰西の文物を取入れなければいけない」さう、深くこゝろに銘じた。

「何もかにも外國におくれているから、一倍の努力で、外國の文物文化に追いつかなくてはならぬ」誰しもの考へだ。

箱館戦争から歸藩した青年士官東郷平八郎も、やはり痛切にそれを感じた一人だ。「列強に立遅

れてゐるわが海軍の進歩の爲に、一身を捧げよう」と、こゝろに誓つたのは當然のことだつた。かれは箱館戦争のち、薩藩から選ばれて横濱に出で、英人ワクアンに就いて英語を學んだ。人一倍毛唐嫌ひの東郷、したがつて英語を學ぶのは何よりも日本人として屈辱だとおもつたが、列強に追いつくためには、どうしても外國の文物を取入れなければならぬ。それには、何よりもまづ外國語を覺えなければならぬ。

さういふ見地から熱心に勉強した。おのれの立身出世なぞといつた考へからでは毛頭なく、一身を國家に捧げ、わが海軍を世界の第一等のものにしたための勉強だつた。

翌年は東京に出た。そして箕作塾に入つて、ひたすらに、わが海軍のために盡すべく修養にとめてゐたが、その後、「龍磯艦見習士官被仰付、月俸十四圓被下候事」といふ辭令を新政府から受取つて、いよく本格にわが海軍々人として踏みだした。

明治四年二月に、新政府が將來のわが海軍の礎となるべき十二名の青年を選び、これをアメリカとイギリスとに留學せしむることになつた。この十二名の青年のうちに、東郷も加はつて、英國に學ぶことになつた。

それは、かれの二十五才のときであつた。

その頃の、わが海軍留學生は、外國人から「支那人以下」の人種のやうにおもはれ、輕蔑されてゐた。

ことに、米艦の練習生として海軍技術の研鑽につとめてゐるわが青年士官たちは、心ない士官や水兵たちから、あるまじき侮辱をうけつゝも、攻學の念と實際を知るために、涙ぐましい努力を続けなければならなかつたので、二重三重の苦しみを嘗めさせられた。

「ようし、今にみる。世界の海軍國イギリスを押へてみせるから」と心に固く誓つたのは、東郷一人ではなかつたが、わけて負けず嫌ひの彼のことだ。涙を呑み努力に努力を重ねたので、その倦まざる精神、撓まざる氣力が、いつしか紅毛人を壓し、却つて尊敬されるやうになり、日本人の眞價をだん／＼かれ等に知らしめるやうになつた。

この間に、祖國の時局が幾變轉した。國內の情勢が急迫した。對外的に面倒な問題が頻りに起つた。日本は、どうやら世界の荒海に乗出して、危険極まる航海をつゞけてゐるやうなものだ。

明治八年の十一月、英京ロンドンの海軍留學生東郷平八郎のもとへ、突如、川村海軍大輔（後の海軍大將川村純義）から歸朝命令の電報がきた。

彼がイギリスへ渡つてから滿四年を経過してをるので、その間に、わが海軍の組織は成り、人

物を要することも急務であつたので、川村はその先輩として、また當局者として在英の東郷に對して歸朝を促したのであつた。

ところが東郷は、この命令が不満だつた。歸朝すれば、海軍の新知識として重用されるにきまつてゐる。一足飛びに相當の地位に就ける。出世の途が、先輩によつて拓かれるのだ。

あたりまへなら、飛んで歸る氣にもなるのだが、東郷はそれがいやだつた。たゞ感情的にいやだといふのではなく、祖國の爲に將來において全靈を傾け最善をつくすためには、さらに研究をつづけ、實地について見學したいといふ希望にもえてゐたからだ。

東郷は、すでに二十九歳だつた。學生としては相當の年だ。が、攻學の念は熾烈で、志の達成をおもふほかには、いさゝかの野心もなかつた。川村海軍大輔から、突如歸朝せよとの電報をうけとつて、心中はよほど面白くなかつた東郷は、ちようど要務を帯びて英國に滞在中の海軍少佐松村淳藏(後の中将)をたづねて、じぶんの信念を陳べ諒解を求めると共に、駐英公使上野景範に正式に歎願書を提出した。

私儀海軍所生徒にて當國に留學航海稽古罷在申候處、去る十日、川村海軍大輔殿より電報を以て歸朝可致趣承知仕候、依而乍恐今即ち歸朝仕候而は、未成業にもいたらず學

業半途にして先度宿志を遂げ不申候而は、實に遺憾の儀奉存候、尤も、松村海軍少佐殿英國に滞留之内逐一私存申信候、是より二年間留學被仰付度儀深く奉希望候、故に未其の趣意を川村大輔殿迄不通今則ち當國を立歸朝仕候而は、誠に残念に奉存候、且又先度テーストラリア國に一航いたし候、風陽舟に來月中旬より稽古の爲、再び乗附筈に最早約定仕候に付、何卒乍恐其情實宜敷御吟味を以て留學被仰付候様、可然速に電報掛より御掛合被下度儀偏に奉歎願候

もとより、この熱烈な歎願書は聞きとゞけられた。松村少佐と上野公使の口添によつて、東郷は希望どほり、その頃わが海軍からイギリスに注文建造中の軍艦比叡の出來上るまで、留學期を延期する、と許された。

かうして、英國に在ること滿七年、明治十一年三月二十三日、わが帝國新造軍艦比叡の廻航委員として、東郷は懐しい故國を指してミルフオードを出發した。

地中海、スエズ運河、印度洋を過ぎ、支那海も無事に五月中旬、いよ／＼あすは横濱到着といふその前夜、イギリス側廻航委員のトーマス海軍技師が、月光に濡るゝ後甲板で、東郷を捉へてこんな質問を發した。

「あなたが、わが英國へ留學なされてからは、貴國內には、いろ／＼と騒動があつたやうですな。やはり秩序がとのはぬ證據でせう」

これは、英國人として、べつに悪意あつて言つたのではないが、毛唐ぎらひの東郷は、おもしろくなかつた。

「いや、日本人は、大義名分を重んずる民族だ。主義の爲には利害をすら忘れる。その發動なのだ」といつた。トーマス技師にはその意味がわからぬ。

「とにかく、あなたの留學のあひだに征韓論の決裂があり、佐賀の亂や萩騒動が起り、挂冠して郷里に歸臥してゐた西郷さんが去年二月十五日、一萬五千の健兒を率ゐて故郷を出て、政府に伺ふことありと高調して東上の途に就き西南戦争が勃發し、たうとう城山で死んだといふが、日本人はまだく、野蠻人としての行動をすてませんな」

やはりこれは外國人としての、いや先進國が後進國に與へる忠言のつもりだつたが、東郷は、

「しかし、日本民族は、西洋諸民族のやうに、侵略的ではない」といつた。言葉が短い、トーマス技師には痛かつた。

そこで話題をいさゝか轉じて、

「あなたは、先に歸朝命令を擧んで三ケ年も留學期間を延期せしめたといふが、もし、そのとき上野公使が不同意であり、松村少佐もまた、あなたの希望を斥けたならば、もちろん留學生としてあなたは、命のまゝに歸朝せられたでせう。いかに不本意であつても、本國政府の命に服従するの外はなかつたでせう」

「むろんです」

「もし、あなたが、去年の西南戦争の際に本國に居たならば、どういふ行動をとられたか」

「……………」

「あなたは、そのとき、西郷さんに味方されたか、それとも官軍の一人として討伐に向はれたでせうか」

「そんなことは、事件に當面しなければわかりません」

「もちろんさうです。しかし西南の役には、あなたの先輩川村純義さんは、陸軍中將山縣有朋さんと共に參軍されたさうですから、さだめし、川村さんの部下として賊軍討伐に向はれたこと
でせう」

「……………」

「それとも西郷さんに與して、非命に仆れたかも知れませんが。あなたは日頃西郷さんを崇拜してゐられた様ですから……」

「……」

東郷は、南洲翁の面影を偲んだ——さうだ、おれは西南戦争のとき日本にゐたら、どうなつてゐたかわからんぞ。

トーマス技師の質問を避けながらも、東郷は月下に自分の運命を考へた。

東郷は、大西郷の直接の薫陶はうけてゐない。けれど、南洲翁の弟の吉次郎からは、幼少の時手習ひの稽古を授かり、とても愛せられてゐた。そして吉次郎から、「吉之介どんは、偉いものであるぞ」と、いはれてゐたので、少年時代から、西郷を崇拜してゐたことはたしかである。東郷が、英國へ留學に決つたころ、西郷は國元に川向があつて横濱から船で鹿兒島へ歸ることになつた。しばらく、お目にかゝられぬからといふので、東郷等はこれを波止場まで見送つた。その時西郷は、東郷に向つて、「しつかりやらんと、いかんぞ」と、低いが、力のこもつた聲で言つた。

それが、最後の言葉として、今も耳新しくひびきを残してゐる。その西郷を討伐に、官軍の一

士官として向ふことができたか。海軍々人として、中將川村純義の部下として出征しなければならぬが、しかし、崇拜する人に弓を引くことができるか……。

東郷は、トーマス技師の質問に答へなかつたのは、いつもの毛唐ざらひから、わざと言葉を避けたのではなく、實際自分自身にすら答へることができなかつたのだ。だが、當時の國元の状態を想像してみると、だん／＼そのことがはつきりしてくる。

そのころ、國元の東郷一家はどうだつたか。まづ一番の兄の四郎兵衛は、もとより大の南洲最負なので、たゞちに出陣した。四郎兵衛はこの時、四十四才であつたので、年からいふと軍人としては、もう第一線に立つことができなかった。それで給養方々——いまの兵站部に就いた。だが、薩南健兒の一人だ。弾丸が飛んでくる音や、ワーツといふ喊聲をきくと兵站部の後方勤務が手につかず、いつでも第一線に飛び出して働いた。

二番の兄はどうしたか。壯九郎は當時三十二才、もとより兄と／＼もに西郷方に加擔した。壯九郎は、その名の示すごとく勇武の氣性、南洲に従つてよく奮戦し、たうとう城山で腹を切つて死んだ。

このやうに、一家を揚げて西郷方についたのだから、末弟の平八郎も、その仲間入をしたのは